

K2A-22

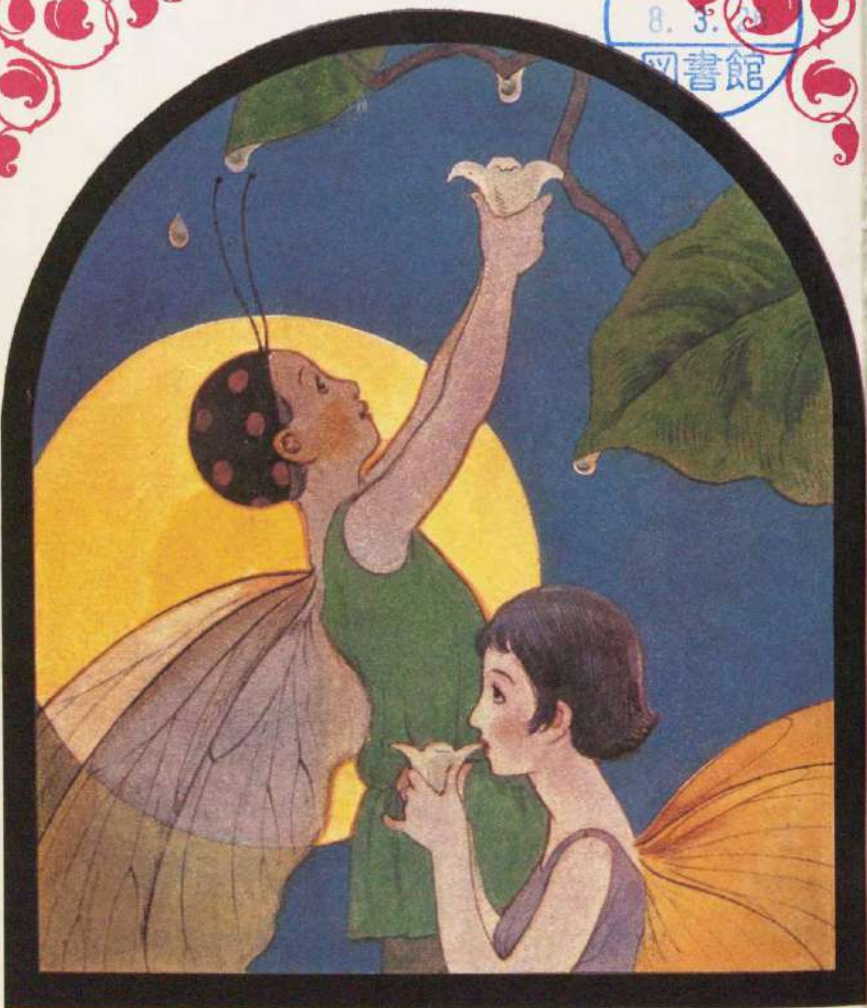
金の船社發行

Z32-B88

# 金の星

秋期特別號九月號

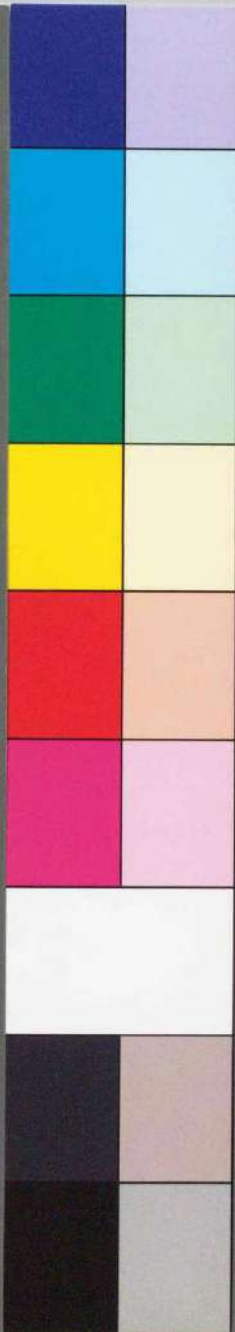
大正十一年八月六日印刷 轉本大正十一年九月五日發行



inches  
cm  
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

## Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



## Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak



に爲の界樂音本日  
るたれま込吹

世界的聲樂家

三浦環女史



ニッポノホン

鷺印レコード

第一回賣出し

戀はやさしい野邊の花よ  
PIANTO ANTICO  
サンタルチア(ナポリ民謡)  
O SOLF MIO  
メニーヤットの子守唄  
DILLE TU ROSA

第二回賣出し

お蝶夫人  
ホームスキートホーム  
アイラブユー  
さくら(琴唄)  
白い月  
お江戸日本橋

第三回賣出し

來るか來るか (民謡)  
きんにやま  
SERENADE  
メナムスの子守唄  
THE LOST ROSE OF SUMMER  
パンチンチヨ

尙新賣出しダンス用レコード  
其他面白き曲種澤山あり

信用ある蓄音器店は何れも  
鷺印レコードの専賣店なり

社會式株  
會商器音蓄本日

(金)

飲 滋  
料 強

カルピス



一滴	一杯	一壺
美味	爽快	強壯

販賣所・酒店・食料品店・藥店  
製造元・東京ラクトール株式會社



供提價特筆年萬一ラトスキエ

諸なる英 なる給れ忘を暑避の心 諸なる親 君明 なる 給れ 忘を 暑避の心 君明 なる 給れ 忘を 暑避の心

抒情詩 名作叢書

▼風なきに銀鈴鳴り出づるが如き名詩集

●(編一) 西條八十先生著 靜かなる眉

●(編二) 水谷まさる先生著 寶石の夢

●(編三) 野口雨情先生著 別後

●(編四) 竹久夢二先生著 青い小徑

●(編五) 人見東明先生著 愛のゆくへ

●(編六) 川路柳虹先生著 温室の花

▼海に野に山に、又は月かけ清き吾が家の窓に、この好詩集を繙かるべし。

町保神南區田神市京東 九七二〇四京東座口替振 社蘭交

◆エキストラ二十二號



押出式又はムア一式と云ふペン先出入は繰出式と略ど同様エキストラナイト軸正十四金ペン付 市場価格金五六圓のもの(現圖通り) 大特價金貳圓九拾五錢 市場価格 金七八圓のもの 正十八金製裝飾金輪二個付 大特價金參圓八拾五錢

▼エキストラ二十一號



安全装置インク止式正十四金ペン付エキストラナイト軸破損防備純銀廣巾編織付 軸徑三分八厘丸 市場価格四圓内外の物(現圖通り) 大特價 金 貳圓也

▼エキストラ二號



安全装置インク止式正十四金ペン付エキストラナイト軸 軸徑三分五厘丸 市場価格 金參圓内外の物(現圖通り) 大特價 金壹圓五拾錢

▼エキストラ十三號



安全装置インク止式 正十四金製輪付エキストラナイト軸正十四金ペン付軸徑二分七厘丸 市場価格 金參圓五拾錢内外の物(現圖通り) 大特價 金壹圓四拾錢

四十餘種類

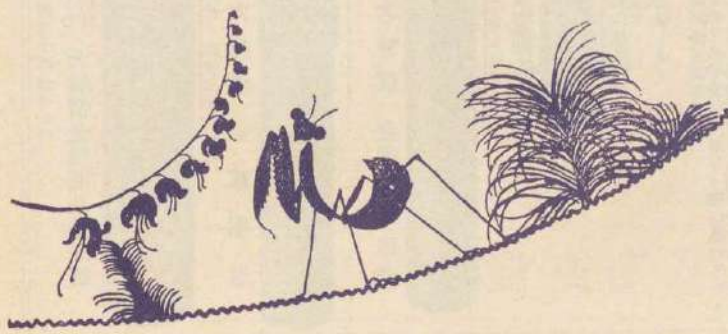
目録進呈 (押出ムア一式) 各種自働吸入式(線出式) 月状形吸入式(安全装置インク止式) 其他金銀飾付等あり  
 弊店責任 (一) 本品は御買の上貴意に適合せざる時は即時返品表販規定御申込次第無代返呈す  
 (二) 本廣告と現品と相違の節は如何なる制裁も甘受す  
 (三) 弊店販賣のエキストラ一萬年筆は使用中故障若しくは自然破損を生じたる時は無料修理提供す  
 (四) 本筆は御買の上貴意に適合せざる時は即時返品表販規定御申込次第無代返呈す  
 (五) 本筆は御買の上貴意に適合せざる時は即時返品表販規定御申込次第無代返呈す  
 (六) 本筆は御買の上貴意に適合せざる時は即時返品表販規定御申込次第無代返呈す  
 (七) 本筆は御買の上貴意に適合せざる時は即時返品表販規定御申込次第無代返呈す  
 (八) 本筆は御買の上貴意に適合せざる時は即時返品表販規定御申込次第無代返呈す  
 (九) 本筆は御買の上貴意に適合せざる時は即時返品表販規定御申込次第無代返呈す  
 (十) 本筆は御買の上貴意に適合せざる時は即時返品表販規定御申込次第無代返呈す  
 (十一) 本筆は御買の上貴意に適合せざる時は即時返品表販規定御申込次第無代返呈す  
 (十二) 本筆は御買の上貴意に適合せざる時は即時返品表販規定御申込次第無代返呈す  
 (十三) 本筆は御買の上貴意に適合せざる時は即時返品表販規定御申込次第無代返呈す  
 (十四) 本筆は御買の上貴意に適合せざる時は即時返品表販規定御申込次第無代返呈す  
 (十五) 本筆は御買の上貴意に適合せざる時は即時返品表販規定御申込次第無代返呈す  
 (十六) 本筆は御買の上貴意に適合せざる時は即時返品表販規定御申込次第無代返呈す  
 (十七) 本筆は御買の上貴意に適合せざる時は即時返品表販規定御申込次第無代返呈す  
 (十八) 本筆は御買の上貴意に適合せざる時は即時返品表販規定御申込次第無代返呈す  
 (十九) 本筆は御買の上貴意に適合せざる時は即時返品表販規定御申込次第無代返呈す  
 (二十) 本筆は御買の上貴意に適合せざる時は即時返品表販規定御申込次第無代返呈す  
 (二十一) 本筆は御買の上貴意に適合せざる時は即時返品表販規定御申込次第無代返呈す  
 (二十二) 本筆は御買の上貴意に適合せざる時は即時返品表販規定御申込次第無代返呈す  
 (二十三) 本筆は御買の上貴意に適合せざる時は即時返品表販規定御申込次第無代返呈す  
 (二十四) 本筆は御買の上貴意に適合せざる時は即時返品表販規定御申込次第無代返呈す  
 (二十五) 本筆は御買の上貴意に適合せざる時は即時返品表販規定御申込次第無代返呈す  
 (二十六) 本筆は御買の上貴意に適合せざる時は即時返品表販規定御申込次第無代返呈す  
 (二十七) 本筆は御買の上貴意に適合せざる時は即時返品表販規定御申込次第無代返呈す  
 (二十八) 本筆は御買の上貴意に適合せざる時は即時返品表販規定御申込次第無代返呈す  
 (二十九) 本筆は御買の上貴意に適合せざる時は即時返品表販規定御申込次第無代返呈す  
 (三十) 本筆は御買の上貴意に適合せざる時は即時返品表販規定御申込次第無代返呈す  
 (三十一) 本筆は御買の上貴意に適合せざる時は即時返品表販規定御申込次第無代返呈す  
 (三十二) 本筆は御買の上貴意に適合せざる時は即時返品表販規定御申込次第無代返呈す  
 (三十三) 本筆は御買の上貴意に適合せざる時は即時返品表販規定御申込次第無代返呈す  
 (三十四) 本筆は御買の上貴意に適合せざる時は即時返品表販規定御申込次第無代返呈す  
 (三十五) 本筆は御買の上貴意に適合せざる時は即時返品表販規定御申込次第無代返呈す  
 (三十六) 本筆は御買の上貴意に適合せざる時は即時返品表販規定御申込次第無代返呈す  
 (三十七) 本筆は御買の上貴意に適合せざる時は即時返品表販規定御申込次第無代返呈す  
 (三十八) 本筆は御買の上貴意に適合せざる時は即時返品表販規定御申込次第無代返呈す  
 (三十九) 本筆は御買の上貴意に適合せざる時は即時返品表販規定御申込次第無代返呈す  
 (四十) 本筆は御買の上貴意に適合せざる時は即時返品表販規定御申込次第無代返呈す

明盛進堂製作所



目次

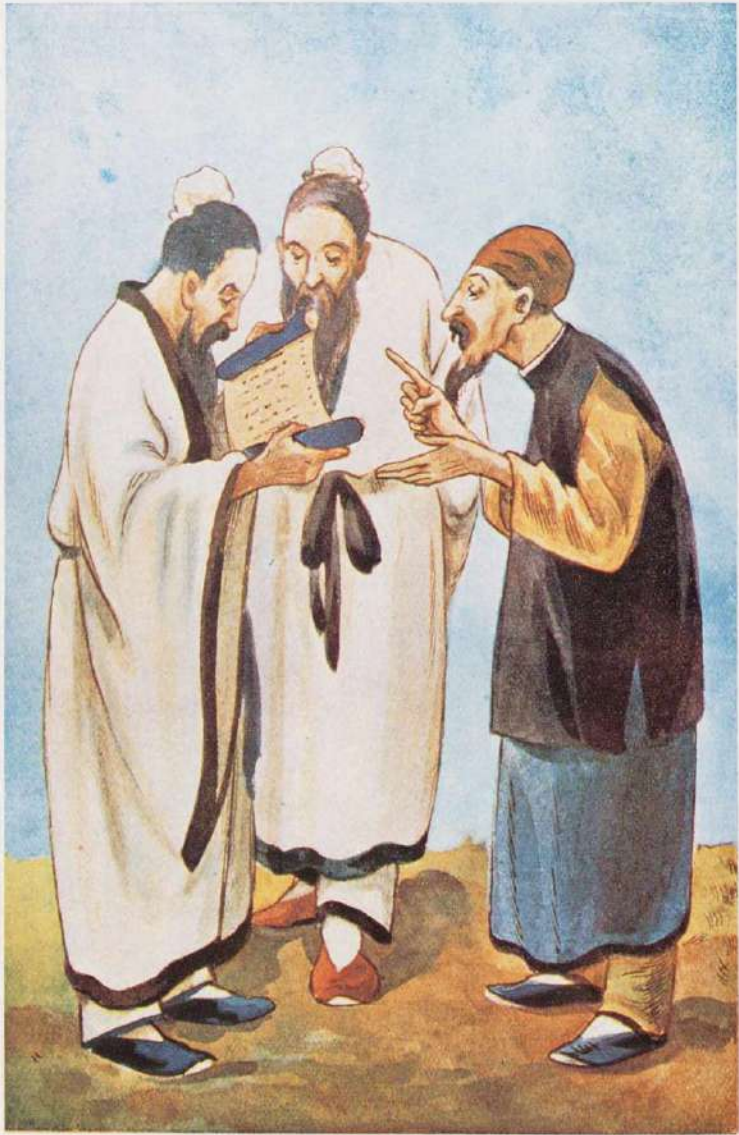
甘い夜（表紙・原色版）……………岡本 歸一  
 二人の仙人（日繪・三色版）……………野口 雨情  
 一つお星さん（曲譜・童話）……………沖野岩三郎  
 負け惜しみ（童話）……………八岡本 歸一  
 せむしの小男の死（裏なし）……………霜田 史光  
 物言ふ時計（童話）……………三小 澤 華子  
馬方さんの落し物（童話）……………三小 澤 華子  
 仙人になつた話（童話）……………三小 澤 華子  
 おもだかの花と蛙（童話）……………元若山 牧水  
 家なき子（名作童話）……………宮三宅 房子  
（幼年詩）……………毛川 添喜 久子  
 武者修行（童話）……………元藤野 英次  
 蟬と雨蛙と蛇とジヨン（童話）……………望吉田 漾之助



笛の名手と人狼の話（傳説）……………奥藤澤 衛彦  
 獵人と狐（童話劇）……………吾益 田 甫  
 辨慶と義經（史 書）……………天窪田 空穂  
 幸福の靴（童話）……………空楠山 正雄  
桐の花（推薦童話）……………丸倉 田 彦 郎  
 かちく山後日譚（童話）……………合田 中 實  
 私の好きな話（童話）……………小島政二郎  
 鈴 蟲（童話）……………杏人見 東明  
水屋（幼年詩）……………元若山 牧水 選  
飛行機（綴り方）……………三編 輯 部 選  
花ちゃん（自由書）……………三山 本 鼎 選  
 金の星講演部報告……………100  
（附 録）……………101  
 長篇物語 父戀し（第八回）……………沖野岩三郎  
朝鮮より……………







二人の仙人

岡本綺一畫

二人の仙人は顔を見合せて笑つて、彼の名前を訊ねました。それから、懐中から一巻の巻物を出して、何か調べてみました。

『お、お前の名はここに記されてゐる。お前は術を授かる因縁がある。では、今すぐこゝで授けることにしよう。』  
と、いつてから、黒い丸薬を二つ授けてくれました。

〔仙人になつた話の三十二頁を御覧下さい〕





水谷まさる新著童謡集

中山晋平、宮原禎次  
作曲。角田次郎装畫

神さまのお手の

水谷まさる著 武井武雄装幀

四版 抒情詩集 青みゆく月

四六判 天金 函入美裝  
定價 一圓五十錢  
送料 十五錢

「神さまのお手」の姉妹篇で、水谷先生最近の詩集です。  
是非一讀下さい。

四版 東京音楽學校講師 牛山充譯 (ホフマン著)  
ピアノの弾き方

四六判 天金 函入美裝  
彈き方要訣寫真入、定  
價二圓卅錢 送料十七錢

ピアノを正しく弾かうとなさるには、詰らぬ物書十冊より  
も此書一冊をお讀みになれば十分です。

山田わか著 四六判五〇〇頁 函入美本  
定價二圓八十錢 送料十八錢  
新刊 家庭の社會的意義

婦人評論家福一の山田女史の論文集で、眞の意味の婦人  
問題は此書で解決できます。四六判三五〇頁 函入上製  
瀨戸義直譯 定價二圓三十錢 送料十五錢

再版 性の社會的考察

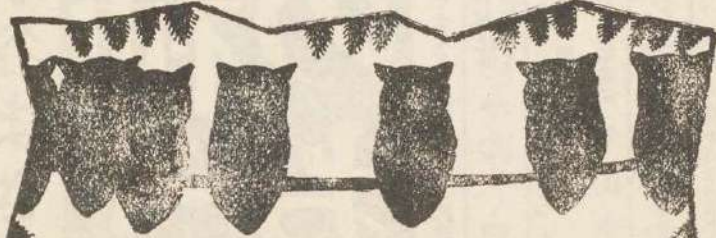
米國で有名なフイールディング氏の原著で、性の問題を  
之程眞面目に且解り易く書いた書物はありません。

△四六判、表紙石版刷、函入美裝、童謡  
△四十四、短いお話六つ、作曲五篇、色  
△紙刷挿畫三枚、定價一圓卅錢送料十錢▽

皆さんの間に限りなき崇拜と憧憬の的になつて  
居る水谷先生の童謡集が出ました。詩と夢と  
に富んだ明るい無邪氣な子供の生活が、魅力  
のある言葉で生々と面白く歌はれて居ます。

先生の詩を愛する皆さんは無論お讀み下さるでせう。又  
皆さんの愛する弟妹がたのためにもお求め下さるでせ  
う。中由、宮原兩先生の作曲も面白く、きつと全國に歌  
はれるでせう。





はに齋書おの様皆の讀愛「星の金」

野口雨情先生歌 樂譜(1)ホチの學校 送二十錢	野口雨情先生歌 本居、中山兩先生曲 送二十錢	諸大家歌 樂譜(2)山鳩 一册三十錢	佐々紅華先生作歌、曲 一册二十錢	諸大家歌 山本芳樹先生曲 一册二十錢	諸大家歌 本居長世先生曲 一册三十錢	新民話 別巻夕のた 後歌湖の歌
中山晉平先生曲 送二十錢	中山兩先生曲 送二十錢	鳩 一册三十錢	曲 送二十錢	山本芳樹先生曲 送二十錢	本居長世先生曲 送二十錢	別巻夕のた 後歌湖の歌

社 版 出 眉 白

八 九 五 四 五 京 東 若 振 ・ 八 六 四 黒 目 下 府 京 東

(金)

讀賣新聞社編

加藤まことと氏  
裝禎竝に挿畫

東京市日本橋區大傳馬町貳丁目  
内田老鶴圖刊行  
振替壹貳壹四六・電話浪花壹參五

# 新童話傑作選集第一輯

虫眼鏡外十九篇

最新刊

若草のやうに生き生きとして日に日に伸びてゆくお子様達への美しい贈り物としてこの本は新たに生れ出しました。  
お子様達の純真な心のために常になくしてはならないよい食物となるやう、その涼しい眼で光りと養ひを思ふさまとつて頂くやうと、選びに選んだ二十篇の童話がこの本に集められました。二十篇ながらそれぞれに今日以後の童話の世界に閃く星であり輝く寶石と申すことが出来ます。家庭といふ家庭。學校といふ學校にお備へになつて下さい。

日本幼稚園協會編  
幼兒に聞かせるお話

定價參圓八拾錢  
送料拾貳錢

- 山の上の木と雲の話
- 山の國の夜
- 大雲の丸
- 洞窟の魚
- 不思議な魚
- 吉野の黒い犬
- 黒い食卓
- 人魚の王
- 少少の馬
- ふりかたの馬
- 山の上の木と雲の話
- 山の國の夜
- 大雲の丸
- 洞窟の魚
- 不思議な魚
- 吉野の黒い犬
- 黒い食卓
- 人魚の王
- 少少の馬
- ふりかたの馬

(金)



# ハモニーカ

## 新輸入荷着特賣

全世界音楽界に於て有名な獨逸ホーナ  
ア會社の特製最新流行形直輸入品左の  
通り新着致ました何れも得難い品です

複音	ケートカーネ號	吹口二十穴	一個	貳圓參拾錢
同	ダイヤバーソン號	吹口二十穴	一個	貳圓拾錢
同	レグレッツシヨン號	吹口十六穴	一個	壹圓五拾錢
單音	バッチウス號	吹口十穴	一個	壹圓貳拾錢

右送料一個ニ付拾貳錢

爲替の上から元價が低廉なので此際特  
賣致ます品數に限りがありますから至  
急御註文にならぬと品切れになります

東京市浅草區北元一丁目番地  
**家庭社**  
電話浅草三六六九番

# おもしろい本... やさしい本... ために本

●さあ、みなさん！ みなさんが雲雀のやうに、自分の語を自由にならうたふべき時が來ました  
●童話とはどんなものであるか、その作り方はどうすればよいか、それを知らぬはみなさんの恥です  
●小林花眠先生著 ●ほんたうにおもしろくてたまらぬ本

## 童話の雲雀のやうに

- 一、巻頭 色刷繪畫  
二、澄宮殿下の童話  
三、新しい童話と樂譜  
一、童話は誰の作るものですか  
二、童話はどんなことを語つたか  
三、童話は誰の作るものですか  
四、童話はどんなことを語つたか

- 一、山の家... 茅野赤彦  
二、紅い雲... 小川八木  
三、小鳥の彼方... 藤村秀夫  
四、沙漠の彼方... 山田正夫  
五、鯉釣... 藤村秀夫  
六、この外には略してあります  
七、よく降る粉雪... 雲雀のあつ  
八、降れ降れ風吹け... お正月  
九、天王様... 雪の花... どんが  
十、おけら... 雪の花... どんが  
十一、この外には略してあります  
十二、この外には略してあります

教師の  
リ教習上よ  
童話の新研究

發行所 東京市浅草區北元一丁目番地  
電話浅草三六六九番  
東京市浅草區北元一丁目番地  
電話浅草三六六九番

(金)



有島武郎著 (装幀及挿畫：著者)

定價壹圓貳拾錢  
送料書留拾參錢

# 童話一房の葡萄

## 四版

小供の空想や冒險談を主題として書いた童話は澤山にあります。けれども、此本のやうに、小供の實感を小供になり代つて書いたものは、恐らく他に求めてもないだらうと思ひます。小供の欲望や秘密や悲しみや喜びを、小供と共にわかちたいのが望みだと著者も言つてをりますが、全篇にわたつて子を思ふよいお父さんとしての著者の面影がはつきり出てあります。この意味だけでも實に尊い作品であるばかりでなく、藝術味の豊かな點に於ても他に比類のない童話集であります。

東神 京樂 牛町 叢文閣 振替東京二八八九  
電話番四一八二

# 趣味の西洋史

龜倉順一郎著

新版  
四六列布製函入五百廿頁  
定價壹圓五拾錢  
送料拾四錢

〔愈下巻發賣〕本書はさきに公にして好評を得た「趣味の西洋史」の下巻として、生れたものである。上巻は遠きエジプトの史の知識を授けるやうになつてゐる。例によつて上巻同様ロマンスを挿入して、一篇の小説を読むやうに、面白く讀み行くうちに、自然と西洋歴史の面白く西洋史の知識を得るし、生徒も本書を利用すれば學科の補へとなる。それ故西洋歴史の知識のない人が本書を手に入れば自然と面白く西洋史の知識を得るし、生徒も本書を利用すれば學科の補へとなる。教師は講義の無味を避けるがため、本書のロマンスを採用すれば、面白く講義をすることが出来る。いづれにも本書は極めて、便利なものであるから、敢て江湖に推挙する次第である。

上澤謙二新著

# 物語

- ▼又逢ふ日まで(1)
- ▼夜半にひとり(2)
- ▼幼なけれど(3)
- ▼知らぬ御國へ(4)

- ▼残るおもかげ(5)
- ▼ふるさと近し(6)
- ▼曉のみ空より(7)
- ▼嬉しまぼろし(8)

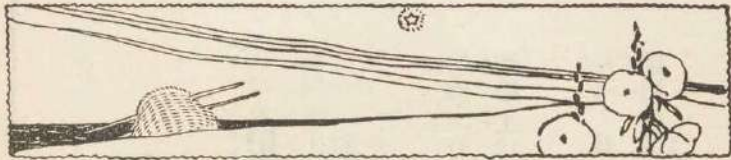
各册 八錢  
全册 十四錢

▼母のふところ(九) 新刊各册 二百頁  
▼愛こそ凡てを(十) 定價各壹圓郵税四錢

此物語は徒らな空想や理窟を避けて飽迄も自然に素直に子供の心に觸れたいと思ひます。さうして自然の同情同感に訴へて美しく情操と健全な道念を靜に植付けたいと思ひます。さうして純な魂を純なまよひにより高き世界に導きたいと思ひます。此意味で出来るだけ兒童の心理をも考へ合せ精練した材料を集めました。

發兌元 東京市麴町區準町廿番地 洛陽堂 (復往録目 呈進書業)





# 一つお星さん

本居長世作曲

Musical score for the song "Hito no Hoshi-san" (一つお星さん). The score consists of four staves of music with lyrics written below each staff.

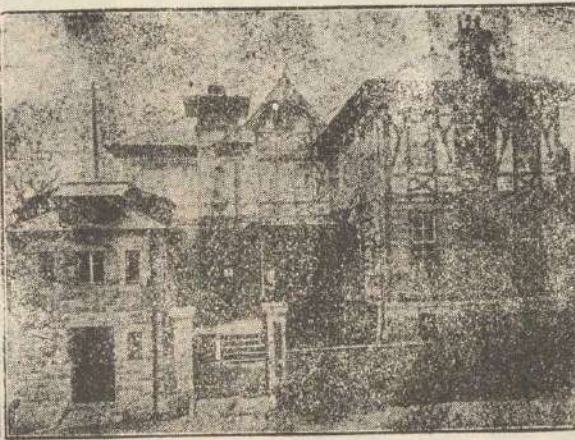
Lyrics:  
 ひとつお星さん うみのうへ ひとつお星さん  
 やねのうへ ちどはなごさで ひがくれ  
 うまはろとやで ひがくれ ひとつお星さん  
 うみのうへ ひとつお星さん

## 天下の青年は大日本國民中學會に入會する乎

- 講義が新しいから
- 會費が安いから
- 指導が良から
- 學制が正しいから
- 基礎が固いから
- 講師が善いから
- 卒業が早いから
- 成功が速いから

會長 尾崎 行雄

學監 文學博士 山内 龍吉  
 顧問 新渡戸博士 三宅 博士  
 井上博士 浮田博士  
 岡田前文藝大臣



●創立二十一年 記念大特典提供 入會の絶好機

講義録見本つき 規則書無料送付

一人前の男となるにはさうしても中等教育を受けなければいけない。中等教育の學力のない者はさうしても生存競争の勝利者たることは六ヶしい。併し家庭の事情で中學に入れない者も決して失望するには及ばない。中學校に行かずに中學卒業同様の學問をする方法がチャンと出来てゐる。それは創立以來二十年の古い運動のある講義録で有名な大日本國民中學會の通信教授法である。

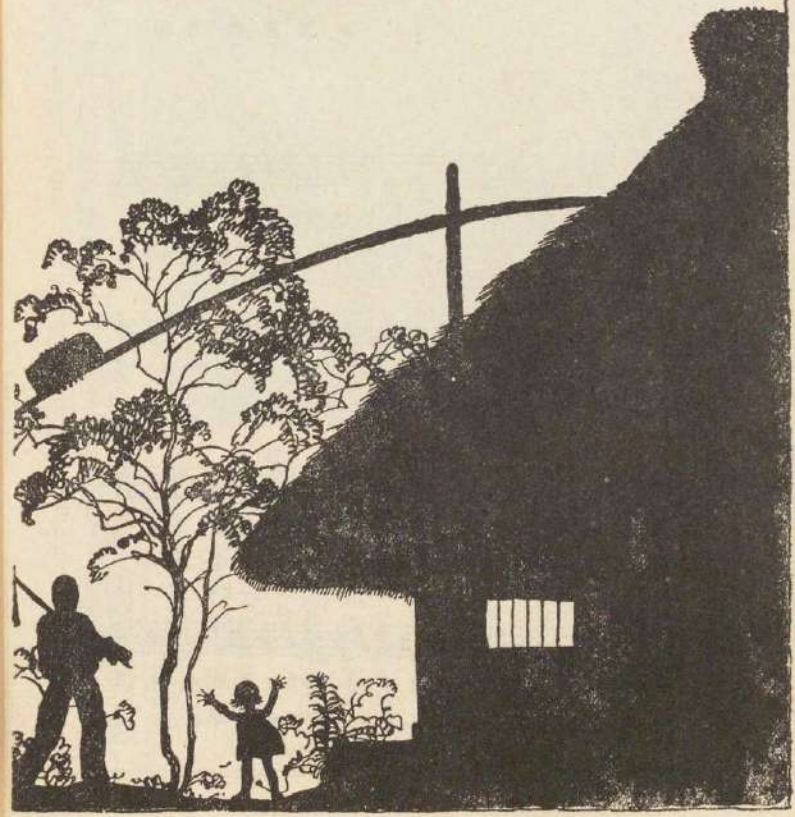
東京 麹町区 永田町 水電車通り  
 大日本國民中學會  
 電話 神田三〇〇三  
 神田三〇〇二  
 神田三〇〇一  
 振替東京四二〇〇



日ひがくくれる  
 馬うまは 厩うまやで  
 日ひがくくれる  
 海うみの上うへ  
 一ひとつ お星おほしさん  
 一ひとつ 一軒家いっけんかの  
 屋根やねの上うへ



☆  
 一ひとつ お星おほしさん  
 野口雨情  
 海うみの上うへ  
 一ひとつ お星おほしさん  
 屋根やねの上うへ  
 千鳥ちどりは 渚なぎさで





# 負け惜み

沖野岩三郎



月給五圓で小學校の先生を勤めてゐた頃、私は時計が欲しくて欲しくて堪りませんでした。けれども其頃、懐中時計の一番安いのも二圓以上出さねば買ふ事が出来ないので、月給五圓のうちで、食費を支拂ひ、本を買ひ、着物も造つて行かねばならない私には、どうしたつてそれを買ふだけの餘裕がありませんでした。

或日の事、私は學校の教員室で、新聞を読んで居ますと、その廣告欄に、

ニツケル側 太陽時計 特價金七拾錢  
永久に破損の患なく、時間極めて正確

と書いた大きな文字を見ました。そして其の廣告文の上には、龍頭巻の時計の圖まで掲げてありました。

それを見た私は、其日の夕方直ぐ川向ふの郵便局へ行つて、七十

錢の小寫巻を組んで貰つて、太陽時計を注文しました。

今日は小包郵便が着くか、明日は着くかと指折り數へて待つてゐますと、七日目に郵便達夫が小紙包を私の下宿へ届けて呉れました。

「時計だ！ ニツケル側の時計だ。永久に破損しない、時間の正確な時計だぞ」と口の中で吃きながら其の紙包みを解いて見ますとそれは龍頭も何にもない、圓形の印肉容のやうなものでした。

「こんなものか？」と思ひ乍ら蓋を取つて見ますと、それは幼い時小學校で見たことのある正午計といふ、太陽で時間をはかるものでした。

私は皆く欺された事を口惜しく思ひました。けれどもそれを掌に載せて日に照すと、その柱の影が何時何十分と可なり正確に、時を示すので、毎日それを帶の間に押込めて學校へ通ひました。

暫くすると、郡役所に小學校教員の會議があつて、私も其の會へ出る事になりました。會議がすんで歸る時、私は隣村の小學校で教師をしてゐる龍田といふ親しい友達と二人で、いろ／＼と若い空想を語りながら、日高川に沿つて村の學校の方へ歸りました。

私はその時も太陽時計を帶の間にに入れてゐましたが、その事を龍







田には破してゐました。けれども何うした機みか、  
 「沖野君、君は大きな時計を持つてゐるネ、そりやア眼覺し時計ぢやないか。」と龍田は調敷ふやうに言ひました。

で、私は笑ひ乍ら、

「僕は時計を買ふお金がないので、太陽時計を買つたんだよ。七十錢の……」と顔を紅らめながら言ひますと、龍田は、

「馬鹿だね、君はあの新聞廣告を見て、本當に龍頭巻の懐中時計が七十錢で買はれると思つたのかい？ 何と君も世間知らずだね。」と言つて、さも可笑しさうに笑ひました。

「だつて君、これは時間が頗る正確だよ、そして大變便利だ。僕は此の太陽時計さへあれば、最う君らのやうな懐中時計は要らないんだ。」

私は負惜みに然う言ひました。すると龍田は帯の間から立派な銀側時計を取出して、

「君、僕のは大枚十圓だよ！ 見給へ此の通りだ！」と云ひながら私の眼の前にそれを差出しました。

思々しいとは思つたが、私ひ持つてゐる七十錢の太陽時計よりも、遙かにそれが上等なんだから、仕方なしに私は首を伸してその銀側

時計を羨ましさうに覗きました。所が何といふ幸運が私を見舞つた事でせう！ 龍田の時計は其時びたり！と針がとまつて居ました。

「うん、時計は立派だが、止つて居ちやア時間が分らないネ。」

私は本當に破裂しさうな可笑しさを堪へながら、さう言ひました。「呀々、止つて居るネ、君、もう何時だらう？ 濟まないが、君の太陽時計で計つてみて呉れ給へ。」

龍田は周章てたやうに然う言ひました。

「よし、待ち給へ、今、計つてあげるから……」と云つた私はその太陽時計を掌に載せて、

「おい、龍田君、十一時三十分だよ。君そんな役に立たない時計をもつて居たつて駄目ぢやないか！」

私はさう言つて、はゝゝと大きな聲で笑ひました。龍田も顔を掻き乍ら、

「降参々々、永久に破損の患なく、時間極めて正確だからなア、あの太陽は。」と云つて急に空を振仰いでお日様の方を指さしました。

私は其時龍田を餘程負惜みの強い男だと思ひました。龍田も亦私を負惜みの強い男だと思つたに相違ありません。そして二人は腹を抱へて笑ひました。(をばり)



# 世むじろの男

とんがえ 3mre



昔も昔、随分古い昔のお話です。カシガルといふ國の都に住んでゐる仕立屋さんの店先へ、ある日の夕方ひよつくり、僮僕じゆうぼくの小男が入つて来て、店先へ坐りこんで面白をかしく身振りまでして歌を唄ひだしていつまでたつても歸らうともしません。仕立屋の主人も、その道化ぶりがすつかり氣に入つたと見えて、「どうだい、私達と一緒に御飯を食べる氣はないか。」と、丁度夕飯の仕度が出来たので申しますと、僮僕も喜んで「結構です、お腹のすき工合は申分なして、今が一番澤山食べられる時です。」と申しました。

そこで僮僕と主人とおかみさんとで御飯に坐りました。所が僮僕じゆうぼくの先生、餘りがつ／＼かつこんだので大きな御餅を咽喉へひつけて眼を白黒して苦しみました。主人もおかみさんも驚いていろいろ介抱しましたがそのかひもなく僮僕はその儘死んで了ひました。



サア大變な事になりました。夫婦は眞者になつてふるへ上つてしまひましたのも道理です。もしもこれが役人の耳にでも入つたが最後、自分達の命はないものに定つてゐるからです。そこでどうにかして此災難を免れなくてはと、さん／＼考へた末に夜も遅くなつてから、二人で死骸を近所のお醫者の所へ運んで、どん／＼戸を叩いて出て来た女中さんに、「急病人でございます。どうぞ御診察を願ひます。これは前金でございます。」といつて金貨を二つ渡しました。そして女中さんが奥へ入るが早いか、死骸を階下段の所へ立てかけて、一目散に逃げて行つて了ひました。所が醫者様一向患者のない所へ、前金附といふので、有頂天に喜んで階下段を飛び下りて来て、イヤといふ程僮僕に打つかつたので、僮僕じゆうぼくの死骸は入口まで轉がり落ちました。お醫者の先生驚いて「燈火だ燈火だ」となりました。





暫くすると主人が宴會から歸つて来て、手に蠟燭を持って室へ入つて來ました。すると向ふの煙出しのそばに人が立つてゐます。さては泥棒に入られたかと、傍にあつたステッキを取るより早く「泥棒」といふなり眞向から打据ゑました。「己ぬ、太い奴だ、二度と來られない様にしてやる。」と猶も打ちのめしましたが、泥棒は床の上へ打倒れたまゝ、手向もせず、聲一つたてませんでした。どうした事かと變に思つてよく見ると死んでゐます。「これは大變、人を殺した、もう私の命はない。」と今までの勇氣も何處へやら、ガタ／＼慄へ出しましたが、少し氣が落ちつくと、家中の者に氣つかれなかつた様だし、辛ひ夜中でもあるし、これ天の助けと、僞僕を往來へかつぎ出して、町の角の家の壁へ立て掛けておきました。そして、誰れにも見つからずに自分の室へ入つたので、ホツと安心して寢床へ入りました。



漸く女中が持つて來た燈火で見ると一度びつくり、あわて、僞僕を家の内へかつぎ込んで、百方手當てをして見ましたが、元より死んでゐる僞僕生きやう筈がありません。お醫者も奥さんもう／＼泣き出しましたが、いつまでかうして泣いてゐても助るものでもなしと氣がつくと、二人でほそ／＼長い間相談をしてゐましたが、何か名案が浮んだと見えて、二人がかりで死骸を屋根つたひにお隣の煙突の所まで持ち出して、脇の下へ繩をかけて煙出しの穴からそつと下して下へついた手應へがすると、繩を引き上げて屋根傳ひに自分の内の窓からはひ込んで了ひました。下へ下ろされた僞僕の死骸は倒れもせず、うまく壁へよつか／＼りました。さてその主人といふのは王様の御殿へバタと油を納める御用商人でしたが、丁度その晩は宴會へ行つて留守でしたので、庫の中では鼠どもがわが物顔にあられてゐました。





いよく、死刑の日々来て可哀な商人の首へ繩がかつた時、見物人の中から「僞僕を殺したのは私です。待つて下さい。」と云ひ乍ら然も三人まで同じ事をいつて出て来ました。役人は死刑を待たして三人の申立てを聞きました。三人は御用商人と醫者と仕立屋です。そして田舎商人のかはりに仕立屋が絞首臺に上げられました。命令が下つて仕立屋の身體が宙に吊られ出した時、王様の御側附の武官が「その死刑待て」と唖鳴り乍ら馬で飛んで来ました。繩を切つて仕立屋は下されました。武官は役人にあの僞僕は王様のお抱へでお酒に酔つて町へ抜け出した事や、今まであんなに擲られたり倒されたりしてもとれなかつたお餅も、ちよいとした拍子にひよいととれて、僞僕は生き返つたといふ事を話しましたので、自分が下手人だと思つてゐた四人が四人とも死刑を免れましたとさ。



夜も段々白んで来た頃、この町で朝早く開かれる市へ買ひ出しに来た田舎の商人が、トットと急いでやつて来てひよいと角を曲る拍子に、一人の小男がドンと打つかりました。其小男は勿論僞僕です。商人の方では、買ひ出しのお金を持つてゐるのでつきり追刺と思ひ、いきなり拳骨ではり倒しました。するとその追刺はくたくと一つの拳骨で倒れて了ひました。それでも商人は「助けてくれ、追刺だ。」となり乍ら拳骨でボカ／＼撲りつけてゐる所へ、町の警部が走つて来ました。もう少してお金を取られる所でした。商人はやつと安心して警部に訴へました。警部さんは僞僕を引き起こさうとしましたが、ぐたんとしてゐるので、氣でも失つたかよく調べ見ると死んでゐます。そこで其の場から商人は引き立てられて警察で調べられました。辯解が出来なかつたので、死刑の宣告を受けました。





## 物言ふ時計

霜田史光

或日、殿様の前へ一人の家来がออกมาして云ひました。  
「御前様、只今和蘭人だと云ふ眼の色も毛色も變つた者が参りました。御前様にお眼にかゝりたいと申して居りますが、如何いたしませう。」

それを聞いて殿様は大層珍らしく思ひ、すぐ様その者を通すやうにも申されました。

家来の案内によつてはひつて來ましたのは、成程毛色の赤い、眼の碧い、洋服を着た和蘭人でありましたから、殿様はまづ口を切りました。

「何か御用ですか。」

すると、和蘭人の手まねまじりで、やうやく云ふ所を聞けば、自分は故國から珍らしいものを幾つも持つて來た。どうかそれとこの國の品物と取り換へて貰ひたい、と云ふのでした。それを聞いて殿様は

「一體どんな物を持つてゐるのか。」と訊ねました。

和蘭人は種々な物を出して見せました。美しい花の模様を織り出した敷物だの、大理石で出來た人形だの、硝子の瓶だの、遠眼鏡だのがありました。殿様は皆珍らしいものですから



氣に入らないものは一つもありませんでしたが、とりわけ最後に「これは極く珍らしいものです。」と云つて和蘭人の出した物云ふ時計と云ふのは、殿様をすつか

り欲しがらせてしまひました。

其處で殿様は家來に命令けまして、種々なものを持つて來させました。短刀や脇差や鎧や兜、それから墨繪や、金銀で鍍めた壺や箱や、織物などを出して、それぞれ和蘭人の氣に入つたものを取り換へました。けれども和蘭人は物云ふ時計だけは、どの品物を出して見せても首を振つて取り換へませんでした。さうなると殿様は餘計欲しくなつて來て、

「ではお前さんの望みのものがあれば何なりと云つて見なさい。きつと取換へませう。」

すると和蘭人は、

「殿様、ではあなたの差してゐる黄金造りの脇差ととり換へて下さい。」と申しました。それを聞いて流石の殿様も弱つてしまひました。と云ふのは、この黄金造りの脇差と云ふのは、先祖代々傳はつてゐる一番大切な寶だつたからです。然し、殿様はどうでも物云ふ時計が欲しくなりませんでしたので遂に思ひ切つて取り換へようと云ひ出しました。それを聞いてゐた家來達は、それだけはお止めになつたがよいと諫めましたけれども、殿様はたうとう聞き入れずに、その大切な寶物の脇差と取り換へてしまひました。

「一體どんな風に物を云ふのか。」と殿様は訊いて見ました。和蘭人はそれに答へて、

「まづ殿様が朝お寢みになつてゐる時歌を歌つてお起しするでせう。それからこの時計は何んでも思ひ餘つたことや、考へつかないことを聞けば教へて呉れるし、殊に劍術のことなどはよく知つて居ります。」

それを聞いて殿様は大層喜びました。和蘭人が歸つたあとで、殿様は何か一つ聞いて見ようと思つてゐますと、恰度其



處へ家來が来て申しました。  
「御前様申上げます。只今奥女中のお花が御前様の大切に遊ばしてゐる、大花瓶を割つてしまひました。如何取計ひませうか。」

これを聞いていつもの殿様ならカッと怒つて、直ぐに「手討ちに致す」位なことをいふところですが、殿様は一時は怒りましたが、一つこの事でも時計に聞いて見ようと思ひまして、

「お花を手討ちにしてもよいか。」と訊ねて見ました。

すると時計は、大きな振子をゆつたりゆつたり振りながら、「よせよ、よせよ。」と申しました。それを聞いて殿様はお花の粗忽をのりしてやりました。家來もまたお手討とは可哀さうだと思つてゐた所なので、大層喜びました。

こんな風で、何事も時計に訊ねて見ようとするやうになりましたので、今迄亂暴な殿様だったのが、この時計が来てからだんくんと下々に情深くなりなりましたから、家來始め、多くの人民まで大層喜ぶやうになりました。それが爲めに益々家來達も忠義を盡すやうになりました。



所が、まだ殿様には一つの悪い癖がありました。それは殿様は大層剣術が好きでしたから、御指南番の關彌作と云ふのを相手に熱心に稽古されました。それで大分上達いたしました。が、何しろ教へる方が家來で、教はる方が殿様なので、それからどうも外の門人達のやうに手ひどくやるわけにはゆきません。勢ひ稽古もい、加減なもので彌作も時々わざと負けてゐました。すると殿様はこれは本當に自分が剣術の名人になつたのだと思ひ、それから家來の誰彼の容赦なく對手を申し付けました。對手になる家來は、やつて見ると殿様の剣術がから下手なのがすぐわかりますが、打ち込んで怒られてしまふと大變だと思つて、皆遠慮してわざと負けました。それで殿様は益々天狗になつて、

「どうだ、余に勝つものはまづないだらう。して見ると余は剣術の名人だな」と云つて自慢なさいました。家來も家來で「仰せの通りでございます。私達などはとても叶ひません。殿様は日本一かも知れません。」と申しました。すると殿様ははくく喜んでその家來に褒美をやつたりなぞします。そんな風ですから家來達は負かして怒られるよりは負けて

褒美を買つた方がよいので、指南番の彌作を始め、皆殿様の剣術をほめて、たうとう日本一だと云ふことにしてしまひました。

所で、殿様は時計に訊ねて見ようと思ひまして、「家來達は私の剣術を日本一だと云ふが、本當だらうか。」と訊きました。すると時計は例のやうに大きな振子をゆつたりゆつたり振りながら、

「まだく、まだく」と申しました。して見ると自分よりも上手な剣術使が何處かに居るのだなと殿様は思ひました。それで、早速家來に命令してその上手な剣術使を探させました。

やがて家來は一人の上手な剣術使を連れて來ました。殿様は早速その人と試合をして見ようと云ひました。二人は竹刀をとつて道場に立ちました。

「遠慮せず打つて參れ。」  
「はッ、無禮のところはお許し下さい。」と云つてその剣術使は殿様の前へ立つて見ますと、隙だらけで、これは大變下手だと思ひました。打ち込むのは雑作もないと思ひましたが、



わざと打ち込まずに殿様の打つて来るのを、防いでばかりる  
ました。すると殿様はだん／＼疲れて来て、額からは汗がほ  
たはたと出て、ひよろ／＼になつてしまひました。劍術使は  
可笑くてなりません、この上やつてゐると殿様が倒れてし  
まひさうなので、ヒョイとわざとはづして打たれました。そ  
して、

「とても殿様には及びません。」と申しました。殿様は汗を拭  
き／＼、

「うむ。中々其方も強い、随分  
骨が折れた。」

と云つて、澤山の褒美を呉れ、  
その上に二百石で召抱へました。

其處で殿様はまた時計の前へ  
行つて申しました。

「どうだ、今度は日本一だらう。」  
すると時計は例の如く振子を  
振りながら、

「まだ／＼、まだ／＼。」と申し

術は日本一だらう。」と聞いて見  
ました。すると、時計は相變ら  
ず呑気さうに振子を振りながら、  
いつものやうに、

「まだ／＼、まだ／＼。」と申し  
ましたので、殿様は今度は怒つ  
てしまひました。そしていきな  
り竹刀をとつてその時計をいや  
と云ふほど打ちました。

忽ちボカーンと云ふ音として  
時計はこはれました。すると不  
思議にも騰々と煙が出て室の中  
に一杯になりました。

殿様は煙に取り巻かれて、眼  
が眩んで其の場へ倒れてしまひ  
ました。

暫らくして殿様は氣が付いて  
見ると、眼の前へ赤い着物を着

ました。

殿様は落膽してしまひました。そしてまだ強い奴があるの  
かと思ひました。また家來達に云ひ付けてその強い劍術使  
を探させました。家來達は相談して、誰だつて殿様の下手な  
ことはわかつてゐるので、この上探して連れて来たとして、わ  
ざと負けるのなら、骨折り損だからと云ふので、探しに出掛  
けませんでした。そして幾日か経つてから、

「日本國中を探しましたけれ  
ども、殿様より強さうな者に  
は出遇ひませんでした。」と申  
上げましたので、殿様はほく  
ほく喜んで、では自分より強  
い者がゐるのだけれども死ん  
でしまつたのかも知れない、  
して見ると今度はそれは間違ひ  
なく自分が日本一だらうと思  
つて時計に向ひ、

「どうだ、今度はそは余の劍  
た一人の子供が立つてのまし  
た。

殿様はまだ見たこともない  
子供なので、  
「お前は何だ。」と咎めるやう  
に云ひますと、  
「私は時計の精でございま  
す。」とその子供は答へまし  
た。

「何、時計の精だと、ではお  
前はこの時計の中に今迄はひ  
つてゐたのか。」  
「さやうでございます。」  
「うむ、それはまた珍らしい  
ことだ。そしてお前は余に何  
か用があるのか。」

「殿様があまりに劍術の天狗  
ですから、お諫め申さうと思





ひまして。」

「生意氣なことを云ふな、余はまだ誰にも負けたことがないぞ。それなのにこの時計奴は氣に喰はぬことを云ふから、ぶちこはしたのだ。それでお前は余を恨むのか。」

「いゝえ、決してさういふ譯ではありません。私は殿様の長過ぎる天狗の鼻を折つて上げたのです。」

「此奴云はして置けばいゝ氣になつて生意氣なことを申す、かうしてやる。」

と怒つた殿様はいきなり竹刀をとつて只一打ちと、子供の頭に打ちつけました。所がその子供はばつと姿が消えてしまひました。殿様は勢ひ餘つて前へのめりましました。

「殿様、こちらでございます。」  
と云ふ聲に後を振り向いて見ると子供は其處に立つてゐましたので、

「已れッ」と云つて殿様はまた打つて掛りました。所がまた子供の姿は消えてしまひました。そしてまた殿様が前へのめつた時、殿様の首筋を子供の小さい手がグツと壓しつけました。その手は小さいけれど、とても力があつて、殿様はもう

身動きも出来ない位でした。

「殿様、どうです、あなたが日本一でないと云ふことがわかりましたか。いや、日本一どころか、あなたは家來の誰にだつて負けます。それを家來達が遠慮してわざと負けてゐるのです。これからはもう劍術の自慢などはお止めなさい。」

時計の箱はさう云つてグン／＼と殿様を壓しつけましたので、殿様は苦しうて堪りませんでした。

「悪かつた、悪かつた、かんべんして呉れ、もう自慢はせぬ。」と殿様はやつと云ひました。

「宜しい、それでは離して上げませう。」

と云つて、子供の手が離れたので、殿様はやうやく起き上つた時に、見ると子供の姿はありません。おや訝しいぞ、と思つて上を見ると、たしかに自分がこはした筈の時計が以前のまゝで、いつものやうにゆつたり／＼と振子を振つてゐました。

殿様は夢ではないかと不思議に思ひましたが、それからは劍術の自慢はすつかり止め、何事も時計に相談してなさいましたので、その國はよく治りました。(をばり)

### 馬方さんのおし物

神奈川縣小田原女子學校

小澤尊子



フミちゃんのお部屋の上にお習字の紙でふんちんをかつてなりました。或日の事フミちゃんが高いふみ臺をして、やつと綱のお習字の紙をかたづけ出しました。音のびをしながらだんだんそへて行くうちに、フミちゃんのお愛いゝ手に何か軟かな物がさほりました。「アラッ！」とフミちゃんばびつくりして、可愛いお目をキョロ／＼させましたが、すぐに其紙を大事さうに両手にのせて、こはばふみ臺からおりました。一枚々々とむだ紙

のそばに捨てゝあらつしやいとおつしやいふに、フミちゃんばしかたなしに又六匹の兄弟を元の牛紙に包みました。そして大切さうにかへて家を出ました。けれどフミちゃんば、小鼠の兄弟をゴミ箱にはすてようとしないで、外の道ばたにおきました。ちやうど其時、馬方が通りかゝりました。馬力が町の角に行つた時分、近所の叔母さんは紙包の落ちてゐるのに氣がついて近所の三郎さんをお

をのばしてソツとのぞくと、赤茶色した小さな物がムク／＼動いて居ます。  
「アラッ！可愛い小鼠だわ。」思はすフミちゃんばさげました。思はだお目々が開いてゐないわ。小さいのね。一匹二匹三匹四匹で六匹の兄弟でした。軟かな牛紙の中に仲よくくづくまつてゐる小鼠は、何だか可愛いくてたまりませんでした。けれど、フミちゃんのお母さんは、そんなもの早く、ゴミ箱へて来て  
「三ちゃん、馬力の親方さんがみんな物をおとして行きましたよ。だからとめてお上げなさい。」  
三郎さんはワンワンと云ひながら其紙包を持ちました。そして大きな聲で、  
「オーイ、叔父さん、お待ちよー、オーイ、おぢさんおつ／＼としたよー」とどなりながら、おつかけてゆきました。けれど町の角をまがつた親方さんばどこに風が吹くんだと云ふ様な顔しながらどん／＼いつてしまひました。  
三郎さんばしかたなしに、又た大事にかへて来て  
「叔母さん、馬力屋のをぢさんばいつてしまつたよ」と云ふと、叔母さんが「それなら開けてこらん」と云つたので、三郎さんばその紙をときばじめました。  
「オヤ、なんだか赤茶色の物がムク／＼動いてゐるよ。三郎さんの瞳は、お星様の様にかがやいて見えました。どなたがおとしたかわからないまいごのまいごの小鼠ば、どぶ板の上で、目もみえなげりや、なく事もしらずに仲よくをりました。(をばり)」



# 仙人になつた話

水谷まさる



ある年、成仙公といふ人は都へ使ひに行きました。その歸り途のこと、長沙郡といふ處を通つて來ると、とつぶり日が暮れてしまいました。次の驛舎へ行けば宿屋がありますが、まだくぐり歩かなければならぬので、ちやうど道傍に枝の張つた樹があるのをいゝ幸ひに、この樹の下に夜露を避けて、一晚を明かすことにしました。まつ上衣を脱いで樹の根元に敷き、そのうへに腰をおろして、背中は幹にもたせかけるやうにしました。それから、腕組みをして眼をつぶると、晝間の疲れですぐにうとうとしはじめました。すると、樹のうへで、人の話し聲がするのです。成仙公はせつかく眠りかけたところを、その話し聲のために眼を覺まされたので、忌々しく思つて軽く舌うちをしました。だが、

上

もしかすると、夜盗ではないかしらと思つたものですから、ちつとその話し聲に耳を傾けてみました。

少し聞いてゐるうちに、成仙公はなあんだと思ひました。それは夜盗ではなく、二人の藥賣りが、藥のことを話してゐるのです。

成仙公は拍子抜けがして、そのまゝ眼をつぶりました。そのうちに、二人の藥賣りも寝てしまつたらしく、話し聲は聞えなくなりまして。靜かになつたので、やがて成仙公はぐつすり寝てしまいました。

あくる朝、成仙公は眼を覺まして、樹の上に寝た二人の藥賣りは、どうしたかしらと思ひながら、ひよいと見あけると、昨夜話し聲がしたあたりの枝に、二羽の大きな白い鶴がゐりました。

「變だなあ。さうすると、昨夜のは人ではなくて、鶴だつたのかしら。でも、そんな筈はないだらうに。まつたく、不思議なことがあるものだ。」

思はず成仙公は、そんなことを呟きました。でも、鶴に向つて訊ねても、仕方がないわけですから、上衣を着て

そのまゝ、歩きだしました。

やがて、長沙の市に着きました。ふと見ると、自分の前に、白い傘をさして行く二人の男がゐります。聞くとともに、二人の話を聞きますと、昨夜は長沙郡の或る道傍の樹で野宿したといふやうなことを話し合つてゐるのでした。成仙公はこればかりかと思つたので、

「もし〜」と、聲をかけて呼びとめました。

「なんですか。」と、二人はふり向きませんでした。

「別に用事といふわけでもありませんが、もう晝ですから晝飯を食べたいと思ふのですが、旅に出て一人ではつねんと御飯を食へるのは、あまり感心したものではありません。お見うけするところ、あなた方も旅の方のやうですから、よかつたら御一緒に御飯を召しあがつて、きたいと思ひましたので、ちよいとお呼びとめたのでし〜」

「あ、さうですか。そんなわけなら、御一緒に食べませう。」と、一人が云ひました。そして連れ、にも促がしました。

「ねえ、どうぞどこかで食べるのだら、この方と御一緒に食べることにませう。」



「それがいゝでせう。」  
連れの男も承知しましたので、成仙公はさきに立つて、あの料理屋へ入りました。二人も續いて入りました。

成仙公は大いに御馳走をしました。そして、いろんな世間話をしながらも、二人の男の容子をよくよく眺めました。どこと云つて取りたて、變つてもゐないやうでしたが、何となく普通の人と變つてゐるやうでもありました。そのうちに、二人はさんく御馳走を食べてしまふと、お禮の言葉も云はずに、黙つてふいと出て行つてしまひました。

「やつぱり、たゞの人ではないぞ。」

成仙公はさう思つたものですから、勘定をすますと大急ぎでその料理屋を出て、二人の後を追ひました。五六里ばかり行つた時、二人は成仙公がついて來るのを見て、大いに怪しんだらしく、

「君は何かわれ〜に願ひことでもあるのかね。」と、一人の男が云ひました。

成仙公は丁寧な言葉で答へました。

「わたくしは、あなた方が仙人の道に達してをられること



を、もはや疑ふことが出来ません。どうか、その道を授けていたゞきたいと思ふのです。自分の卑しい者ではありませんけれど……」

すると、二人は顔を見合せて笑つて、彼の名前を訊ねました。それから、懐中から一卷の巻物を出して、何か調べてゐましたが、

「お、お前の名はこゝに記されてゐる。お前は道を授かる因縁がある。では、今すぐにこゝで、授けることにしよう。」と、云つてから、黒い丸薬を二つ授けてくれました。そして、そのまゝ二人の影は、消えてしまひました。

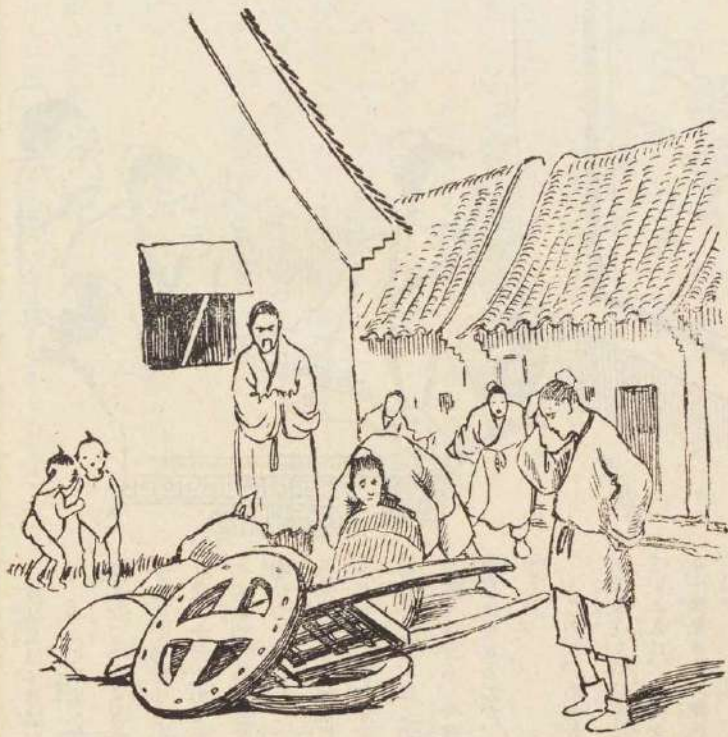
成仙公は手のひらに載つてゐる二つの丸薬を、ていねいに押しいたゞいて、さつそく飲みました。これまでに味つたこともない味が、氣持よく舌に浸みしました。そして、俄かに氣持が新らしくなつたかと思ふうちに、傍の林で、鳥が啼いてゐる聲の意味が、ちやんとわかるので、嬉しくて嬉りませんでした。彼は仙人になつたのです。

## 下

成仙公は不思議なことで、仙人になることが出来ましたので、勇んで故郷へ歸つてまゐりました。彼は故郷では、臨武縣のごくつまらない役人をしてゐました。それといふのは、いつたい彼は小さい時から、身體ばかり大きくて歳十三の時には、七尺もあつたくらいでしたが、性質はおとなしく、いつも黙つてゐましたので、人々は彼のことを痴者だといつて嘲けてゐました。けれど、ほんとは決して痴者でもなく、人の見てゐない間に大いに書物を読み、深い研究をしてをりました。でも自分の學問を表さなかつたものだから、役人になつても、ほんの小役人にしかなれなかつたのです。そんな風ですから、今度仙人の道を得るやうになつても、心では喜びはしましたが、決して人々に吹聴したりなんかしませんでした。

ところが、ある日、縣の長官に命ぜられて、府君といふ役の周昕といふ人のところへ、お使ひに行きました。この周昕といふ人は、人物を見抜く力があつたものですから、成仙公を一見すると大變に感心して、自分のところに留めて、文學の主簿といふ高い地位の役につかせました。





ある時、成仙公は仲間と役所で、いろいろ世間話をしてゐましたが、庭の木に雀がたくさん飛んで来て、囀つてゐるのを聞くと、ひとり可笑しがつて、笑ひました。

仲間の一人が、  
「何をそんなに可笑しがつてゐるのかね。」と、不思議さうに訊ねました。すると、成仙公は、

「だつて可笑しくて堪らないんだよ。この市の東の端れで、米を積んだ荷車がひっくり返つて、米が路のうへにこぼれてゐるから、食べに行かうと、あの雀どもは話してゐるんだからね。」と、答へました。

仲間は雀の言葉が君にわかる筈がないといふわけで、信用しませんでした。が、試しに市の東の端れに小使を見せ遣り

ました。小使が歸つて来て返事したことは、もちろん仲間を驚かしました。だつて、成仙公がいつた通りでしたから。

ところが、このことが大そう評判になり、成仙公の名前がばつと擴がりましたが、ある者は却つて大いに嘲けて、周听が怪しい者を高い地位の役人にしたと云つて、悪く言ひました。

けれど、周听はそんな悪口には、てんで耳も貸しませんでした。

すると、ある年の元日、周听は多くの役人を集めて、酒を飲んで元日を祝ひました。酒盞が座敷をひとめぐりした頃、成仙公はその場に坐つたまゝ、酒を一口含んで、それを東南の方に向つて、ぶつと吐き出しました。みんなは大いにその不作法に驚きました。

「どうして、そんなことをしたのか。」と、誰か顔色を變へて、怒つて訊ねました。  
「だつて、今の今、臨武縣に火事が起つたので、さつそく酒を吐いて救つたのさ。」と、成仙公は、平氣な顔をして立ひました。

これを聞いて人々は、ますます怒りました。自分が不作法をして、嘘をついてごまかすとはひどいと思つたからでした。

けれど、翌日になつてみると、人々は成仙公に對して怒つたことを、悪かつたと思はずにはゐられませんでした。

だつて、その翌日、臨武縣の長官の張濟から、急使に手紙を持たせて寄越したからです。そして、その手紙にはかう書いてあつたからです。

「……元日の祝賀會で、昨日多くの役人たちと酒を飲んでゐますと、西北の近隣から俄かに火事が起つて、縣の役所も焼け、全市は見る間に焼け土となるかと思はれましたが、今まで南風が吹き荒んでゐましたのに、ふいに西北の方から黒雲が起つて、大雨が降つて來ましたため、大きくならぬうちに火事を消し止めることが出來ました。たゞ一つ、をかしいことは、その雨が大そう酒の香がしたことです。」

このことがあつたために、成仙公はますます評判になりました。またこの成仙公を取りたてた周听も、大いに名前をあげました。(をばり)





おもたかの花はなと蛙かはづ

若山 牧水

ちやつほんちやつほん  
蛙かはづがとびこむ  
池いけに咲いたは

おもたかの花はなだよ  
ちやつほんちやつほん  
蛙かはづがとびこむ  
藻草もくそううごくは  
鮒ふなの尻尾しっぽ  
ちやつほんちやつほん  
蛙かはづがとびこむ  
ところで皆みなさんおもたかの  
花はなのめぐりはいちめんの  
蛙かはづの目玉めだまになりました



# 家なき子(つぐき)

## 三宅房子

### 犬と猿の死



犬が夢中で吠えておりました。私はびつくりして目を覺しました。私はとび起きたのです。私は餘程ながい間眠つてしまつたと見えて、焚火の火はもう消えさうになつておりました。カビは外の方を見て、切りと吠えてゐます。けれども不思議なことには、セルビノの聲もドルスの聲もしないのです。

『どうしたんだ。どうしたんだ。』たうとう親方も目を覺して起きて来ました。

『おや、お前眠つてゐたのだね。火が消えてゐるぢやないか。』親方は驚いて私を叱りました。カビはまだ夢中で吠えてゐます。しかし入口で吠えてゐるだけで外へは一步も出ようとしません。

その時でした。小屋の後の方でカビの聲に答へて、二聲三聲物凄いやうな、恐しいやうな唸り聲がしたのです。それはたしかにドルスの聲だと解りました。私は外へ出ようと思つた。すると親方は私の肩を掴へました。

『出てはいけない。それよりか薪をくべるんだ。』さういはれたので、私が焚火の中へ薪をくべてみると、親方は火のついた薪をその中から一本引出して、それを炬火にて手に持ちました。

『さア、行つて見て来よう。お前私の後からついてお出で。カビ、お前は先へ行くんだ。』親方がさういつて外へ出ると、また激しく吠える聲がしました。カビは顔へ乍ら後ずさりをして私と親方の間に身を辣めました。『狼だ！セルビノとドルスは何處へ行つたらう。』さういつた親方の聲は、物凄く響きました。

私は何と云つていゝか分りませんでした。二匹の犬は私が眠つた間に小屋を抜出したのです。そして、狼につかまへられたのです。

『ルミ！お前も炬火をお持ち！助けに行くんだから。』と親方はいひました。

私は狼のこはい話を聞いておりました。けれども、ちつとしてゐる時ではありませんからすぐに炬火をとつて来て親方の後につきました。

ところが、犬も狼も見えないのでした。ただ雪の上に二匹の犬の足跡がポツン／＼とついてゐるだけです。私と親方はその足跡を目當てにして小屋の廻りを歩きました。すると少し離れた雪の中に、何か歌のこゝろがり廻つたやうな跡が見えたのです。

『カビ、行つて見て来い。』親方は叫びました。と同時に、セルビノとドルスを呼びよせる呼子をピーツと吹きました。

けれども、それに答へる聲はしませんでした。いつもは勇敢で従順なカビですが、その時ばかりはしつかりと私達にくつついてゐるだけで、駆出すどころではありません。親方はまた呼子を吹きました。しかし、何の答もありませんでした。あゝ、可哀さうなセルビノとドルスはどうなつたのでせうか。『狼が捕へて行つたのだ。』親方は私の心配してゐる事をきつぱりいひました。こんなに呼

子を吹いても答へがないのだからもう駄目だ。うつかり出て行かうものなら、狼はわれ／＼にまでかゝつてくるかも知れない。

たうとう親方はあきらめて、歸りかけました。あゝその時の私は、どんなにつらかつたでせう。私さへ眠らなかつたらこんな事にはならなかつたのに。

小屋に歸つた時、また一つびつくりする事が起つておりました。狼のジョリーケールが見えないのです。着せて置いた毛布だけが焚火の前にぬき捨て、あるだけで、何處を探してもゐないのです。親方は驚いて呼んで歩きましたが、出て来ませんでした。

親方は痲痺を起してゐるやうでした。私もがつかりしてしまひました。

私は狼も猿にさらはれたのではないかと思つて、親方にたづねました。

『いや、猿は小屋の中まで入つて来ることはない。ジョリーケールは多分怖くなつて私達がある間に外へ出て、何處へか隠れたに違ひない。私はそれが心配なのだ。この寒さではきつと風を引くだらう。寒さには極く弱い

のだからね。』

『では、もつと探して見ませう。』

私はさういつて、またそこらを探しました。でも、矢張り無駄でした。親方はがつかりしたやうに、兩手で頭を抑へて焚火の前に坐つておりました。

寒さは明方が近づくに従つていよいよひどくなりました。月口から入つて来る風で骨まで凍るやうでした。この寒さではたとひ狼を目つけたとしても、生きてゐるかどうか心配でした。

やうやくにして夜が明けた時、親方と私は待ち兼ねて外へ出ました。

私達が下を向いて猿の足跡をさがしてゐると、カビが上の方を見て切と／＼吠え出しました。私達に上の方を見ると合圖してゐるやうなのです。

見ると、樫の木の上に何か黒い小さなものが動いてゐました。これが可哀さうな狼のジョリーケールだつたのです。

可哀さうな猿！彼は凍えてしまつたに違ひありません。親方はやさしく呼びました。で



も猿は動きませんでした。親方は幾度もく  
呼びました。でも、少しも動かないのです。  
あゝ私はどうしたらいいでせう。

私は親方とめるのもきかないで、樫の木  
に登って行きました。木は氷と雪でつゝま  
れてあるので、登るのはなかく、難しい爲事  
でした。でも、漸くにして登りついで見ると  
猿は目だけ光らせてまだ生きてゐました。私  
はあわて、捕へようと思いました。すると、猿  
は急に立上つて、枝から枝へと渡つて行きま  
したが、ひよいと親方の肩の上へ飛び下りて  
その上衣の中へかくれました。

そこで私達は、急いで小屋へ歸つて來まし  
た。猿をあたためてやらなければならなかつ  
たからです。親方は猿の手足をもつて、赤ん  
坊を押へるやうにして焚火にあてました。そ  
れから毛布をひろげてその中にくるみました  
しかし、猿の身体は一向に暖りませんでした  
が、たゞ、身軀ひをする音が聞えます。血  
管の血が凍つてしまつたのでせうか。

「急いで小屋を出て村まで行かう。さもない  
と、シヨリークールは死ぬかも知れない。す



ぐ出立しよう。親方はさういつて、毛布でく  
るんだ猿を自分のチョッキの下のすく胸にふ  
れる處へ入れました。出発の支度はすぐに出  
來ました。  
大通りへ出て十分ほど行くと、途中で馬車

にあひました。  
「もう一時間位で村に出られるよ。」と駈者は  
敬へてくれました。これで大變元気がつきま  
した。  
漸くのこと、村へ着いた時、親方は立派な  
宿屋へ入つて行きました。これ  
までは何時も木賃宿しか宿つた  
ことがないので、私は不思議に  
思つてみると、宿屋の女中は  
きに私達を一間に案内しました  
「早く寢床にお入り。さア早く」  
と親方はいひました。私はびつ  
くりして親方の顔を見ました。  
寢るより先に私は何か食べた  
かつたのです。

でも、親方のいひつけですか  
ら、仕方なく寢臺の上へ寝て、  
蒲團をかぶりました。  
親方はふところから猿を出し  
て火の上にあてました。まるで  
蒸焼にでもするやうに火の上で  
くるく／＼廻してゐるので、女中

は目を丸くして見てゐました。  
「暖まつたか。」と親方はしばらくして私に尋  
ねました。

「むされさうです。」

「さうか、それでいゝ。」  
親方は急いで私の寢てゐる傍へ來て、猿を  
私がしつかり胸に抱いてやるのだといひまし  
た。猿は何も彼もあきらめてゐるやうに、お  
となしく私に抱かれてゐました。猿の身体は  
冷いどころではなく、焼けるやうにあつくな  
つてゐました。



親方は一旦外へ出て行きましたが、間もな  
くお醫者をつれて戻つて來ました。お醫者は  
猿の身體を診察して、「これは肺炎だ」といひ  
ました。シヨリークールは前にも一度肺炎に  
かゝつた事があつたのです。お醫者はお薬を  
くれて歸つて行きました。  
その後幾日かの間、私達はこの宿で過しま  
したが、シヨリークールの病氣は一向によく  
ならないで、咳がたいへんに出て來ました。  
そのたんびに、小さな身體をふるはせてひど  
く苦しがりました。

私は親方が外へ行つて  
しまふと、猿と二人で宿  
屋でぼんやりしてゐまし  
たが、ある朝のこと、親  
方は外から歸つて來て、  
宿屋の御亭主がたまつて  
ある宿賃の催促をしたと  
私に話しました。(親方が  
お金の話をしたのは、いま  
でに一度だつてなかつた  
のです。)

「今度といふ今度ばもう懐に五十銭しか残つ  
てゐない。」と親方は話したのです。  
かうなつては、たゞ一つの方法として今夜  
早速一と興行をやる外はないと親方はいひま  
した。しかし、セルビノもドルスもシヨリ  
ークールもゐなくて、芝居が出来るでせうか。  
「出来ても出来なくても、二十圓のお金をこ  
しらへなければならぬ。」と、親方はしなれ  
た顔をしていひました。シヨリークールの病  
氣も癒してやらなければならぬし、部屋に  
は火がなければならぬし、薬も買はなければ  
ならぬし、宿屋にも拂はなければならぬ  
のです。それにはどうしても二十圓のお金  
が入用なのです。  
この村で二十圓、しかも此の寒空で、こん  
な哀れな一座で出来るでせうか。  
私がシヨリークールと一しよに宿屋で待つ  
てゐる間に、親方は一軒の見世物小屋を見つ  
けて來ました。親方は雪の中を行つたり來た  
りして廣告ビラを方々に貼つたり、二三枚の  
板で舞臺をこしらへたりしてゐました。それ  
から残つてゐた五十銭でみんな樂器を買つて





三四  
カヒと私のことなのです。

カヒと私のことなのです。廣告屋の太鼓の音を聞いた時、カヒは吠えました。猿のジョリークールは身体が悪い最中なのに矢張り起上らうとしました。猿は太鼓の音とカヒの吠える聲とを聞いて芝居がはじまることを知ったのです。

『起きてはいけませんよ。』といって、私は猿を無理に寢床に入れたようにしました。すると、ジョリークールは手を合せてお辭儀をしながら芝居につかふ大將の軍服と羽のついた帽子をくれと私にせがむのです。しかし、いくら頼んでも私が何にもしてやらなかつたので、今度は怒って見せました。そしてたうとうお終ひは涙さへこぼしました。

其處へ丁度親方が歸つて来ました。『お前は芝居がしたいのか。親方はたづねました。ジョリークールは口がきけません。でも身體でさうです。』と叫んでゐるやうに思はれました。といつて、この寒さに外へ出せば彼を殺すことになるのはよくわかつてゐますから、火をこしらへたり、毛布で身體をくるでやつたりして置いて、知らない間に出て行

しまつて、それを半分づつに切つて明りを二倍にして使ふ工夫をしました。

しかし、親方は今夜どんな番組をこしらへる積りなのでせう。さう思つて心配してゐると、丁度其處へ、赤い帽子をかぶつた村の廣告屋が来て、太鼓をドンガラ／＼騒々しくした

たいて私達の興行の番組を讀みあげました。その口上を聞いてゐると、よくも縁りが悪くないと思はれる程、親方は思ひ切つて大きな吹鞭をさせてゐるのです。何でも世界で最も有名な藝人と、世にも稀しい天才の少年歌うたひが出るといつてゐるのです。これは

した。しかし、カヒは二十圓のお金を集めることが出来るでせうか。私は心配で／＼になりませんでした。出来るだけ見物人の氣に入

るやうにと思つて、その間も親方の伴奏でイスペインヤの踊りをなりました。私はをどつて／＼息が切れさうになりました。けれども、カヒが歸つて来るまで止めない筈でしたから、矢張り踊りつづけました。

間もなくカヒは戻つて来ました。しかし、カヒの帽子にはほんの少しかお金が入つてゐませんでした。親方はそれでは大變だと思つて、急に立上つて見物人に向つてお辭儀をしました。

『皆様、自慢ではございませんが、今晚はおかげ様をもちまして、無事に番組通り演じ終ることが出来ましてございます。しかし、まだ蠟燭の火もつきませんから、今度は一つ私がお好みにしたがつて唄をうたつてお聞きに入れます。それから、それが終りましたら、俳優のカヒがもう一度お伺ひいたしますが、その節はお祝儀をまた頂けません方からとんと頂けますやうお願ひいたします。』



く事になりました。私達は雪の中を歩いて芝居小屋へ向つて行きました。小屋の前に篝火が二つ焚いてありました。そして、その真中に廣告屋が坐つてドンガラ／＼太鼓をたゝいてゐました。村の子供は大抵集つて来てゐるやうですが、小屋はまだとても一ぱいになつてゐません。しかし、子供が大勢では二十圓のお金をくれる譯がないので、早くお金持の紳士がくればいと思つてゐました。

ぐづ／＼してゐる間に蠟燭がたつて了ひますから、私は舞臺に現れて二つ三つ、鑼琴を弾きながら唄ひました。しかし、私がつたひ終つても手をたたく人はほんの僅でした。私ばかりになりました。

でも、カヒは評判でした。見物人はいくども／＼手をたたきました。カヒのお蔭で興行は割れるやうな晴采だつたのです。見物人は両手をたたいたばかりでなく、足踏をしてうれしかりました。

いよいよ、今夜の勝負のきまる時が来ました。カヒは帽子をくはへて、見物人の中を歩きま



さういつて口上を述べた後で、親方は歌をうたひはじめました。私にはその頃まだ歌の上で下手な聞き分けの力がありませんでした。親方の歌は妙に私を感動させました。私の目は涙で一ぱいになりましたので、さまりが悪くなつて舞臺の隅へ引こんでしまいました。その時、私は一番前の座席に坐つてゐた若い奥さんが、一生けんめい手をたゝいてゐるのを見ました。私は前から此の人が今夜集つた中で一番のお金持ちに違ひないと思つてゐたのです。奥さんは一人の子供を連れてゐました。

親方の歌が終つた時、またカビが帽子をくはへてお客様の間を歩きました。ところが其の奥さんは、帽子の中へ一文も入れなかつたので、私はびつくりしました。しかし、親方が二度目の歌をうたひ終つた時、奥さんは手招きをして私を呼びました。

「私あなたの親方さんとお話したいのです。」「とその奥さんがいつたので、親方にこの事を話すと、親方は面倒臭さうにして奥さんのところへ行きました。

「私も音楽をやるものでございませうが、あなたが偉い天才であることを知つて全く驚きました。」「と奥さんは親方にいひました。偉い天才ですつて、うちの親方が。大道の歌ひたひで、大使の御見物師なのに。私はあつげにとられてしまひました。しかし、親方はごく冷淡に答へました。

「私のやうな老いばれが何で偉い天才なものですか。」「奥さんは何とも答へたいで、たゞちつと親方の顔を見つめてゐるだけでしたが、左様なら、どうぞ御機嫌よう。今夜はい、歌を聞かせて下さつて本柱にありがたうございまして」といつて、カビの帽子へ金貨一枚落しました。そして小屋を出て行きました。

「あの人はカビに金貨をくれましたよ。」「と私が親方にいふと、親方は何故だか大變機嫌の悪い顔をしてゐました。(その譯は後になつてわかりました。)

「やらう」親方は、はじめて夢からさめたやうに言ひました。私達は早々に切上げて宿屋に歸りました。宿屋に歸ると、私は手早く蠟燭をつけましたが、ジョリークールの聲がしないのでびつくりしました。

ジョリークールは私達のゐない間に金筋のちつた陸軍大将の軍服を着て、それを着たまゝ手足を一ぱいにつつばらせて毛布の上に横になつてゐました。

まるで眠つてゐるやうでした。私はジョリークールの手をとつて起してやらうとしましたが、手はもう冷たくなつてゐました。丁度そこへ親方が入つて來ました。「ジョリークールが冷いのです。」「と私が泣聲でいふと、親方も傍へ来て、

「あゝ、たうとう死んだか。ルミー、私は本當に悪いことをした。お前をミリガン夫人のところから連れて來て。私はこの罰をうけるに違ひないよ。」「さういつて親方は、悲しさうに目をつぶりました。(つゞく)

風

(幼年詩)

岩手縣師範附屬校尋六  
川村宮子

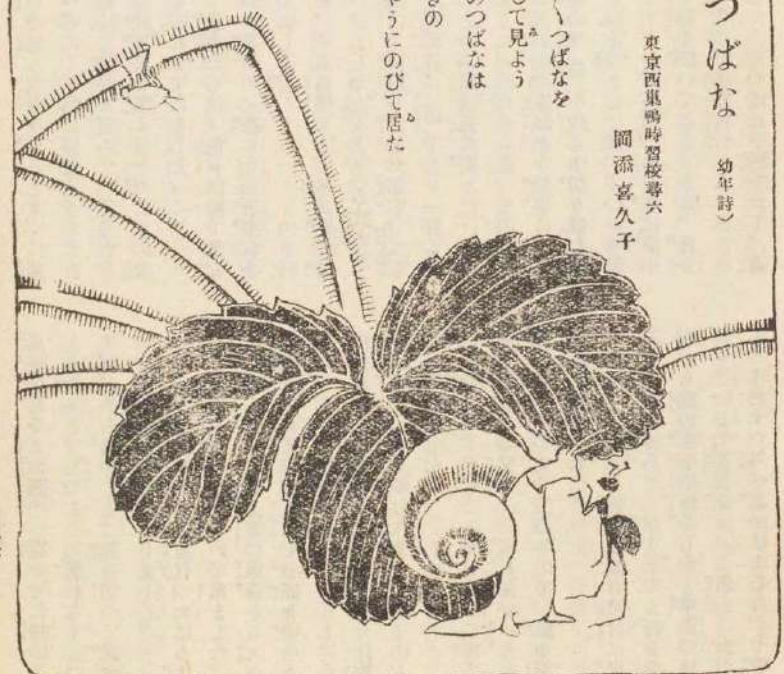
おつそろしい風だね  
おらんだいちごの  
はつばのかけにゐた  
かたつむり  
かしはの木の根本にゐた  
ありたち  
それから  
かしはのはつばの上にもた  
あぶらむし  
こはいね  
こはいね  
こはいね

つばな

(幼年詩)

東京西果嶋時習校尋六  
岡添喜久子

つん／＼つばなを  
さがして見よう  
土手のつばなは  
すまきの  
穂のやうにのびて居た







# 武者修行

藤野英次

昔、たいへん武者修行が流行つた時でありました。その頃、ある村に甚兵衛といふ老人の庄屋が居ました。甚兵衛はこの武者修行がたいへん好きで、

はびつくりして、

「お父さん！ 待つておくんざされ一體どうした事なんだらう。これはきつと気が狂つたのに違ひない。——お父さん待つて——」とあわて、引き止めようとしました。が武者の甚兵衛は、息子の七助を押しつけて家を出て行きました。

外へ出た甚兵衛は、ふといつも外へ出るとき持つ杖を忘れたことを思ひ出しました。二三歩あるいてみましたが、矢張り腰がふら／＼して頼りないので、心細くなつても一度家へ歸つて、杖をとつて来よう……と思ひました。

「けれど待つて、武者たる者が杖などとは臍甲斐ない。」と考へついたので、若若しく伸び上つて、肩を張つて、元氣よく我家をあつと諸國修行に旅立つたのでした。

その日の暮れ方、甚兵衛はとなり村の入口迄やつとたどり着きました。そ

村を通る武者を見るとすぐに家へ呼んで丁寧な御馳走をしたり幾晩も幾晩も宿めて、武者たちの武勇談を聞くのを何よりの楽しみにしてゐました。

武者たちは、色々諸國で出會つた勇士や、珍らしい出来事をくはしく話してめい／＼の手柄を、さも自慢らしく甚兵衛に聞かせました。中でもある武者が、深山で山賊を退治した話と、大名の牧狩で荒れ狂ふ猪をたゞ一打ちで仕止めたといふ話は甚兵衛をたいへん喜ばせました。それから又、その武者がそのお大名のお家騒動を無事に治めて、家中の悪侍を残らず切り殺して了つたといふ話などは、すつかり氣に入つてしまひました。甚兵衛は夢中になつて話を聞いてゐるうちに、自分も武者になつて諸國修行がしてみたくなりました。あつぱれ手柄をたて、甚

の時ちやうど知り合ひの善作といふ百姓に出合ひました。

「これこれ百姓！ ちと物を尋ねる。

このあたりに一夜の旅宿はあるまいか。」と、甚兵衛はさも武者らしく横柄に問ひ懸けました。すると、今まで畑を耕してゐた善作は、

「へい……と何気なく答へましたが、見ると隣村の甚兵衛なので、  
「おう甚兵衛さん……今頃どこへ行かつしやる？」と云つてふと甚兵衛の身なりを見ると、奇妙な武者になつてゐるので、不思議さうに穴のあく程顔を眺めました。

「これ何を申す。拙者は諸國修行の武者である。隣村の甚兵衛であつて左に非ず。無禮を申すと容赦はせぬぞ」と威張り反つて甚兵衛がつつ立つたので、百姓の善作は驚いて何んと云つたらいのか、目ばかりばちくりさせてゐました。

兵衛の名を日本國中へ響かせた時のことを思ふと、ちつとして居れなくなつて到頭ある日のこと、思ひ切つて武者になる準備に取りかかりました。

まづ土藏の中から家重代つたはる大小二本の刀を引つかついで出ました。それから奥の一番上等の箆笥から大きな紋がついてゐる着物と羽織を揃へました。そして野袴、脚半、どうしても持たねばならぬ鐵扇などすつかり仕度が調ふと、甚兵衛は大喜びで息子の七助を呼びました。

七助はどうしたことがとすぐに來て見ますと、お父さんの甚兵衛がへんな身なりでつ立つてゐるので、眼を圓くして愕きました。

「七助、只今より拙者は武者修行に出る、左様心得ろ！ 申すまでも無き事ながら跡の家事取締をしかと申しつけたぞ！」と、甚兵衛はいと嚴かに云つて、すたすた外へ出かけました。七助

「あゝ其方にはわからぬとみえる。も少し先へ參つて聞くと致さう。」と云ひ捨て、甚兵衛は肩を張り片手の鐵扇を振りながらそこを去つて行きました。

武者の甚兵衛は歩きながら思ふのに、「村の甚兵衛では他國への聞えが悪い。これは何んとか武者らしい名を付けねばならぬ。」といろ／＼考へました。さうしてやつと、「猪狩荒之介」といふ苗字を思ひついてそれを付けることにしました。

甚兵衛は付けたばかりの名だから忘れるといけないと思つて、口のうちに猪狩荒之介、猪狩荒之介とつぶやきながら歩きつゝけました。

## 二

甚兵衛が村を出てから最早二月経ちました。けれどどうしたものか、荒狂ふ猪の飛出す牧狩にも山賊にも出遇ひませんでした。何處へ行つても珍らし



い出来事もないので、武者の甚兵衛は退屈で退屈で耐りませんでした。段々つまらなくなつて、しまひに、悲しくさへなりました。でも、

「あ、山賊は出ないかな……」牧狩はなにもおこな……と嘆息しながら村を越え町を過ぎて行きました。

ある朝、甚兵衛はある山路にかゝりました。暑い日を浴びてよろしく歩いてると、午過ぎになつて峠に近づくと、頃にはすつかり疲れて、休み休み息を切らしながら登つてゐますと、道ばたに一軒の茶店がありました。

「これはよい。こゝで一ぶく休んで行かう。」と、内へ入つて牀机に腰を下しました。

「はい入つしやいませ。」と、茶店の亭主が遊茶をくんで出しました。甚兵衛は遊茶をとつて四邊の景色を眺めてゐましたが、ふと

「こりや亭主、ちと尋ねたいことがあ

しよほ歩きました。

其時ちやうど向ふから一ちやうの駕籠をのらせて二人の雲助が鼻唄を唄ひながらやつて来ました。甚兵衛は喜んで、すぐに駕籠を呼び止めました。

「こりやこりや駕籠屋、足が痛うてもならん。向ふの籠の旅宿まで拙者を乗せてくれ。」

「へい、かしこまりました。」と雲助は駕籠を下して甚兵衛を乗せ、勢よく昇ぎ上げました。

「合棒合棒か。」

雲助は眼くばせして一ふり駕籠が揺れると、すたく／＼籐へ竹杖を急がせて歩き出しました。疲れてゐた甚兵衛は、駕籠にのられてうつら／＼い、心持で何時のまに

るが、この四邊には山賊が出るのではあるまいか……と云ひました。すると亭主はびつくりして、

「えつ山賊？ めつそも無い。もし左様な者が出ましたら此處を通る者がなくなりませう。」と云ひました。

「何、出ないと申すか。それは情ない次第ぢや。」

甚兵衛はさも哀しさうに遊茶をす、りました。

「旦那さま、一體あなたは どうして山賊に御用があるので御座います。」

「何んだと、拙者は武者修行の者だぞ。人民に難儀を掛ける悪もの共を退治て手柄がたてたいのぢや。」と得意氣に鐵扇を腰に構へて亭主を睨み付けました

「では貴方は大變な方だ！ 山賊がればきつと貴方に討ちとられるのだが、あひにくこ、らあたりには陰ら形もないので……」と亭主はさも氣の毒さうにいひました。甚兵衛は少し腹が

か寝入りしました。暫くしてふと眼を覺すと、寂しい山奥へ駕籠が入つて行く様です。

「駕籠屋どこへ行く？」と、甚兵衛は怪しんで尋ねました。

「へい向ふの籠まで。」

「でも此處は深山のやうだが……」

「いえ、此處を抜けるとすぐ籠で……此處が一帯近道なので……」

雲助は矢張どん／＼奥へ入つて行きます。甚兵衛はだん／＼怖くなつて、

「おい駕籠屋！ 下ろせ。」と駕籠の中

立つて、

「一體どうして出ぬのだ。理由を語せ。みれば此處は山路ではないか。奥はするぶん深山らしい……」といつて甚兵衛は亭主を責めました。亭主は困つて、

「へいへい實はこの御領主さまがたいへん結構な方なので左様な悪ものは逃けてしまひましたので……」

と答へたので、甚兵衛は口惜しさうにふいとそこを立つて外へ出ました。

甚兵衛は峠を下つて行きました。茶店を出てしばらく歩いてゐると、日がいつの間にかかたむいて、四邊が薄暗くなりました。充分日のあるうちに越えらると思つた山路なのに、いま暮れたので、甚兵衛は心細くなりました。山のことですから宿屋は無し、如何しようかと思つてゐるうちに、とつぶり暮れてやがて明るい月が山路を照し初めました。

甚兵衛は痛い足を引きすつてしよほから呼びました。すると雲助は駕籠を下したので、甚兵衛はのこ／＼駕籠から出かけると、いきなり襟首を雲助が引つ掴みました。

「ヒヤアア」甚兵衛は魂消て、地べたに腰を抜かしました。

「金があるなら出せ！」と恐さうに雲助が云ひます。甚兵衛はぶる／＼顔へて雲助の足にしがみつきました。

「無ければ着物をぬがしてしまふぞ？」と雲助が嗚りつけます。

「へえ……」甚兵衛はする／＼懐中から扇巻を引き出して雲助の前へ差し出しました。二人の雲助はよく中をあらためてニコリ笑つて、「お年寄のお武家！ では左様なら……」

と云つたかと思ふと、甚兵衛をひとり残して逃けて行つてしまひました。甚兵衛ははつと息をつきました。

「やれやれ悪い奴だ。ひどい目に會つた。」と思ひましたが、悲しくて悔しくて堪りませんでした。でも仕方が無いので、すく／＼立ち上つて籠の方へ歩き出しました。(つづく)





◆童謡(二部)野口雨情選

母の唄

臺灣芳香睦美

月は 沙漠の  
椰子のかけ  
坊やお夢は  
ちんからかん  
らくだのお鈴も  
ちんからかん

牛

群馬縣 青柳花明

大牛小牛  
乳屋の背戸の  
牧場の牛は  
仲よしこよし  
日永の小牛

梅雨晴

東京市 柴田けい子

梅雨晴 お天気  
お空は コバルト  
お寺の ボツボは  
みなをどる

すゞめ

徳島市 木村輝男

ばびぶべほ  
雀の子供がないてるる  
雀の子供は一年生  
ばびぶべほ

つぼくら

福島縣 西形緑葉

黒いハンテン  
白い腹がけ  
ついでつばくら  
左官さん

おにごっこ

東京市 北澤ふじ子

蟬と雨蛙と蛇とジヨソ

吉田漾之助



に聞えるのでした。空は碧く晴れ渡つて、お日様は燃えるやうな暑さで照りつけました。ですから木でも草でも、地の上にあるものはみな、死んだやうに一寸も動かさず、ちつと苦しい暑さを堪へて居ました。その中で、蟬だけが、暑いのを喜ぶやうに騒がしく鳴き立て、居ました。

梧桐の葉蔭で心地よさうに眠つてゐた雨蛙は、すぐ傍で蟬の聲を聞くと目を覚ました。「何だ騒々しい、静にしろ！折角いゝ氣持で寝てゐる所を喧しいやい。」雨蛙は、腹立しさうにさう云ひました。

「何だと、喧さけりや何處へでも行け！」すると蟬も負けては居ません。一層高い聲で叫びました。そこで二人は喧嘩を始めました。「この木は元からわしが住んでる木だ。後から来て生意氣をいふな。」と雨蛙が唝鳴ると、蟬も負けぬ氣で言ひ返しました。「お前ばかりの木ぢやない。偉さうに云つても何處へも行くことは出来まいがな。お前のやうな雨蛙が、よちよち歩いて居る間には日が暮れらァ。其處へ行くとなしなぞは翼があるから自由自在に、自分の思ふ木に飛んで行かれるんだ。」「行かうが行くまいが勝手だ。そんな翼がなんだ。お前などは地の底にゐる時、木の根ばかり食つた報いで、折角世の中へ出てミンノ、鳴くより外に能が無いんだらう。さうして終ひには鳴き死んでしまふ、云は、世の中の厄介者だ。」「さういふお前に何の藝があるんだ。矢張り木の葉にかちりついて鳴くばかりだらう。お前のグワァ〜いふ聲より、わしの聲がどんなにいゝか知れない。」「わしなどはお前と異つて暑い時に雨を降らせるといふ大切な役目があるんだ。だから同じ蛙でも雨蛙といはれるんだ。」「雨を降らせるのは雷様だ。お前はその時鳴くだけではないか。」「その雷様を呼ぶのも皆わしぢや。それから考へて見てもわしの聲の好い事がわかる。お前の聲などは騒々しくて暑苦しいだけだ。」蟬はとうとう雨蛙に言負か



ギヤンケンボンヨに  
負けちやつた  
私は鬼になつちやつた  
ほんとに私は  
つまらない

### 鮎のお夕飯

愛知縣 田中均

畑で鮎のお夕飯  
かあさん脚と  
子脚と  
仲よく仲よく  
ご馳走です

### 雨蛙

兵庫縣 青谷みちる

ハツ手の葉つばに  
寝てる蛙  
青い着物着た  
おしやれな蛙  
雨が降つても

平氣な蛙

### お日様

東京市 鈴木理

坊やよ坊よ見てごらん  
どんぐりまなこで  
見てごらん  
大きなノノノさんが  
お山の上から出てました

### 虹の帯

茨城縣 入江櫻水

夕立はれた  
虹が出た  
お空のいい帯  
かりにゆい

### 螢

大分縣 草丘修

ほうく／＼螢  
淋しいやうな

されて黙つてしまひました。だが意地悪い蟬は口論では敵はないと思つて、雨蛙にお小便を掛けると、そのまゝ何處かへ飛んで行つてしまひました。

### 二

雨蛙は口惜くてたまりませんでした。が、翼の無い身では後を追掛けて行くことも如何することも出来ませんでした。其處でどうかして仕返しをしてやりたいと色々考へた末、一つ雨を降らして困らせてやらうと思ひつきました。

雨蛙は雨を降らさうと、グワァ／＼グワァ／＼と一生懸命に咽喉をふくらして鳴きました。すると一面に暗れ渡つてゐた靑空の東の方に、ほつつりと豆粒ほどの黒雲が浮んで來ました。やがて雷のゴロゴロといふ音も聞えて、見る／＼黒雲は擴がつて空を覆つてしまひました。雨蛙は此處ぞと、尙も激しく鳴き立てました。

ピカリ、ゴロゴロ、ピカリ、ゴロゴロと、電と雷とが變る／＼黒雲の中を馳け廻ると、雲はだん／＼低く下つてほつり／＼雨を落し始めました。そして雷の音が耳を押へさせるやうに大きくなると、ザアといふ激しい音と共に雨は流すやうに降つて來ました。その騒がしい音には今まで喧しく鳴いてゐた蟬の聲も、地の上的何の物音も打ち消されてしまつて、たゞ雷の音だけがゴロゴロと恐ろしい響を立てゝゐりました。

雨蛙は自分の思ひ通りに雨の降つた事を喜びながら、梧桐の葉の上に坐つてさぞ蟬が困つて居るだらうと心地よく思つて居ました。すると蟬は、すぶ濡れになつて梧桐の蔭へ歸つて來ると、苦しさに聲も立てずに止つて居ました。雨蛙はそれを見ながら『どうだ恐れ入つたか。わしの力はこんなものだ。』と云はんばかりに笑つてゐました。

だが雨はさう長くは降りませんでした。一時間もすると電も雷も止んで次第に小雨になり、やがて空はまた元のやうに晴れてしまひました。そしてお日様は前よりも一層激しく照りつけました。だが雨は草や木や人々を生き返つたやうに喜ばせました。今まで汚れて苦しさに見えた庭の木も草も、皆洗はれたやうな美しい緑色に輝いてゐました。

雨の降る間は黙つてゐた蟬も、日が照りだすとまた元氣を取り戻して鳴き出しました。ミン／＼といふその聲は前よりも一層喧しく騒がしく響きました。

雨蛙はそれを苦々しいことに思ひましたが、さう／＼雨の降りさうな筈もなく、喧しさを辛抱して堪へて居るより外ありませんでした。

蟬は『矢張俺の方が勝だ。』といふやうに、得意になつて益々喧しく鳴き立てました。するとその梧桐の下から、そりつと袋のやうなものが現れて來ました。その袋は次第に蟬の方へ近寄ると、いきなりそれを押へてしまひました。油断をしてゐた蟬が氣がついた時は、もう袋の中に入つてゐました。

雨蛙はそれを見ながら、子供が蟬を捕りに來た事を知りました。



青色の  
提灯さけてどこへゆく

◆童謡 (二部)

雀の目

東京市 渡邊源四郎

あつちへむいては  
きよろ〜  
こつちへむいては  
きよろ〜  
きよろつくおめがきよろ〜

ちつくい時

山梨縣 丸茂けさよ

ちつくい時  
おくらん中へ入れられて  
めんめんないた  
ちつくい時

犬の啼聲

廣島市 永井 勇

トナリノ犬ノ

ナキゴエハ  
ワントナカズニ フン〜リン

軒の風鈴

東京市 外村佐和子

チロリン〜チロ〜リン  
風に吹かれてないてる  
さぞ風鈴はさびしかろ  
雨戸の外でただひとり  
風に吹かれてないてる  
さぞ風鈴はさびしかろ

影法師

香川縣 橋本ノブエ

私があるけばついてくる  
私ですわれば又すわる  
お前はお猿の  
申し手か

ひよこ

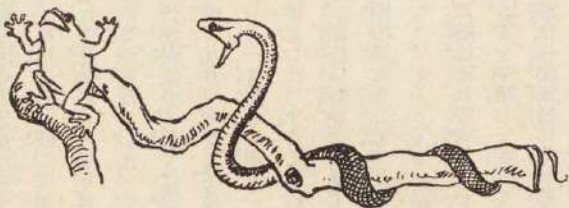
宮城縣 二瓶キヨエ

ひよこ〜とよんだれば  
二本の足でちよこ〜

「馬鹿な奴が、いゝ氣になつて鳴いてるからひどい目に逢ふのだ。」雨蛙はさうつぶやきながら、袋の中へ入れられた蟬が、やがて散々子供達にもてあそばれた末、殺されてしまふだらと思つて、捕へられた蟬をいゝ氣味に思ひました。

三

だが禍といふものは何處に待つてゐるか知れませぬ。丁度その時、梧桐に一匹の蛇が登つて、枝から枝へと傳ひながら何か探してゐました。その蛇の鋭い眼は、青い葉の上の雨蛙でも容易く見つける事が出来ました。蛇はそつと近寄ると首を上げて、雨蛙の後ろの方から飛びつきました。雨蛙は餘りに突然の出来事の方めにびつくりしました。そしてそれが自分の一番嫌ひな、恐ろしい仇の蛇であるといふことを知ると、何とも云ひ表すことの出来ないほど驚きましたが、その時はもう遅く、雨蛙の體の半分は蛇の口の中になりました。雨蛙は腹をふくらして吞まれまいと一生懸命にしがきましたが、とうとう吞まれてしまひました。たつた今、子供に捕へられた蟬を突つた雨蛙は矢張油断からまた蛇に吞まれてしまひました。



蛇は雨蛙を吞んでしまふて、お腹のふくれたのに満足して、そろ〜と梧桐を下りて來ました。その時梧桐の根元の涼しい木陰では、犬のジョンが晝寝をしてゐました。蛇が長い舌をペロリ〜出しながら下りて來ると、ジョンが目を感じました。蛇が大嫌ひなジョンはそれを見たと怒つて、その前脚で蛇の頭を押へつけました。蛇は苦しまぎれにジョンの脚に巻きつきましたが、いくら蛇でもジョンには敵みません。ジョンは蛇の頭を噛むと、その長い體を二三度右左に振つてほんとう向ふの方へ投げ出してしまひました。

雨蛙を吞んだ味をまだ忘れない間に、蛇も亦ジョンのために殺されてしまひました。土にまみれた蛇の死骸の上には、お目様がカンカンと照りつけてゐました。その時勤勉家の蟻は、焼けるやうな暑さにもかまはず、庭の中をあちらこちらと食物を探して走り廻つてゐましたが、やがて蛇の死骸に行き當りました。

「何といふ素晴らしい大きな御馳走が落ちてゐるのだらう！」

蟻はそれを見つけると喜びの聲を上げました。だがそれは自分の巢へ運んで行くには餘りに大きかつたので、蟻は引き返して仲間を大ぜい呼んで來ました。そして其處へ皆でせつせと、蟻の塔を作り始めました。

凡ての争ひ事には何方も傷みます。また大きいものが必ず強い中でも、強いものが偉いのでありません。(をばり)



# 傳説 笛の名手と人狼の話

(山城の話)

藤澤衛彦



然の藤き方にかへるのでした。蝶や、蜂も、ほつとわれにかへつて、更めて野の花の露を吸ひました。

黄昏の頃、笛の名人は、自分の住ひしてある鞍馬寺の方に歸つて行きましたが、まだ聞き惚れてゐた鳥や獸は、時を歸ることも忘れて、彼につき従つて行くのでありました。

「ヒーヒヤラ、ヒヤラ、ララララ、」  
野を籠で、何とも言はれない美しい笛の音が漂ひますと、そこら一面の野の木や草が、その笛の音のする方に葉を靡かせました。萩も、桔梗も、われもかうも、野菊も、女郎花も、不思議に、花の顔を向け直して、ちつと笛の音に聞き入る様子でございました。

空飛ぶ鳥も、言ひかばして、笛の音のする方さして急ぎました。  
「實際、何といふ古今の名人だらう。」  
「ほんとに、私たちは、それでどんなに慰められるかわかりませんわ。」  
秋草の野を走る二匹の鹿も、はるばる笛の音に引きつけられて、音楽の方へと駆けるのでした。

「ヒーヒヤラ、ヒヤラ、ララララ、」  
とろけ込むやうな微妙な音楽、それが段々に近づきますと、今まで花に戯れてゐた蝶も蜜を求めてゐた蜂も、忽ち、ちいつと耳をすまして、うつとりとなつて、思はず秋草の花の上から、すべり落ちるのもありました。

「ヒーヒヤラ、ヒーヒヤラ、」  
「チーナク、チーナク、速く行つて、美しい音楽を聞かう。」

「ヒーヒヤラ、ヒヤラ、ララララ、」  
笛の名手は、そんな事を知つてか、知らずか、野のはての一筋道を、山邊の方に吹きすまして行くのでありました。深山の鳥や獸がその笛の音の後について行きます。  
かうして、その姿が山かげに隠れますと、今まで戯れてゐた野の秋草は、一斉に姿勢を變へて、やがて吹きだした風のまにまに、自

それで、笛の名人は、はじめて驚いて、ふつと其笛を吹き止めてしまひました。  
「ほつとわれに歸りました鳥や獸も、何時の間にか日が暮てゐるのにびつくりし、鳥はたゞもう、あわてふためき、獸類は、残り惜しさうに、めい／＼の時様家を指して飛び返つて行くのでございました。」  
「何時の間にか、また、つけられてゐたと見える。自分の笛は、よつほど鳥や獸に好かれ

ると見える。は、どれ、もう一曲、この樹の下でこゝろみたら歸る事とせう。」  
獨言を言つて吹き始めました。

そのうちに、月がのぼつて、この樹の間から見えました。  
名人は、劉咄と吹きすまして、思はず夜を更しました。

「一類り、その笛の音は、山や谷を徹して響きました。漸く一曲を奏し終つて笛を納めようとし、突然に、  
「これ、もう一曲頼む。」と、言ふ者があります。何の氣なしに、それで又一曲吹き終りますと、

「もう一曲所望だ。」と、又誰か言ふので、一たい誰人だらうと、ふと聲のする方を見ますと、其處に、首が、狼で

身は人間の、人狼といふ怪物が、妙な着物を着て聴いてなりましたので、名人は驚きましたが、やがて心を落ちつけ、望みにまかせて、調子をなへた秘曲を吹き出しました。  
ちやうど、樂の妙所になつた時、人



狼は感に入つて目をつぶりましたので、その隙に、名人は笛を吹きながら、傍の大木に登つて行つて、枝や葉の深いところに身を隠しました。笛の音が止んだので、人狼が眼を開きますと、伶人の姿が見えないので、四方を探し出しました。

時は、ちやうど眞夜半で、落月が樹の上を照し出しましたので、名人の影が、地上にうつし出されました。それで人狼は、薄笑ひして、  
「伶人は其處に在らるか、では自分も其處へ行つて聞かう。」と、今にも樹に登らうと致しました。ところが、其時、突然、空中高く聲がして、

「畜生、無禮致すな、これは天下に名高い樂官藤原兼秋卿でおぼすぞ。」といふものがありました。  
人狼は、其聲に驚かされて、恐れ慄へながら立ち去りました。

藤原兼秋卿は後醍醐天皇の御代の樂官で古今きつての笛の名人だといはれてなりました。  
(なはり)





狐と人獵 劇話童

甫田益

獵人  
 籠の村の子供三人  
 籠の村の人々多勢  
 晝寝をしてゐる子狐  
 親狐(お母さん)  
 他に子狐三匹

子供二、えッ。狐が。  
 子供三、早く逃げないと化かされると大變だ。歸れなくなつてしまふ。  
 子供二、早く逃げよう。  
 子供一、早く村へ歸つてさう云つてやらう。  
 三人はあわてゝ逃げて行つてしまひました。子狐は矢張り何も知らずに、快い氣持さうに寝入つてゐました。暫くすると獵人が鐘砲を擡いでやつて來ました。  
 獵人、(ふと子狐を見付けて) うむ。狐がるぞ。これは好い獲物だ。(とつぶやき乍ら肩から鐘砲を下して狙ひを定め、すどんと一發放ちました。)  
 子狐はあつと一聲叫んだまゝ、一度飛び上つてばつたり地に倒れてしまひました。  
 獵人(子狐に近寄つて行つて) 何だ。子狐だつたのか。可哀さうな事をしてしまつた。而しまア今日は何も獲物が無かつたので、困つてゐた所だから、これでも有難い。(と云ひ乍ら嬉しさうに子狐を手を取つてみました) 子狐でもなかく重いぞ。此の位置目があれば上等だ。やれくくたびれた。

晩秋の好く晴れた日のことです。山奥の大きな栗の木の下で、一匹の子狐が好い氣持さうに晝寝をしてゐました。その上に垂れ下つてゐる梢には、枝もたわゝに栗が實つて居りました。  
 そこへ籠の村の子供達が、栗を拾ひにやつて來ました。

子供一、あゝ、あすこにあんな大きな栗の木があるよ。  
 子供二、あらく。あんなに一杯、栗が生つてゐる。早く行かう。

子供三、きつて澤山落ちてゐるよ。  
 と云ひ合ひながら三人はだん／＼近寄つて行きました。すると一番先に行つた子供が子狐を見つけた。

子供一、大變だ。狐が寝てゐる。

大分お腹も空いて來たから、此の栗の木の下で休んで辨當でも喰べようかな(と云つて獵人は木の下に坐り込みました。)  
 獵人の坐つてゐるすぐ側に子狐の死骸が横たはつて居りました。獵人は嬉しさうにそれを見詰め乍ら、お辨當の蓋を取つて、むしやむしやと喰べ始めました。  
 獵人、(總てお辨當を喰べ終ると) あゝ、腹が空してゐたせゐか、今の辨當は素敵に旨かつた。これでまア獲物もあつたし、お腹が出来たから、此の靜かな涼しい木影で暫く晝寝をしてやらうかな。(と云つて、鐘砲を側に置いてこゝろりと横になりました。)  
 涼しい風がひた／＼と栗の梢を鳴して吹いて來ました。獵人はあんなに快い氣持なので、いつの間にか眠り込んでしまひました。すると、そこへ抜き足差し足で、親狐と子狐が三匹近寄つて來ました。  
 親狐、(子狐の死骸を見付けて) あらまア、心配をしてゐたら坊やはとう／＼撃たれてしまつた。  
 子狐一、お母さん。どうしませう。  
 子狐二、あゝ、とう／＼死んでしまつた。



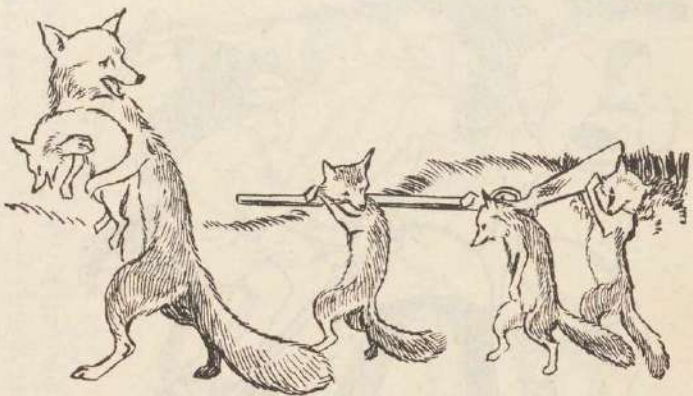
子狐三、お母さん。僕は悲しい。  
 と云つて三匹の子狐は死骸を見ると泣き出してしまいました。  
 親狐、これく。そんな大きな聲を出してはいけません。此  
 の獵人が眼を醒ますと、お母さんもお前達も撃たれてしま  
 ひます。静かになさい。  
 子狐一、でも、こんな悲しい事があるでせうか。泣かすには



ゐられないのですもの。  
 親狐、でも今泣いてはいけません。これから此の獵人が眠つ  
 てる間に、そうつと坊やの死骸をお家へ持つて歸らなけ  
 ればならないのですからね。それからいくらでもお泣きな  
 さい。今は氣をしつかり持つて、獵人の眼を醒さない様  
 しなければなりませんよ。  
 子狐二、ちやアお母さん。早く死骸を家へ持つて行きませ  
 う。

親狐、さア、お母さんは坊やの死骸を抱いて行きますから、  
 坊やたちはその鐵砲を盗んで行つて、谷底に捨て、おいで  
 なさい。その鐵砲があると、又どんな目に會はされるかも  
 しれませんから。(と云ひ乍ら子狐の死骸にそつと近寄つて、し  
 かりと抱き上げました。)さア、足音をさせない様にして、早  
 く鐵砲を盗んで行くのです。

子狐三匹は親狐の云ふ通り、そつと鐵砲に近寄つて、三匹力を合  
 せてそれを擔きました。  
 親狐、落さない様にしつかり擔いで行のすよ。(と子狐たら  
 に云つてから、死んでしまった子狐に類すりなしました。)可哀



さうにね。だからお母さんがまだ一人歩きをしてはいけな  
 いと云つたぢやありませんか。  
 子狐三、お母さん。早く行きませう。獵人が眼を醒しはしな  
 いかと思ふと、恐くつて仕方がありません。  
 親狐、さアく、早くく、足音をさせない様に。  
 子狐達は先に立つて鐵砲を擔いで逃げて行きました。  
 親狐、(獵人に向つて) よくもく可愛い坊やにこんな事をし  
 た。きつと此の恨みは晴らしてやるから。(と云ひ乍ら逃げ  
 て行つてしまいました。)  
 狐達が逃げて行つてしまつても、まだ獵人は何も知らずに眠り込  
 んで居りました。静かな山の中に獵人の聲が傳はりました。  
 暫すると遙か彼方から村の人々や子供の聲が聞え出しました。  
 子供の聲、あの木の下だ。あの栗が一杯生つてる木の下に  
 るるのだ。  
 次第に人々の聲が近寄つて來ました。足音も聞えて來ました。  
 村の人々の聲、すうつと周圍を取巻いてしまへ。逃げ出せな  
 い様にしてしまふんだ。好いか取巻いたか。それく一度  
 に近寄つて行け。



と云ふ聲が聞えたかと思ふと左右から村の人々が栗の木を日かけて近寄つて来ました。  
村の人一、(獵人を見付けて) やッ。こいつめ化けてゐる。獵人



に化けてゐる。  
村の人二、なまいきな奴だ。なか／＼大きな古狐らしいから氣をつけろ。  
村の人三、よし来た。それ打つてかゝれ。  
と云ふと村の人々は一度に獵人に打つてかゝりました。獵人はあわてゝ起き上りました。

獵人、おい／＼。何をやる。何をやる。何を亂暴するんだ。  
村の人二、何だ。古狐め。よくも／＼獵人になんか化けやがつたな。

村の人一、貴様に化かされる様な人間様ぢやないぞ。  
獵人、おい／＼。冗談を云つちや困る。俺は狐ぢや無い。俺はちやんとした獵人だよ。化けてゐるんでも何でも無い。  
村の人三、駄目だ／＼。もうちやんと貴様の正體を見届けたものがあるんだ。太い古狐め。

獵人、馬鹿な事を云ひなされるな。俺は本當に獵人だ。お前さん達が探しに来た狐と云ふのは、俺がちやんと撃ち止めてしまつた。  
村の人四、それならその狐は何處にゐる。

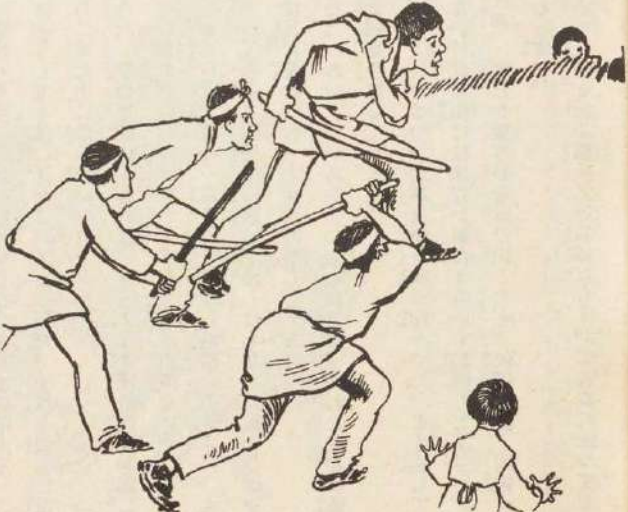
村の人二、白々しい事を云つて俺達を化かすつもりだな。  
獵人、こんな筈は無い。俺は本當に今鐵砲で撃ち留めて、此の側に置いて寝たんだ。  
村の人三、それならその鐵砲は何處にある。鐵砲なんかありやしないぢやないか。  
獵人、おや／＼。鐵砲も無いぞ。これはどうしたのだ。こんな筈は無いが。(とあわてゝ探します)

村の人五、古狐め。そんなに白ばつくれしないで、もう往生をしてしまへ。早く正體を現はしてしまへ。  
獵人、冗談ぢや無い。お前さんが隠したんぢやないか。  
村の人四、此の野郎め、まだそんな事を云つて化かすつもりだな。

獵人、いや／＼。さうぢや無い。俺は本當に人間で、本當に獵人なんだ。  
村の人五、嘘をつけ。うまく／＼化けて俺達まで誤間化すつもりだな。

獵人、(ふと氣がついて) お前さん達は狐ぢやないか。そして子狐を撃たれた意趣返しに来たのぢやないか。

獵人、これみなさい。(と云つて下を見ましたが、子狐はゐる筈がありません) おや、どうしたんだらう。こんな筈は無いが。  
村の人一、さア、その狐は何處にゐる。見せてみろ。



五五



村の人一、何だと。俺達を狐だと。此の古狐めが。ふざけた事を云ふな。

獵人、でもこんな筈は無い。さつき寝る迄はちやんと側にあった鐵砲も子狐の死骸も見えなくなつてしまふなんて、これはどうしても狐に化かされてゐるのだ。子狐を殺した敵討ちに來たのに違ひ無い。

村の人二、黙つて聞いてゐれば、とうとう今度は俺達を狐にしてしまやがつたな。さアもう敵す事は出来ない。

獵人、(地面に手を突いて)狐さん。どうか勘辨して下さい。もう決してお前さん達の一族に手出しはしないから。さつきのは私が悪かつた。どうか勘辨して下さい。

村の人五、おい／＼。あやまつても駄目だ。それよりも昔様の正體を現はして下さい。

獵人、いゝえ。さつきの事は重々俺が悪かつた。もう決してしない。此の山には來ない事にするから勘辨して下さい。

村の人四、何だか變な事を云ひ出したぞ。俺達を狐と間違へてゐる様だ。

村の人三、何と云ふ圖々しい古狐だらう。こんなに云つても村の人四、あんなに謝まるのだからもう宜い。もう里へ來て



正體を現はさない。

村の人二、何だか俺達まで化かされてゐる様な氣がするぞ。(と云つて目をこすりました)

獵人、もうあなた方に對して悪い事は一切しません。この山には決して参りません。どうか今日の所は勘辨して下さい。

村の人一、おい／＼。あんなにあやまつてゐるのだから勘辨してやらうぢやないか。此の上いぢめて、又どんな目に會はされるかも知れない。歸り道に化かされてもしやうものならそれこそ大變だ。

村の人三、本當だ。少し氣味が悪くなつて來た。あいつは俺達まで狐だと思つてゐる様だ。

村の人二、變な氣持になつて來た。早く歸つた方が宜い様な氣がする。

村の人一、さうだ。早く歸らう。

村の人五、(獵人に)もう此の近所を荒すと承知しないで。今度荒して見る。それこそ命は無いのだぞ。

獵人、はい／＼。もう必ず此の山には参りません。今日の所は勘辨して下さい。

獵人が行つてしまふと、草の間から親狐が子狐をつれて出て來ました。

親狐、坊やたち御覽なさい。人間と人間とが化かしつこしてゐるのですよ。昔から狐が化ける事なんかありはしないのですけれど、人間は狐が化かすものと思つてゐるのです。その實本當は人間が人間に化かされてゐるのですよ。をかしいぢやありませんか。これで死んだ坊やの敵討ちも出來たと云ふものです。そのかはりこれからあの人達は一層私達をめのかたきにしますから、皆氣をつけなければいけませんよ。

子狐一、人間に化かされるのはこはいものですね。お母さん。親狐、本當ですよ。

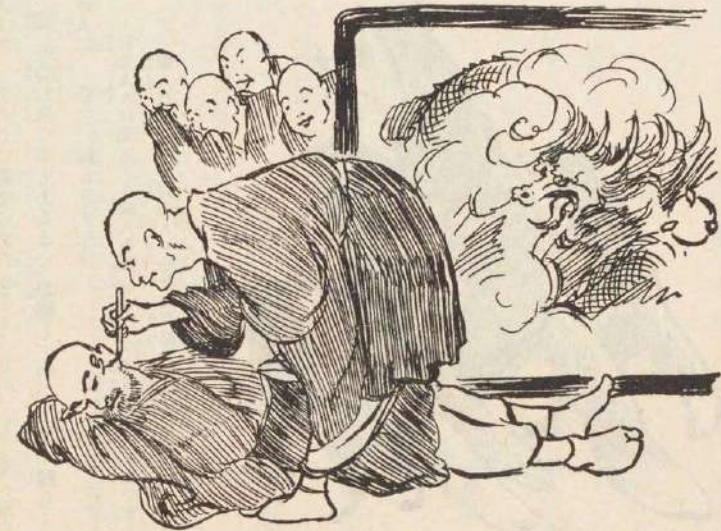
狐達はさう云つて顔を見合せて笑ひました。

——靜かに暮——



# 辨慶と義經

窪田空穂



辨慶は、方々を修行してあるきましたが、夏のころ、播磨の國の書寫山にお詣りをしました。この書寫山は、性空上人の建てられた寺で、日本中に聞えた名高いお寺です。辨慶はお詣りをしまつて、山を下らうとしましたが、見ると、山は今ちやうど「夏」の時です。「夏」といふのは、寺にゐる僧はもとより、何處の僧でも望みの者は、寺へ籠つて勉強をする時のことです。

「何處へ行つても同じだ。一夏をこのお寺でしよう。」

辨慶はさう思ひました。そして學頭學問所の頭（頭の）の僧のゐる坊（坊）さんのゐる處へ行つて頼まうとしました。

辨慶がその坊へはひつて行くと、學頭をはじめ、そこゐる僧たちは、變な顔をした僧が來たものだと思つて、みんなでじろく（じろく）と見ました。

「見馴れない方だが、どちらから入られた。」學頭が聞きました。

「叡山の者です。」

「叡山は何處から。」

「櫻本からです。」

「僧正のお弟子ですか。」

「さうです。」

「御俗姓は。」

「中の關白道隆の末で、熊野の別當の子です。」と辨慶は威張つた調子で答へました。

「益す變な奴だ。」とみんなが思ひました。しかし修行にかかると、一心になつてして、少しも變つたところはありませんでした。

「思ひの外におとなしい僧だ。」と寺の僧は褒めました。

夏も過ぎて秋になつたので、辨慶はこれのお寺を下つて、又何處かへ行つて修行をしようと思ひました。そして學頭の坊へ暇（暇）に行きました。

行つて見ると學頭の坊では、僧が大勢集つて酒盛りをして

ゐました。

「悪い時に來た。少し待つてゐよう。」と思つて、辨慶は此方の方の部屋で、横になつてゐましたが、何時かぐつすり（ぐつすり）と寝入つてしまひました。

書寫山の僧のうちに、信濃坊といふ喧嘩好きの僧が一人ゐました。この僧は辨慶の初めて此處へ來た時から知つてゐて、「生意氣な口の利き方をする奴だ。いつかひどい目に逢はせてやらう。」と思つてゐました。その信濃坊が、酒盛りの仲間に加はつてゐて、もう酔つぱらつてゐました。

信濃坊は晝寝をしてゐる辨慶を見かけました。

「いい時だ、ここで恥をかかせて寺から追ひ出してやらう。」

さう思つて、そこにあつた硯の墨を磨つて、眠つてゐる辨慶の顔へ落書（おとしがき）をしました。顔の片方へは「足駄」と書き、又

片方へは「書寫法師の足駄に履く」と書きました。それから

「辨慶は平足駄とぞなりにけり、面を踏めども起きも上らず」といふ歌を作つて、小坊主を二三十人呼んで來て、その歌を歌ふと一しよに、板壁をたたいて嘩（うたがひ）を立てて、どつと笑はせました。



その聲で辨慶は目を覺ましましたが、何で騒いでゐるのか、もとより分りませんでした。それで、亂れてゐる衣の袖を直して、大勢の酒盛りをしてゐる席へ出て行きました。

大勢の僧は辨慶の顔を見ると、袖を引いたり膝をついたりして笑ひました。辨慶は、何がをかしいか分らないが、自分一人だけ真面目な顔をしてゐるのも變だから、同じやうにやにや笑つてゐました。しかしその中に、

「いかにも變だ。何だか自分のことらしい。」

と氣が附きました。すると拳固をこしらへて膝を立てて、「何がをかしいのだ。」と大聲に嘯鳴つて、目に角を立てて座中を睨めまはしました。

「大變なことになりさうだ。」と學頭は辨慶の様子を見ると氣を揉み出しました。

「あなたの事ではない。外の事を笑つてゐるんです。なに、つもらん事です。」

と云つてなだめると、辨慶は突と起つて、そこを出て、一町ばかり離れてゐる修行者の寄合所になつてゐる所へ行きました。

「まらせよう。」

學頭はさう思つて、「山の者を講堂へ集めて調べました。辨慶にもその事は知らせて來ました。そして同じく講堂へ來るやうにと云はれましたが、行かずに居ました。度び度び催促されるので、行つて見ようと思つて途中で來ると、一人の若い僧が、衣の下へ腹巻（鍔）をして講堂の方へ行くのを見かけました。

「これは油斷がならない。今日は事を穩かに治めることばかり思つてゐたのに、あゝいふ支度をしてゐる。此れだけの大勢の者に取圍まれてはとてもかなはない。それならば、此方もその支度をしよう。」

辨慶は學頭の坊に駆け込んで、鍔櫃を持ち出しました。その中にあつた黒糸練の腹巻を着、直垂を着、夏ちう刺らなかつた頭へ烏帽子をかぶつて鉢巻をし、櫻の八角の棒を杖につき、高足駄を穿きました。そして講堂の前へ來ました。

講堂の上には、三百人ほどの僧が集まつてゐました。前にはその倍もの者がゐて、足の踏みどころもないほどです。辨慶は、講堂の上に昇らうとして、そこにゐる者の膝を踏みつ

そこへ行つても、辨慶の顔を見た坊さん達は一人残らず笑ふのでした。

辨慶は、そこにも居られずに外へ出ました。そして水のある所へ行つて、自分の顔を水にうつして見ました。水にうつつた顔は墨で眞黒に、「足駄」「書寫法師の足駄に履く」とふ字がかいてありました。大勢に笑はれたわけも初めて分つたのでした。

「此れほどの恥をかかされては、一時も此處にはゐられない、何處へでも行つてしまはう。」

辨慶はさう思ひました。しかし直ぐに、

「待てよ、自分とはかく、自分一人の爲に叡山全體の僧が恥をかかされたと思ふと黙つてはゐられない。代りに、皆に悪口をしてやらう。怒る者があつたら、そいつをひどい目に逢はせて、恥をそいでから出よう。」

辨慶は、山内の坊といふ坊の前に立つて、端から罵つてゐるきました。

「これでは、書寫山全體が恥をかかされることになる。爲方がない、悪いことをした者を調べ出して、あの修行僧にあや

け肩を踏みつけて進みましたが、文句を云つたらは何んな事が起るかも分らないと思つて、みんな踏ませて黙つてゐます。辨慶は講堂の前の階段を、足駄のまゝで昇つて行き、廊下を彼方へ行き、此方へ行き歩いて歩き廻りました。ここでも、とがめ立てをすると、何んな事が起るかも知れないと思つて、みんな黙つてゐました。

しかし、學頭は黙つては居ませんでした。

「見苦しい事をなさるな。ここは性空上人のお建てになつた寺です。然るべき方や、幼い者の居る上を、足駄を穿いて通るといふ法がありますか。」

辨慶は立ちどまりました。

「學頭のおつしやるのは御尤もです。しかし、縁の上を足駄を穿いて通るのが悪いとおつしやる方々が、何だつて修行者の顔を足駄になぞするんです。」

辨慶の云ふのが尤もなので、誰も何とも云はず、しんとしたてゐました。

喧嘩好きの信濃坊は黙つてはゐられませんでした。

「何といふ馬鹿面をした修行者だ。懲らしてくれよう。」と罵



つて、突立ちました。

「面白い。貴様の腕が抜けるか、辨慶の頭が碎けるか、相手をしよう。おれの顔へ落書をしたのは、多分貴様だらう、僧い奴だ。」辨慶も罵りかへして身構へをしました。

信濃坊の弟子で、そこゐる五六人の者が、

「あれ位の僧が何だ。縁から蹴落して、首の骨を踏み折つてくれよう。」と云つて、一しよに走りかかりました。辨慶は棒を振るつて、「薙ぎにみんなを縁の下へ薙ぎ落してしまひました。それを見ると信濃坊は、何か厭るものはないかと見廻したが、側には何もありませんでした。あちらの方に、圍爐裏に櫓が焚いてあつたのでその一本を取つて、燃えてゐる火だけを消して、打つて参りました。

一打二打合ふと見ると、辨慶は躍りかかつて、左の手で信濃坊を搦んでしまひ、右の手で股を掴み添へて、頭の上へ差し上げて、講堂の前の庭へ下りてゆきました。

「修行者、許してやつて下さい。それは酒癖の悪い僧ですから。」と大勢の僧が詫言ひました。

「命は取りません。」と云つて辨慶は、一と振り振つて、高さ



根は雀齋です。折悪く、谷の方から吹き上げて来る風が、その講堂の屋根へ吹きつけたので、火は直ぐに燃えひろがつてしまひました。

九間四方の講堂が屋根から火になると、それからそれへと燃え移つて、書寫山にある五十四の建物は、みんな燃えてしまひました。

「佛に對して此れほどの罪を犯した上は、僧のゐる坊など残しても爲方がない。これも焼いてしまへ。」

辨慶はさう云つて、松明へ火をつけて、坂の下の方に並ん

一丈二尺ある講堂の屋根の上へ投げ上げました。信濃坊はころころと轉がつて、雨落石の上へ落ちました。辨慶は足駄で踏みつけて、左の腕と、肋骨を二枚折りました。

その時、思ひ懸けないことが起りました。それは信濃坊は屋裏へ投げ上げられた時に、まだ火の消えきらない櫓を持つてゐて、落ちる時に、それを屋根へ刺してしまひました。屋



でゐる坊から坊へ火を放けました。

書寫山は谷から峰まで一時に火になつてしまひました。

その火事を後にして、辨慶はそのまゝの支度で、京都へ向つて逃けて行くのでした。

二

書寫山を焼きはらつて、京都へ逃げて歸つてからは、辨慶は何處へも行かず、京都にばかり隠れてゐました。

その中に辨慶は、悪い心を起しました。それは澤山の刀を欲しくなつたことです。

「立派な侍は、いい武器を千づつ揃へて持つてゐるといふことだ。奥州の秀衡はいい馬を千匹、いい鎧を千もつてゐるといふ。九州の松浦はいい弓を千張、いい胡篋を千腰もつてゐる。自分は今持つてゐる刀の外には、一振りのかけ替へもない。自分も刀を千振欲しいものだ。さう云つても、集るはずもない。他に爲方もない、京都の町の中で、人の差してゐるのを取つてやらう。」さう思つて、毎晩、京都の町に立つてゐて、通りかかつた人の刀を奪つてゐました。

當分のあひだは評判にもならなかつたが、暫くすると、京



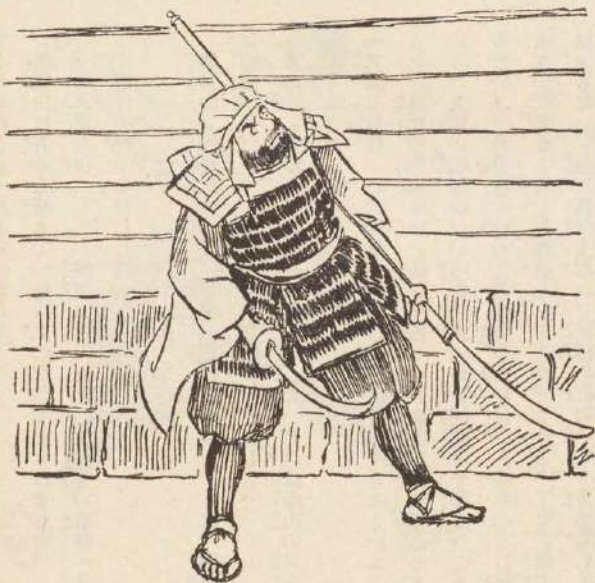
都中の評判になりました。

「此頃は、京都に身のたけが、一丈ほどもある天狗の僧がゐる、見つけられると誰でも刀を取られてしまふといふことで



す。」とみんなが云ひました。その頃は辨慶はもう九百九十九振の刀を奪つてしまつてゐました。そして烏丸にある御堂の天井の上へ隠しておきました。

六四



「もう一振で手振になる。何うかい刀を奪ひたいものだ。」

辨慶はさう思つて、その夜も出懸けました。先づ、五條の天神にお詣りをして、よい刀をお授け下さるやうにと、久しいみひだお願懸けをしました。そして天神へお詣りに来る人で、いい刀を差してゐる人はないかと思つて、一晩中、道ばたの築土(塀)の下のところになつてゐました。

欲しいやうな刀を差した人も見懸けないうちに、その夜も明け方になりました。辨慶は他のところへ行つて見ようとと思つて、堀河通りを南の方へ向つて行きますと、笛の音が聞えて来ました。

「面白い笛の音色だ。この夜更けに、天神へお詣りする人が吹くのだと見える。僧だらうか。たゞの人だらうか。何にしても、いい刀を差してゐたら奪つてやらう。」

辨慶はさう思つてゐますと、笛の音はだんだん近附いて来ました。何んな人だらうと、薄暗がりを見つて見ると、それはまだ若い男でした。白色の直垂の下へ、銀で拵へた飾りの澤山についた腹巻(帯)を着て、そして金で拵へた飾りをつけた刀を差してゐます。その刀は何れほどいゝものか、

ちよつとは見當の附かないものに見えました。

「何うでもあの刀を奪らう。」辨慶はさう思つて、その若者の近附いて来るのを待つてゐました。

三

笛を吹いて来た若い人は、誰でもない義経でした。

義経は、變な僧が、刀を差して道ばたに立つてゐるのを見かけました。

「あれは當り前の者ではない。このごろ京都で、人の刀を奪ふ者があると聞いているが、たしかに、彼れがそれだ。」さう思つて、少しも臆した風をしずに、そちらへ近寄つて行きました。

辨慶は心の中で、

「此れまで、随分強さうに見える人の刀でさへも奪つて来た。これは、それに較べると弱さうな男だ。呉れと云つたら、此方の様子なり聲なりで怖れ気がついてしまつて、きつと呉れよう。もし呉れなかつたら、突き倒して奪つてやらう。」と思つて、近寄つて来た若い人の前へあらはれました。

「いい刀を持つ一人に逢ひたいものだと思つて、久しく待つ

六五





## 靴の福幸

雄正山楠

デンマルクのコーペンハーゲンといふ都にあつたお話です。或晩、そのコーペンハーゲンのある町の軒のうちに、お客すきなこの家では今夜もお友だちの集りがあるので、へじつはわたしもその仲間によばれて行つたのです。賑やかな勢の話をしました。お客の半分はもうカルタ半に向つてゐました。あとの半分は、主人役の奥さんから今しがた、

「さあ、こんどは何をはじめませうね」といふ提案がでたので、どんな結果がそこに現れるかと目を丸くして待つてゐるのです。もう随分お客様同志の話がはすんで、活氣づいてゐました。さういふ話の中には、ヨーロッパの昔の中世時代、お侍と坊さんのるばつてゐた時代の話も出ました。ある人は、あの時代は今の現代に比べては比較にならないほどよかつたと主張しました。じつさい、顧問官のクナップ氏はこの主張に大そう熱心なあまり、現代びいきなこの女主人と大きな聲でやかましい議論をはじめかけたからで、顧問官の説に従へば、デンマルクのハンス王の時代といへば、人間がはじまつて以来一ばん高尚で一ばん幸福な時代であるとい

てゐた所です。ここは唯は通れません。通らうとするなら、その刀を渡してお通りなさい。」

「このごろ、さういふことをする馬鹿者がゐると、噂に聞いてゐた。唯はやらない。欲しかったら、寄つて来て取れ。」

「それなら、相手をませう。」

辨慶はさう云つて、刀を抜いて飛びかかつて来ました。義經も小さな方の刀を抜いて、走りかかりました。

若い男のこの言葉も、様子も、辨慶にはみんな意外でした。辨慶は、

「たとひ鬼神でも、此頃、この自分を相手にして戦ふものなどは無いはずだ。よし、一打にしてくれよう。」と切り込んで来ました。義經は、

「此奴は感心な奴だ。」

と思つて、切り込んで来る刀をはづして、相手の左手の方へ、電のやうにすばやく躍り込みますと、辨慶の刀は空を切つて、築土(塀)へ切りつけてしまひました。抜かうとするところを、抜いてしまはない中に義經は、左の足を高く上げて、辨慶の駒のところを強く蹴りました。蹴られた拍子に辨慶

は、持つてゐた刀を放し、義經はその刀を拾つて、「えい」と聲を懸けると一しよに、一間半ほどある築土の上へ躍りあがつてしまひました。

辨慶は、まるで鬼神にでも刀を取られたやうな氣がして、呆れかへつて立つてゐました。

「此れからはかうし、亂暴はするな。刀は取つて行かうかと思ふが、欲しくて取つたと思はれるのは厭だから呉てやる。」

義經はさう云つて、その刀を築土(塀)の屋根へ立てて、足で踏みつけて、曲けてしまつて、投げ下しました。

辨慶はその刀を拾つて、曲つたのを直して、若い人の方を怨めしさうに見あげました。

「あなたは随分ひどい目にあはせた。この邊にゐる方と見える。今夜はしくじつたが、此大ぎには爲かへしをして見えます。油断をなさいますな。」と獨りごとを云つて、あちらへ行きました。

義經は「彼奴は叡山の僧らしい」と思ひましたから、

「山法師、見懸りに似合はなく弱いちやないか。」と云ひましたが、辨慶は、返事もしませんでした。(つゞく)

### 一 お話のはじまり



ふのでした。

さて會話がこんな方向に向つていつたので外のお客たちはそろ／＼たいくつしかけました。ちやうどそこへ夕配達の新聞が届いたので、ちよつと話が途切れたのを幸ひ、そのまゝわたしはおとなりの應接間へ入りました。するとそこにはステッキと傘と上靴が一足置いてありました。見ると二人の婦人が卓の前に坐つてゐました。一人はまだ若い婦人ですが一人は年を老つて、ました。ちよつと、とお客の奥さんたちのお迎へに来て待つてゐる女中だちかと思ふでせう。でもよく見ると二人ともたゞの女中なぞじゃないといふことはわかりました。それには二人ともきやしやすぎる手をしてゐました。その容子でも物腰でもそれには立派すぎるましたし、若物のしたて方も随分變つてゐました。ほんたうは、この二人は妖女だつたのです。若い方は幸福の妖女ではありませんが、そのお傍附の召使の一人でした。その主人の妖女の代りに、ちよいとした小さな幸福を人間に授ける役をつとめてゐるのです。年を老つた方は幾らか陰氣らしい顔をしてゐました。これは心配の妖女でした。この方はいつちも自分で氣に入つた

かういふと心配の妖女が、

「いやお待ちなさいよ。その上靴をはいた人はきつと随分不仕合せになるでせうよ。そしてまた早くそれをぬぎたいと待ちこがれるやうになるでせうよ。」といひました。

「まあ、見ていらつしやい。」ともう一人が不服らしくいひました。「さあそれでは幸福の上靴を門口に置いておきますよ。誰か、間違つてひつかけて、いやでもすぐ幸福な人間になるでせう。」

どうです。これが二人の女の話でした。

## 二 顧問官はどうしたか、昔の時代に逆戻り

もうだいな夜が更けてゐました。昔の好きな顧問官クナツブ氏は、ハンス王時代のことばかり一生けんめい考へ込みながら、家へ歸らうとしました。ところで運命の神様は、この人が自分の上靴と間ちがへて、幸福の上靴を穿くやうに取り計つてしまひました。そこで顧問官が何の氣なしにそれを穿いたまゝ東町の通へ出ますと、もうさつそく上靴の效能が現れて、クナツブ氏は忽ち三百年前即ちハンス王の時代まで引き戻されてしまひました。するとさつそく顧問官は往來のぬ

人の所へすんすん出かけて行つて仕をするのです。

二人はお互に、今日どこで何をして来たか話し合つてゐました。幸福の妖女の召使はほんの二つ三つごくつまらない事をして来ました。例へば新しいボンネットが夕立に濡ふところを助けてやつたり、ある正直な男に無名の篤志家からほどこし物を買つてやつたり、まあそんな風なことでした。しかしそのあとで、これから話さうとしてゐたことは、幾らか變つた出来事でした。

「まあ序だからいふけれど。」と幸福の召使は話しました。「今日はおわたしのお誕生日なのです。それで其お祝ひに主人から上靴を一足あつつけられました。そしてそれを人間の仲間にやつてくれといふのです。その上靴には何かしら一つ功徳があつて、それを穿いたものは誰でも自分が一番住んで見たいと思ふ時代なり場所なり境遇なりに、それはどんなに古い時代でも、どんなに遠い場所にでも、またはどんなに變つた境遇にでも、すぐと運んで行かれるのです。これはすぐと望んでゐるやうになるのです。そしてそのまゝ、誰でもこの世の中に入るながら幸福になれるのです。」



かるの中へ兩足をつつこんでしまひました。なぜならその時代はもちろん昔のことですから、アスファルトや、木煉瓦でしきつめた道なんぞが一つだつてある筈がないのです。「やれ／＼、これはえらいぞ。いやはや何といふきたない町だ。」と顧問官がいひました。「どうしていつの間にかくのい、敷石をみんなどつてしまつたのだらう。電燈を皆消してしまつたのだらう。」



月はまだたんと明りを投げるだけに高く上つてはるませんでした。空気がなかく重くつて、何もかもやたらに物が暗闇の中であらけ出してゐるやうに思はれました。次の町の角にはうすぐらいランプが一つ聖母のお堂の前にさがつてゐましたが、その明りはまるでないのも同様でした。唯ちやうどその下に立つて仰いで見ると、聖母と子供の彩色した像が目にはひりました。

「これはきつと繪を賣る家なのだ。日がくれたのに看板をひつこめるのを忘れてゐるのだ。」と顧問官は思ひました。

大昔の服装をした人が二人すぐ傍を通つて行きました。

「おや、何といふ風をしてゐるのだ。假裝舞踏會から歸つて来た人ぢか。」と顧問官はひとり言をいひました。

ふと出し抜けに、太鼓と笛、音が聞えて焚松がかん／＼と響き出しました。顧問官はびつくりしました。その時奇妙な行列が鼻の先を通つて行きました。まづ先には鼓手の一隊が、おもしろさうに樂器を打ちながら進んで来ました。その後には長い弓と石弓を撥いだ鎧武者がつかましました。この行列の中で一番えらい人は坊さんの殿様でした。びつくりした顧問官

「わたしはクリスチャン・ハーベンへ行くのだよ。」かういふとこんどは、向ふがおどろいてじろく／＼顔を見ました。

「全體橋はどこへ行つたのだ。」と顧問官はいひました。「第一こゝに明りをつけて置かないなんて怪しからんぢやないか。それにこの邊はまるで沼の中を歩くやうなひどいぬかるみだね。」こんな風に話しても、話せば話すほど船頭にはよけい分らなくなりました。

「どうもお前達の言葉はさつぱり分らん。」

と顧問官は癪癪を起してどなりつけました。そして背中を向けてどん／＼歩き出しました。しかしいくら歩いても顧問官は橋を見つけないことは出来ませんでした。欄干らしいものはまるでありませんでした。「どうもこの邊は實にひどい所だ。」と顧問官はいひました。その晩ほど情なく思つたことはありませんでした。

「まあこの分では馬車を備ふのが一ばんよさうだ。」と顧問官は思ひました。さういつたとスミスで、こゝに馬車があるでせうか。それは一臺の馬車だつてありはしませんでした。

は一體これはいつ頃の風をしてゐるので、このするきやうらしい假裝行列をやつて歩く人は誰なのだらう。といつて行列の中の人にたづねました。

「あれは大僧正です。」とその人はこたへました。

「大僧正だと、とんでもないことだ。」と顧問官はため息をつきながら頭を振つて、

「こんな大僧正があるものか。」と一人で不服をとなへてゐました。

今出あつたふしぎな行列のことを思ひつめながら、右も左も見返らずに顧問官はすん／＼東町を通りぬけて高橋の手前の廣場に出ました。ところが王宮の四つ辻へ出る大きな橋が見つかかりません。その代り淺い小川の岸を見つけました。その中に小舟に乗つてやつて来る二人の船頭らしい男に出逢ひました。

「渡しに乗らないかな。」と船頭はいひました。

「渡しだと。」と顧問官は鸚鵡しに答へました。何しろこの人はまだ自分が今いつの時代にゐるのかはつきり知らなかつたのでした。

「これではやはり市場まで歸る方がいゝだらう。あそこには澤山馬車も來てゐるから。さうでもしないと、とても家まで歸ることなど出来さうもない。」

そこでまたもとへもどつて東町の方へ歩き出しました。そしてほとんど町を通りぬけようとした時に、月の光がさつとさしました。

とにかく町を通り抜けると今もある公立市場のところへ出ました。けれどそれは唯のだつ廣い牧場でした。ほつ／＼と藪がつつ立つてゐる牧場を斜かひに一筋の大きな堀割のやうなものが流れてゐました。二三軒みすほらしいオランダ人の木挽小屋がその向ふ岸に建つてゐました。

「おれは靈氣様を見てゐるのか知らん。それとも酔つ拂つてゐるのぢやないか知らん。」と顧問官はため息をつきました。「ありや何だらう。ありや何だらう。もうどうしても病氣になつてゐるに違ひない。」ほんやり考へ込みながら、往來を歩き歩き、なほよくそこらの家の容子を見ると、大抵の家は堀立小屋に粗末な壁をぬつたもので、中には萱ぶきの家もありました。



「いや、どうもおれは気分がまるでへんだ。」と顧問官は泣き声になりました。「しかしおれは、ほんの一杯ボンチ酒を飲んだだけだがそれがうまくをさまらないと見える。それに時候はづれの鮭をたべたりなんかして、料理のくひ合せがわるかつたのかもしれない。もう一度戻つて行つて、主人に小言をいつて来ようかしらん。いや、それもばからしいやうだ。それにまだ起きてゐるかどうか分からない。さうかといつてかうしてゐても自分の家へかへる見込も立たない。とにかくさつきの家まで行つて見て、それから改めて家の方角をきめることにしよう。」

かうひとり言をいひながら、顧問官はさつきまでお客にやばれて行つてゐた家らしい見當に向つてあるき出しましたがもうその家だつてむろんどこにもありはしないのでせう。

顧問官のゐるのは昔の世界です。昔の世界でいくら今の世界の人の家をさがしたつて見つかるものではありません。

顧問官はかうして一晩中ありもしないものをさがし歩いてくたびれ切つて、多分昔の世界で行倒れになるところでした。ところでしあはせなことに、そのうち目がまはつて、往來

にじやまらしくつき出してゐる木の根に足をとられると、體はあつと前に倒れましたが、厄介な上靴は木の根にひつかつてすつほりぬけました——それで一切の夢が消えてなくなりました。

その時顧問官ははつきりと、すぐ目の前に、電燈が一つかんかん灯つてゐて、その後大きな建物を見つけました。何をみてもおなじみな立派な物ばかりでした。それは今の世の中で毎日見えてゐる通りの東町でした。顧問官は往來に足を伸して腹這ひになつてゐたのでした。すぐ向ふには町の夜番がぐつすり寝込んでゐました。

「やあ大へん、おれは往來で寝て、夢を見てゐたのか。」と顧問官は叫びました。「どうも今までの薄くらしいのちがつて、何か、かん／＼明るくつて、すばらしく愉快だ。それにしても一はいのボンチ酒の利目は實に恐しい。」

それから二分の後、顧問官はゆう／＼と辻馬車の中に坐つて、クリスチャンス・ハーベンの自分の家の方へ運ばれてきました。顧問官は今し方さん／＼恐しい目や心配な目にあつたことを思ひ出すと、今の世の中にはそれはいろ／＼わるい

ことはあつても、ついさつきもつて行かれた昔の時代よりはすつと幸福ない、時代だといふ事をつく／＼さとりました。

### 三 夜番の冒険

「おや／＼、あそこに上靴が一足ころがつてゐる。」と夜番はいひました。「きつと向ふの二階にゐる中尉の物に違ひない。すぐ門口に轉がつてゐるから。」

正直な夜番はすぐ鐘をならして、上靴を主に設さうと思ひました。二階にはまだ明りがついてゐました。けれど家の中のほかの人達まで驚かすのも氣の毒だと思つたので、そのまゝ捨て、置きました。

「だがかういふもの穿いたら随分温いだらう。」と夜番はひり言をいひました。「何といふ柔かない、革がつかつてゐるのだらう。」上靴はびつたり夜番の足に合ひました。

「どうもこれはたまらなく睡たい。今頃中尉はあの温い寢床の中に横になつてゐるのかな。いやさうではないぞ。部屋の中を行つたり来たり、歩いてゐる。ありや仕合のいゝ男だ。お上さんも子供もなくつて、毎晩夜會に出かけて行く。おれもあの人だつたら随分仕合せな人間になれるだらうな。」





夜番がかういつて、自分の望を口に出していひますと、穿いてゐた上靴が早速効能を現して、夜番の魂はするくくと中尉の軀の中へ運んで持つて行かれました。

所が人の心内にはひつて見ると、なか／＼うはべで見て思つたやうではなく、この中尉も一向仕合せでありません。「あそこの往來に寝てゐる貧しい夜番の方がおれよりはすつと幸福だ。あの男には家もあり、上さんもあり、子供もあつて、あの男の悲しいことには泣いてくれ、嬉しいことには喜んでくれる。あゝおれは一層あの男と代ることが出来たら、今よりすつと幸福になれるのだがな。あの男はおれよりすつと幸福なのだからな。」

中尉がかうひとり言をいふと、その瞬間夜番はまたもとの夜番になりました。なぜなら、幸福の上靴、お底で夜番の魂は中尉の體を借りたのですけれど、その中尉は夜番よりも一層不平等でおれは夜番になりたいと望んだのでした。そこでその望みどほり夜番はまたほんたうの夜番になつてしまつたのでした。

「いやな夢だつた。」と夜番はいひました。だが随馬鹿々々

しかつた。おれは向ふ二階の中尉になつたやうに思つたが、まるで愉快でも何でもなかつた。おれは自分をだいにしてくる上さんや子供のあることを忘れてゐた。」

夜番はまた坐つて、ひとりでこくん／＼うなづいてゐました。でも夢はまだまるで心からとれずゐりました。上靴はまだ足にはまつてゐました。そのとき流星が一つ空を這つて落ちました。

「星が一つ飛んで来た。」と夜番はいひました。「だがいくらとんでもあとは深山星が残つてゐる。おれはどうかしてもう少し星の傍によつて見たいものだ。取り分け月の正體を見て見たいものだ。あれだけはどんなことがあつてもたゞの星とちがつて、目の前で消えて行くといふことはないからな。うちの上さんが洗濯物をしてやつてゐる學生の話では、おれたちは死ぬと星から星へとぶのださうだ。それはほんたうの話ではないが、しかし随分面白い話だと思ふ。どうかしておれも星の世界までとんで行く工夫はないものかしら。」

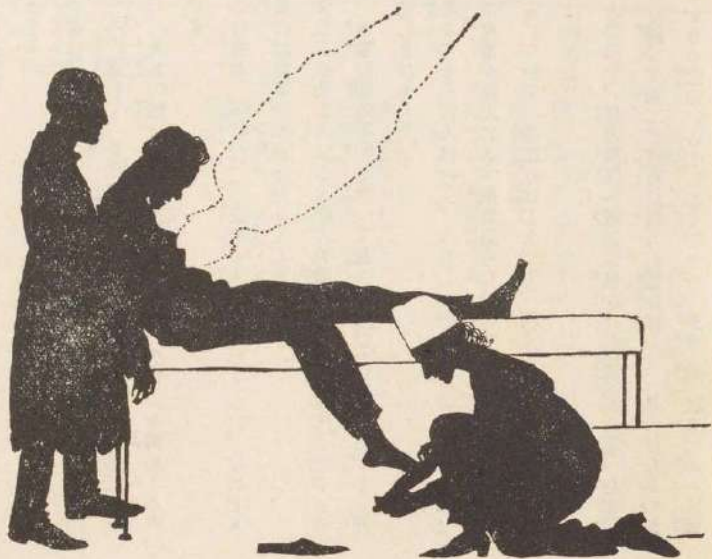
ところでこの世の中には、お互に口に出していふことをつしまなければならぬことが随分あるものです。取り分け





足に幸福の上靴なんかはいてゐる時は、誰だつて一層注意しなければなりません。まあその時、夜番の身の上にとんな事がおこつたとおもひますか。

まあ、わたし達が知つてゐる限りでは、誰しも蒸氣の力の早いことは知つてゐます。それは鐵道でもためしてみただし、海の上を汽船で通つて見ても分かります。ところが蒸氣の速力などは光が運ぶ早さに比べればなまけ狼かのそく、這つてゐるか、かたつわりがむづ／＼動いてゐるやうなもの



です。それは競走で第一等の選手が走るより九億萬倍早く走ります。でも光に比べて電氣の翼はもつと早く走ります。

電氣の翼に乗れば、太陽の光は九億五千哩以上の旅を八分と廿三秒ですませてしまひます。ところで電氣の翼にのれば魂は太陽と同じ道のりを二三度瞬きする中に飛んで行つてしまひます。でもやたらに電氣の翼にのることは命を取られる危険があります。たゞこの夜番のやうな、魔法の上靴をはいてゐる時だけがふのです。

二三分で夜番は二億六千哩の道を歩いて、月の世界まで行きました。そこでは人の體が地の上の人間とはちがつた、すつとはい材料で出来てゐました。そして謂はゞ降り積つたばかりの雪のやうにふは／＼柔かです。

夜番は月世界大地圖でおなじみの三方に取りまはした山の一つに降りました。山が輪になつて廻つてゐる裏に大きな鉢形の窪みが何哩もふかく掘れてゐました。その堀の底に町があつて、その容子はちよつといふと、卵の白味を、水を入れたコップに落したといふおもむきですが、いかにもさはつて見るとまるで卵の白味のやうにふよく／＼柔かで、人間の世界

と同じやうな塔やお堂や樓閣がたくさん建つてゐて、白ら帆のやうに、薄い空氣の中で透き通つて浮んでゐました。人間の住む地球は大きな赤い火の玉のやうに、月の世界の上の方にぶら下つてゐました。

夜番は間もなく、たくさんの生き物に出逢ひました。それは多分月の世界の人間なの、せうが、その容子はわたし達とはすつかり違つてゐました。

やはり言葉が話しましたが、夜番の魂にそれがわからうとは誰だつて思はなかつたでせう。ところがそれが分つたのだから、不思議です。

そこで夜番の魂は月の世界の人の達の言葉をするぶんよくときました。その人達はこの地球の話をして、一體人間が住めるところかしらと疑つてゐました。何でも地球は空氣が濃すぎて、感じのつよい月の人にはとても住めまいといひはりました。その人たちは月の世界だけに、人間が住んでゐると思つてゐるのです。なぜなら、古い世界の人が住んでゐる、ほんたうの天體といつたら月のほかにはないといふのです。

しかしそれはそれとして、またもとの東町へ降つて行つて、



そこに夜番の魂がおき去りにして来た體はどうしたか見て見ませう。

夜番は階段の上へ息がなくなつて寝ていました。棒は手からころけ落ちて、その目はほんやりと月の世界を眺めてゐました。夜番の體はぬけて出て行つた魂の行方を眺めてゐたのです。

「こら夜番、何時だ。」と往來の人がたづねました。けれども夜番には返事が出来ませんでした。

すると往來の人はごく軽く夜番の鼻をつまんでこつきますと、夜番は體の平均を失つて長々と地びたに倒れて、——死んでしまひました。

鼻をつまんだ人はびつくりしたのしなひではありませぬ。夜番が死んだまゝ生き返らないのです。早速警察に知らせるにつれて、相談がはじまつて、明るる朝死體は病院にはこばれました。

ところで、月の世界へ遊びに出かけた魂がそこへひよつこり歸つて来て、東明に残した體を探して、見つけなかつたらかなり面白くなるでせう。多分魂はまづ第一に警

察へ出かけるでせう。それから、陪役所へも行くでせう。そしてなくなつた品物の行方について探索かほじまるでせう。それから病院までもふら／＼たづねて行くかも知れません。でも安心してよろしい。魂は自分の始末をするのはこの上なく器用です。間のぬけてゐるのは體です。

さて申上げたとおり、夜番の體は病院へ運ばれました。そして浴室に入れられました。死骸にお湯をつかはせるにつれて勿論第一にすることは、靴をぬがせることでした。そこでいやでも魂は歸つて来ないわけにはゆきません。で、さつそく魂はもどつて来ました。すると見る／＼死骸に息が出て来ました。

夜番はこれこそ生涯に一番恐しい晩であつたと白状しました。もう五十銭銀貨一つもらつても二度とそんな思ひはしたくないといひました。しかし今になればもう一切すんだことでした。

その日すぐと夜番は病院を出ることを許されました。けれど幸福の厄介な上靴はそのまゝ、病院に残つてゐました。さてこんどは誰がそれをはきますか。

### 桐の花

(推慈)

倉田彦郎

桐の花 ほろり

ほろり

いくつも落ちる

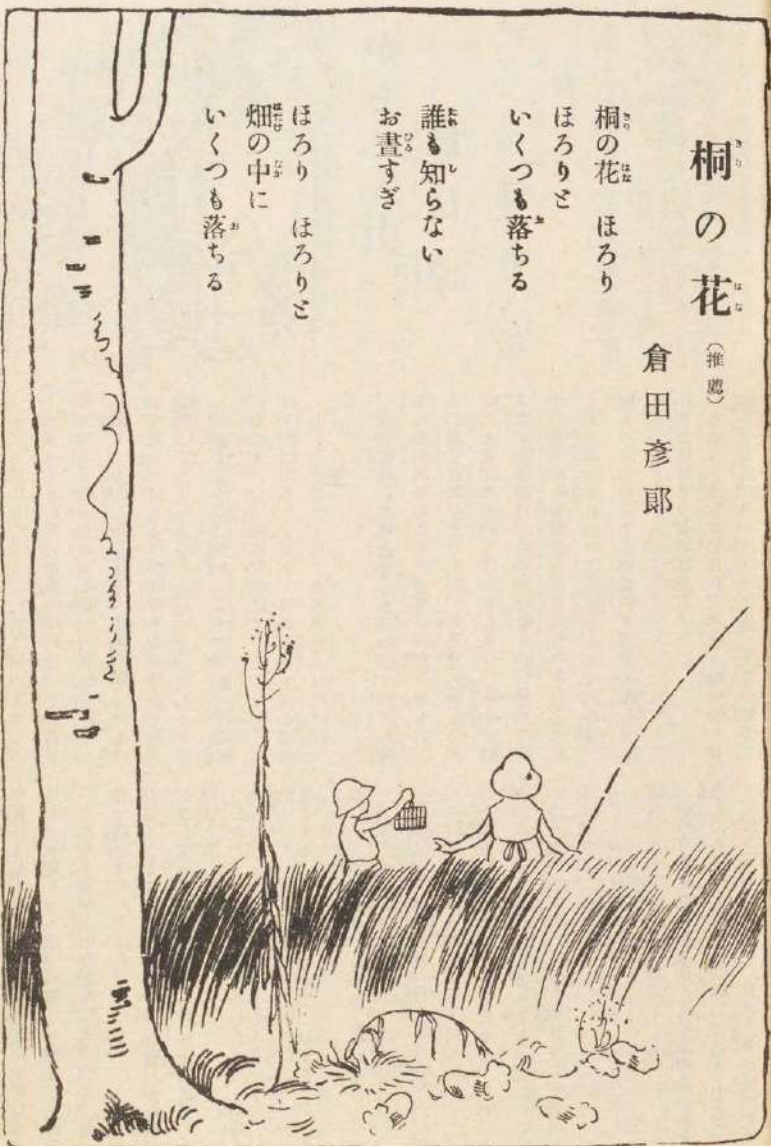
誰も知らない

お書すぎ

ほろり ほろり

畑の中に

いくつも落ちる







かちく山  
後日譚

田中實

四

兎は一寸も休まないで、歩いたり走ったりしました。山道や、田圃や、河のふちや、いろんな道を通りました。夜になってどこもかしこも、見だなくなつても、たゞ江戸へ早くつたさに一生懸命に歩きつづけました。

んでした。

兎はうれしいうな、さびしいうな、なんだかへんな氣持になつて段を下りはじめました。

すると、横手でだれか、掃除してゐるやうなげはひがしました。

『これはいけない。』

兎はすぐ、一足飛びに段をとび下りました。

そのひやうしにあやまつてお尻をひとつ、ポンと打ちました。兎はそのとき、

『あゝしまった。觀音さまがお腹立ちだ。』と思ひましたが、だれかに見つげられてはいへんだと思つて、お詫びもしないで、どこをあてもなくめぐらめつぼうに走りまわりました。

六

兎は淺草を出て大川橋にさしかかりました。『ばあ、これが有名な隅田川だな。では、この川にそつて少し上つて見よう。』と兎は思ひました。

もう全く夜は明けてゐましたが、霧がたてこめて、一寸先のものも見えませんでした。橋を渡つて、土手をとぼくと歩きました。

あくろ朝になつても、一寸も休みませんでした。――その間にお腹が空けば、道に轉がつてゐるものをなんでも拾つて食べました。道で、人間とかまたは、ほかの強いけものたちを見つけると、すばやくかげにかくれるのでした。

五

その夜中の二時頃でした。やつと江戸の淺草についたといふことが兎には解りました。まつ暗ではありましたが、仲見世が長くつゞいてゐて、そのいちばんおしまひに大きい仁王様があるのは、いつかお爺さんに見せて貰つた淺草寺の繪圖そつくりだつたからです。仁王様の大きいことに驚かされて門を通り抜けると、たくさんのお幸がならんでをりました。

『やつぱりさうだ。江戸だ。』  
兎はもう大勢びでした。今晩一晩ゆつくり眠らせて貰はうと、ひながら、本堂の前の下

バサ／＼と羽ばたきをたて、何かと飛んで行くたびに自分をねらつてゐるものが近づたのではないかと心配しました。

三圍さまのお社近く来たころは、霧が大分消えて、おぼろげながらもあたりの景色が見えて來ました。土手の向ふは、たいに畑続きらしく、草葺の百姓屋がちらほらしてをりました。どの家にも朝餉の煙が、高く／＼のぼつてゐました。

兎は、三圍さまにおまゐりしようと思ひながら境内にはひつて行きました。すると、ふいに、藪のなかから獵師と狸が飛び出して來ました。

――もうこのとき、獵師と狸は江戸へついでなりました。そして、この三圍さまの藪の中で休んでゐたところでした。

『やあ、兎、丁度よいところへ來た。尋常に勝負しろ。』と、後から獵師が聲をかけますと兎はびつくりして、生命のかぎり逃げ出しました。そのあとから獵師が鐵砲をドンドンはなしながらおつかけて行きます。狸も大きなお尻をか／＼へて、とぼ／＼後をついて行きました。

の誰にも見えない處へ入りました。そして、ゆつくり眠らうと思つて横になりましたが、いろんな不安が頭のなかを行き合つて、なかなか眠れませんでした。でも、しばらくすると、勞れのために睡けがさして、心配ごとにも消えてしまひました。

兎は、これはたいへんだと思ひました。そして大急ぎで藪の下から外へはひ出しました。

『こゝでぐ／＼眠つてゐる時でない。こゝはお詣りが多いといふことだから、だれにも見つからぬうちにどこかへ行かう。』  
さう思ひながら、まづ、觀音さまにお詣りいたしました。そして、  
『どうか、私の生命をお救りください。』と、よく／＼お願ひいたしました。

七

足の早い兎は、幸ひに獵師の目からうまく隠れる事が出來ましたので、また土手へ出ました。それでなほしばらくの間駆けて行きますと、鐵屋さんが店を出して、鐵を焼いてをりました。兎はなかへ入つてわけを話して、『どうか一寸の間おかくし下さい。』と頼みました。

すると主人は、氣持よくゆるしてくれて、『それでは見えないところへ隠してあげよう』といひながら、しばらく考へてをりました。が、川に浮べてあつた鐵船をみつけると、

『あゝ丁度いゝ。暫く苦しんだらうが、あんなかへ入つてゐなさい。あそこならたれにも氣がつかないだらう。』と親切にいつてくれました。

兎は涙がこぼれるほどうれしく思ひました。幾度も主人にお禮をいって、鐵船のなかへ入りました。

しばらくすると、獵師と狸が入つて來ました。獵師はいら／＼したやうな聲をだして、『今こゝを、足のながい兎が通りやしません



でしかかれ。」と聞きまして。

すると主人は、

「いゝえ、別に通らなかつたやうでしたよ」と答へたまゝ、見むきもしないで煙を焼いてなりました。

獵師は「さうですか。」といつて、家のなかを怪しさに覗んでみましたが、

「この中へ入りやしなかつたでせうね。」とまたたづねました。

すると主人は怒つて、

「何だ！ 失敬なことないふとそのまゝにはして置かないぞ。」とどなりました。

さうなると獵師も負けてはゐません。

「失敬とはなんだ。ちやんとわしたちが、中へ入つたのを見ていふのに、お前は隠してゐるばかりか、どなるぢやあないか。」

「何をいつてゐるのだ。居ないと云は居ない、生意氣なことないばすに、さつさとかへれ、かへれ！」と、主人は獵師の胸をつかまへて、つき出さうとしました。

するとそこへ、「一人の若衆が入つて来ました。若衆は二人の間に割つて入つて、

「何な悪いでゐるのだ。まあ、落つきやうと思つてゐるのだ。」と、どなりました。



なさい。どういふわけか知らないが、おとなしくしたがいゝでせう。」といつて仲敷しました。

翌はふと、何気なくその若衆を見ますと、それは「昨日の晩、お爺さんと話してゐた男なので、きくりとしました。

### 八

その若衆は、お爺さんの息子の次郎作だつたのです。

次郎作はお爺さんのうちを飛び出して、長い間するぶん悪いことをして放浪してゐましたが、どういふわけか今度すつかり心を入れ替へて、或るお屋敷の尼經に住み込みました。

ところがその若衆さまが、熱病におかゝりになつて、大そう苦しんでゐらつしやいしました。次郎作はそれを聞くと、熱病には足長鬼の生膽がいゝといふことを思ひ出して、

「それなら、わしの田舎に鬼があるから捕つて来て差上げませう。」と、早速眼を貰つて忠義な鬼を捕りに、久しぶりにお爺さんのところへ歸つて来りました。

お爺さんは逢着でしたが、お婆さんが見えなさい。どうしても取つて見せる。わしは生命にかけても狸の助太刀をしてやるのだ。」

「何をいふ……」

たうとう次郎作は、腰に差してゐた脇差を抜いて、獵師を目かけて切つてかゝらうとしました。

それを船船の中であつと見てゐた鬼は、もうたまらなくなつて、

「あゝ待つて下さい！」と、さげびながら、そこにあつた庖刀を待出して、腹につき立てました。そして皆の前へ出て来て、

「待つて下さい。待つて下さい。次郎作さんも狸さんも、みんな忠義と孝行のためにおつくしなされるのです。さあ次郎作さま、わたくしはもう何もいひませんが、どうぞお爺さんによろしく……それから、次郎作さま、どうぞ私の膽をお取り下さいまし。狸さん、あなたもどうぞ思ふ存分仇討をして下さい。」と、ときれい々に叫びました。そのうちに鬼の息は次第々々弱つて行きます。

次郎作はあつけにとられてはんやり見てゐましたが、

「あゝ、しまつた！ お爺さん早まつたことを

ないのでどうしたことかと聞きますと、お爺さんは泣きながら、今までの話をしました。そしていちばんおしまひに、今日が丁度お婆さんの二年目の忌日であることゝ、鬼が江戸へ出立したことをつけくはへて話しました。

次郎作は、それを聞くと、大そう驚きました。

「さういふ譯なら、その親切な鬼をわたしのところで飼つてやりませう。さうして若衆さまにはどこか外の鬼を見つけて出して差し上げることにませう。それではお父さん、一寸江戸へ行つて見て参ります。鬼にどんな間違ひでも起るといけませんから。」さういつてお婆さんの位牌にお線香をあげて、今までの不孝をお詫びしました。

その翌日、次郎作は江戸へ出立しました。次郎作はやつぱり馬に乗つて、その翌々日の朝早く江戸へ歸つて来りました。そして、向島にある御主人のお屋敷へかへりかゝると、鏡屋で大騒ぎをしてゐましたから、入つて行つて仲敷したのでした。

### 九

してくれました。でも、そんなに勝手ではもう助かるまい。それで濟まないが腹を貰つて忠義なしよう。」と、泣く泣く鬼のお腹を切つて膽を取りました。

その後を狸と獵師が切りつけてとうとう長年の仇を討ちました。

狸と獵師はいひました。

「なんだこんな氣の抜けた仇討は見も聞きもしない。本當に馬鹿々々しい。」

しかし、さうつぶやきながらも喜び勇んで歸つて行きました。

### 十

そのうち、次郎作は若衆さまに良い薬を差し上げて全快させたといふので、足輕から一足飛びに侍に取り立てられましたので、お爺んを田舎から呼びよせていつしよに暮したといふことです。

また、獵師と狸は、田舎へつれ立つて歸りましたが、それから間もなく姿が見えなくなつたといふことを聞きました。きつと老狐がで生残つたけれども、仇討をしたのに違ひありません。

(なほり)





## 私わたくしの好すきな話はなし

小島政二郎

### 一 瓶割り柴田

織田信長の先陣の大將柴田勝家は、一日も早く京都へ攻め昇らうといふ考へで、軍を率ゐて近江の國まで進んで來ました。それを聞いた足利將軍家では大いに驚いて、佐々木拔關齋を大將として大軍を繰り出しました。

勝家は長光寺の城に居ました。拔關齋の軍は城をかこんで勢、鋭く攻め寄せました。しかし「鬼」と呼ばれた勝家の守つてゐる城は、さうたやすくは落ちませんでした。

ところが、その村の或百姓が、拔關齋の陣へ行つて、「あの城は飲み水の便が悪くて、遠いところから汲んで來なければならぬのです。ですから、その水を汲みに行く道をふさいでしまへば、城は落ちること受け合ひでございます。」と教へました。

拔關齋は非常に喜んで、早速兵卒を大勢やつて、その道をふさいでしまひました。これには流石の勝家も大いに困りました。しかし、一同申し合はせて、敵には少しも弱つた様子を見せないやうに注意し合ひました。水の手を切つたらすぐ

にも降参するものと思つてゐた拔關齋は、不思議に思ひました。で、平井甚助といふ家來を、表向きは仲直りの使と見せ

かけて、實は城の中の様子を探らせに勝家の許へやりました。

勝家は、本丸の大廣間へ平井を呼んで御面會なさいました。

平井は挨拶が済むと、すぐ

「恐れ入りますが、手を洗ひたいと存じますから、水を少々いたゞきたいと存じます。」と申し入れました。かう云つたら、水の足りない勝家方では困るだらう、さうすれば、水の出し工合で、どのくらゐ困つてゐるか分る譯である、さう思つてかう云つたのでした。

すると、案に相違して、大きな瓶を二人の小性が重さうにかついで來て、平井の前に据ゑました。

「これは懼り多う存じます。」

かう云つて、平井は洗ひたくもない手を洗ひました。さうして素の膚へ戻ると、また二人の小性が出て來て、平井が使ひ残した、まだ澤山ある瓶の水を、惜しけもなく庭へ捨て、しまひました。

これを見た平井は、勝家方では水に困つてゐるとは思へま

せんでした。急いで自分の方の陣へ歸つて來ると、大將の拔關齋が大勢の家來を集めて待つてゐました。で、その前へ出て、自分の見て來た右様を皆に披露しました。すると、皆の者は首をひねつて、自分等の謀つたことが外れたのを怪しみ合ひました。

「して見ると、勝家方では、どこか外にも水を得る場所が備へてあると見える、それにしても、不思議ぢやな。」

中でも、拔關齋はかう云つて、當ての外れたのを残念に思ひました。しかし、實は、城の中では、佐々木方で考へてゐたよりも、もつとく、水に困つてゐたのでした。もう殆んど水が盡きんばかりになつてゐました。

で、勝家は、最後の決心をしました。その夜、家來一同を廣間へ集めて

「さて皆の者。今まで辛い思ひをして籠城して貰つたが、いよく、肝腎の水がなくなつてしまつた。で、明日は一同潔く討つて出て、切り死を致さう決心ぢや。ついては、今宵は月のあるのを幸ひ、別れの宴を催さうと思ふ。どうか心置きなく飲んで貰ひたい。」



かう云つて、覺悟の程を打ち明けました。かねて用意の出来てゐた膳が昔の前に運び出されました。まづ、勝家が大きな土盃になみくくと酒を注がせて、一息にくつと飲み干しました。つづいて一同も土盃を手にして、酒を飲みはじめました。かうして、だんくくと酒の酔ひがまはるにつれて、皆の者は聲高に明日の功名話に花を咲かせました。勇気に満ちくた一座の有様を、勝家はいかにも満足げに眺めてゐました。



「こりやく、残つてゐる水は、あと何程ぐらゐあるな。」と、小性にお尋ねになりました。小性は

「はい、あと二石ぐらゐかと存じまする。」と答へて、厨から大きな瓶を擔いで來ました。それを見た勝家は「これまでは、お前方に飲みたいだけの水も飲ませなんだ。さぞ喉の乾きを覺えたことであらう。なう、これが最後の水ちやさうな。各々飲みたいだけ飲んで喉を潤してくりやれ。」

かう云つて、まづ勝家自身杓子を取つて一口のんで次の者へ渡しました。一同は瓶のまはりに集まつて、思ひくくに喉を潤しました。瞬く間に瓶はからになつてしまひました。

勝家は、不恰好な形をして庭先にころがつてゐるその大きな瓶を暫くちつと見つめてゐましたが、何を思つたのか、つと立ちあがつて殊刀を取りあげたかと思ふと、つかくと庭

へおり立ちました。そしてやにはに殊刀の石づきを振つて、ビンと瓶を打ち破りました。「ははは……明日もこの通りぢや。」と、勝家は高やかに笑ひました。これに氣を得て、皆の氣も振ひ起りました。あくる朝早く、ふいに、勝家方では城門を押し開いて、勝家はじめ、決死の武士一同が大刀を揮つて打つて出ました。思ひもよらぬ敵に、佐々木方はさんぐくに打ち負かされて、京都をさして逃げのびました。

この時の戦ひは僅かな時間でしたが、打ち取つた敵の首の数が、八百以上もあつたと云ひますから、いかに激しい戦であつたか想像がつくでせう。勝家は早速その首を、岐阜まで進んで來てをられた織田信長の許へ送り届けました。信長は非常なお喜びで、勝家に對して、鄭重なお褒め言葉を下さいました。

これから後、誰いふとなく、勝家のことを「瓶わり柴田」と云ふやうになりました。

二 文字が救つてくれた命

これも信長に縁のある話です。前の話よりも幾年か前にあつたお話です。

その頃美濃の國には齋藤道三といふ豪傑がゐりましたが、信長のために攻め滅されてしまひました。その時、齋藤方の家來で、稻葉一鐵といふ大將が、降参をして信長の家來になりました。しかし、もつと敵の大將ですから、信長は油断をしませんでした。降参したと見せて、こつちの透きを窺つて寢首を搔かれるかも知れないと思ふと、信長は一日も安いい心とはありませんでした。で、そんな心配をするよりも、一思ひに一鐵を亡いものにしてしまはうと信長は決心をしました。

或日、信長は、腕前の優れた、そして利口な家來を三人お傍近くにお招きになつて、或謀をお授けになりました。それは、三人で茶の湯の會を催すからと云つて、一鐵をお客に呼んで、その場で殺してしまはうといふ謀でした。

三人から招待を受けた一鐵は、その日、衣服を改めてやつて來ました。三人は、丁寧に數寄屋(茶の湯を催す小さな庵)に案内しました。



この数寄屋へはひる時には、誰でも刀を差してゐることの出来ないのが茶の湯の方の規則でした。で、一鐵は刀を主人に預けて席につきました。無論三人も腰に刀を付けてはゐませんでした。しかし、その代りに、懐劍を隠して持つてゐました。

さて、席について床の間を見ると、繪の上に何やら詩の書かれてゐる幅が掛けてありました。一鐵がその幅を眺めてゐると、三人のうちの一人が

「稻葉氏、その詩をお読み下され。」と云ひました。

一鐵は武に強いばかりの荒武者ではありませんでした。少しは文字の心得もありました。で、

雲は秦嶺に横はりて家いづくにかある

雪は藍關を擁して馬進ます

と、すら／＼と読んで見せました。

すると、三人は

「ははあ。」と感心をして、「二たい、どういふ意味の詩でござるか。」



退之といふ詩人がござつた。これは、その韓退之が遠い／＼地へ流されて行く途中で作つた詩の二句と心得る。意味は、振りかへつて都の方を見ると、雲が山を掩つてもう家も見えなくなつた。行く先の方を見れば、雪が一面に降り積つてゐて、自分の乗つてゐる馬が進んでくれぬといふのぢやらうと存する。」

かう云つて説明をした一鐵の言葉を、数寄屋の外に忍んでゐた信長が壁越しに聞いて感心しました。感心のあまりに、一鐵をじいものにしようといふ心をサラリと捨て、しまひました。

さう心が變ると、氣短の信長はぢつと隠れてゐることが出来ませんでした。つと数寄屋の中に姿を現すと、

「一鐵は荒勝負ばかりする勇士とだけ思つてゐるが、今聞くところによると、文學にも達してゐる様子ぢや。感心したあまり本當のことを云つて聞かさう。今日のもてなしは、實は茶の湯ではなくて、その方を刺し殺さうと思つて仕組んだ誤なのぢや。三人は皆懐劍を持つてゐる。一鐵、今日より永く余に従つて、忠義を盡してくれ。余はその方に對する疑ひの

心を捨てたぞよ。」

かう云ふ信長の言葉につれて、三人はそれ／＼隠し持つてゐた小脇差を出して見せました。

一鐵は、信長の前に平伏して、

「死ぬる命をお許し下されたことを、忝く存じます。私も内々今日は殺されるのであらうと察しましたので、致し方なく、是非一人でも相手を殺さうと存じまして、用意をしてまゐりました。」と云ひながら、彼もまた、懐劍を取り出して見せました。

信長はいよくその心掛けの程に感心させられました。

(九はり)



鈴すず

蟲むし

人見東明

誰たれが振あるのか  
鳴ならすのか  
草葉くさばのかげで  
チンチロリン。  
昨日きのうも今日けふも  
野のに一面  
かはい音ねいろで

チンチロリン。

チンチロリンと  
夜よもすから  
鳴ないてゐる鈴蟲すずむしか。

母ははにわかれた  
みなし兒この  
泣ないてゐる  
秋あきの夜。

チンチロリンと  
夜よもすから  
草葉くさばのかげで鳴ないてゐる。







幼年詩  
若山牧水選

氷屋 (賞)

名古屋市南区  
呼続校尋四 宮島利枝

氷屋の店は  
涼しいやうだ  
お客が三人  
氷をのんでる  
一人が黄いの  
二人は赤いの

評、夏の夜は、ホソニ、涼しい美しい。

しりふり鳥 (賞)

山梨縣西山梨郡  
千代田校尋三 深澤 務

しりふり鳥が二匹きた  
二匹で何かはなしてる  
評、しりふり鳥とはせきれいの事ださうで

かぢや (賞)

千葉縣山武郡  
東金校尋六 伊藤 衛

學校のかへりにかぢやをみてゐたら  
ふいごがぶう／＼なつてゐた  
そのうち火の中からまつかな  
鐵をはさみだした  
こぞうが長いちもつて  
とつてんかんとたいたたら  
主人はほつべつたふくらませて  
ぐつとはさみでまつかな鐵をはさんでる  
評、なが／＼力のこもつた歌です。

ヨミチ

東京府東中  
野一六七五 長尾港太郎

ボクガヨミチヲホツタツ  
ミチノリヤウガハデ  
地蟲ガジイジイナイデキタ  
評、これもほんとのけしきをよくそのまゝ  
に歌つてあります。

ユキノナカヘ

東京府東中  
野一六七五 ナガヲ アキコ  
(六歳)

綴方

編輯部選

飛行機 (賞)

仙臺市大町  
五丁目尋五 千葉津木雄

ある日、私と兄ちゃんと話もかたらず、  
日なたほつこしてると、外が急にさわが  
しくなつたので、飛び出で見ると、そつ  
ちでも、こつちでも、飛行機だ飛行機だ  
と、かけまつてゐます。私と兄ちゃんも  
知らず知らず聲を上げた。  
空には飛行機がばく音高く飛んでゐま  
す。

我縣出身ださうです。

妹の泣顔 (賞)

香川縣木田郡  
水田校尋五 武田達子

しづかな晩でした。うす暗いランプの  
下で双六遊びをしてゐました。  
双六遊びもあきてみんなが面白いお話  
をしてゐると、お父様がゐらつしやつて、

「誰が勝つたのか」とおき、になると、  
「ほくが一番です」と弟は大ごゑでさけ  
びました。するとお父様は「誰が負けた  
のか」とおつしやると、一度も上りにな  
らなかつた妹はつらさうに下へうつむい  
てしまひました。お父様は「お前が負け  
たのだな」とおつしやると妹はたうとう  
泣き出しました。弟はそんなことにとん  
ちやくしませんでした。ほら泣蟲がないたない  
た」とはやし立てました。お父様は「な  
んだ妹を泣かせてだまつてをれ。」としか  
りました。妹はなほ／＼泣き出しました。  
私は急いで本箱からざつき帳を出して來  
てやると、泣聲もやんでざつき帳をいぢ  
くりながらねてしまひました。

害蟲驅除の日 (賞)

茨城縣眞壁郡  
若柳校尋六 赤萩和夫

その日は曇りでした。俺等が、沼岸の  
松林の下で蟲を取つてゐると、きふに白  
い風のやうな雨がふつて來て、俺等の方  
へだん／＼とちかづいて來ます。  
雨がくるより早くにけやうと思つた

が、下級生の三年生らをおいて行くのは  
可哀相であるからと言つて、手をひいて  
松林へにけこみました。にけこんだが、  
雨は松の間からふつてくるのです。三年  
生の邦夫や福二は、何とも言はずに、ち  
ぢまつてゐます。  
俺は「寒いか」と言つて、畠の中の新  
しい家へつれて行きました。

いな」などと言つて心配してゐると、風  
のやうな白い雨は、沼の向ふに行つて、  
松林の上をなめに降つてゐます。  
俺等が取りかけた田は雨がやんでゐる  
ので、五郎ちゃんも勇ちゃんも、邦夫や  
福二と俺は、林道を通つて、ピチャ／＼  
と、元氣よく、田の所へかけて行きまし  
た。

すると、すこしむかうの、黄色に赤るん  
だ麥の上を、ちら／＼と、  
害蟲驅除の旗が見えて來ま  
す。むかふの生徒は、林か  
らおりて、麥畠へかくれて  
しまひます。

俺らはいそいで田をおや  
して、旗をたてながら、み  
んなの方へかけてゆきまし  
た。

そのあたりはあかるくな  
つて、汽車の音もきこえず、  
鳥のなく聲もきこえず、雨  
はやんで來て、心の中がせ  
い／＼として、いつもより  
よい心持でありました。



花ぢやん (賞)  
岩手縣師範學  
校附屬校尋六 川村宮子



ユキノナカハ  
エフガタニ  
アメガフル  
評、ナントイフシツカナケシキデセリ。

えうねんし

東京橋代  
校尋二 小花喜久子

にいさんと どてへ  
いつたらば  
へいたいさんが  
たつてゐた  
一人ほつちで  
たつてゐた

評、これもほんたうのげしきなしやせいし  
たもの。

えんごつ

新潟縣中頸城郡名  
香山村妙高校尋六 増村 正義

向ふの工場の えんとつが  
今はさびしく 煙もださぬ  
もとはつづけて だしてゐるが  
今は工場の上に 大きいなりして  
一人ほつちで たつてゐる

評、これもしやせい。そして、ほんとにさ  
びしいけしき。

はなれたおうち

長野縣西筑摩郡新  
開村上田校尋四 野田 甲子郎

はなれたおうち  
山のなかのおうち  
そのおうちには  
りんごの木一本  
評、おもしろい所をよく見つけてよく写生  
しました。

おりなや

大阪府泉南  
郡谷川校 不 明

朝からばんまで  
ひるからばんまで  
ちよき〜と  
今日も朝から  
もめんをおつてる

評、正直な歌で、まことに面白い。

朝

大阪府泉南  
郡谷川校尋三 川戸 島 正 治

朝日ははてらす

ひいやん

鳥取市東谷町  
小學校尋六 廣谷 珠 枝

鳥取市に一番よくひいたばかは「ひ  
いやん」です。小さな三つ四つ位な小供ま  
で「それ、ひいやんが」と驚かされると、  
泣くのをやめる位です。「ひいやん」は  
上の「ひ」の字だけ取つてあとにはばかにし  
たやうに「やん」と附けて「ひいやん」と言  
ふあだ名にしたのです。かあいさうに元  
「秀吉」と言ふりつばな名をつけられて居  
ながらばかになつたばかりに「ひいやん」  
と附けかへられたのです。身には春夏秋冬  
冬區別なくうすい着物を一枚だけだらし  
なく着て、前はろくにおびをしめすはだ  
しのまゝで、所きらわづふら〜歩いて  
まわります。顔はどこか抜けて目はひが  
ら目で、髪は二寸餘のぼしいつも鼻血は  
口のへんまでたれてふかふともいたしま  
せん。

食物はおかまひなく土がついて居ても  
其のまゝろうそくのかげらでも、ひつか  
いて何んでも食べます。人々はひいやん  
が道を通ると「それひいやんがひいやん

が」と指さして罵りますが、私はいつ  
も其のおどけた顔を見るとどうしてこん  
なばかになつたのかしらんと不思議に思  
ひます。一つたいこの「ひいやん」の父  
母はどこに居るでせう。生きて居るでし  
やうか。

私のお留守居の時

京都府中郡  
三重校高一 糸 井 春 江

昨日はおるすであつた。私は妹と二人  
でお留守居をして居た。そこへおけいさん  
が走つて来て「春江さん遊ばない」と  
言つた。私は「はい遊ばませうよ」と答へ  
た。その時まあちやんが、「春ちやん〜敏  
ちやんは」と大きな聲で言つた。「まあち  
やんはぶち言ひながら上つた。敏ち  
やんの寝顔をのぞいてまあちやんは「敏  
ちやんおきな」と大きなこゑでわめい  
た。その時おけいさんがまあちやんに、  
「まあちやんそんなにする」と敏ちやんが  
てしまつた。敏ちやんはねむい目目をこ  
すりこすり泣いて「姉ちやんおきたん〜」  
「敏ちやんおきたんか泣くと〜こんこんが  
出て来てかむよ」と言つた。妹はすぐ泣  
き止んで、涙目をそつとぬぐつ  
た。

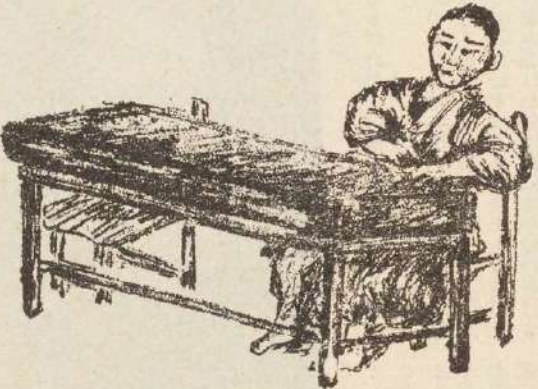
「姉ちやんおるすだで泣かん  
わ」と言つた。すぐまあちやん  
の方へ走しつて行つた。「まあち  
やん」と言つたがおこつてゐて  
返事もしない。二人はどちらも  
お手々を目にあてて「ああ〜ん  
ああ〜ん」と泣き出した。その  
時角の方でゴツゴツと靴の音が  
した。それはたしかなつかしい  
お父さんであつた。

おねだり

東京京橋京華  
小學校尋五 秋元 重 男

「ねお父さん買って下さいよ。」  
「だめだよ。つまらないから  
さ。」

「お父さん。そんな事言つたつ  
て金の星は大そう面白さうな本



正一君(賞) 福井縣坂井郡  
金津校高二 永井 善太郎



すずめがないてる  
すずしい風はふいてくる  
詩、これも實にすら／＼と正直に歌つてあ  
つていゝ氣の詩だ。

螢

香川縣木田郡 水田校高一 澁淵 カズエ  
夜露はどつしりふりつめた  
ほたるのおしりはまだ光る  
向ふの岸でひかつてる

もゝのつゆ

東京府杉並村天 沼家庭校尋六 日向 もゝ

もゝの花の  
はなびらの先の  
ちひさいつゆは  
あめコン／＼の  
子供よ

月の夜

新潟縣中頸城郡 名香山村尋六 宮下 政男  
月の夜は 明るいぞ  
誰でも外へ 出て遊ばれる  
皆んな出て来て 遊そぼうよ

くさばな

千葉縣山武郡 東金校尋四 服部 正子  
今までねむつて居たくさはなたちが  
いつの間にか眼をあいた

ほん／＼鳥

千葉縣山武郡 東金校尋四 瀧口 マサ  
日がくれると  
ほん／＼鳥が  
ほん／＼とないてる  
おうちのまへのおやまで  
ほん／＼とないてる

風

千葉縣山武郡 東金校尋六 塚田 タマ  
そよ／＼／＼と  
ふく風が  
私の中からあたつて  
すすしいな

夕チンポ

東京府赤坂區 中之町校尋二 塚本 節子  
夕チンポガキル

はたけ(賞)  
千葉縣山武郡 東金校尋六 野老 愛三



九六  
思つて泣顔になつて来た。お父  
さんは少したつて歸つて来た。  
そして「はら。」と金の星を僕に  
渡してくれた。僕の顔は急にニ  
コ／＼顔になつた。

うちのねこが死んだ

東京府北豊島郡 山田 きよ  
大泉小學校尋四  
私の中のねこをもちつた時  
分には、弟がいたづらざかりで  
したから、ねこをもちつた時に  
はあちらへなけ、こちらへなけ  
ましたから、私がかあいさうに思つてふ  
とんの中にねかしておきました。

「でもだめだよ。他の物を買つてやら  
う。」  
「金の星でなければいやだよ。」  
「お母さんがいけないと言ふよ。」  
「でもこれから言ふ事を聞くからさ。」  
「お前のこれからは當にならないよ。」  
「當になるからさ。」  
「仕方がない。買つてやらう。」  
僕はおねだりをした。お父さんは外へ  
出て行つた。僕は買つてくれないのかと

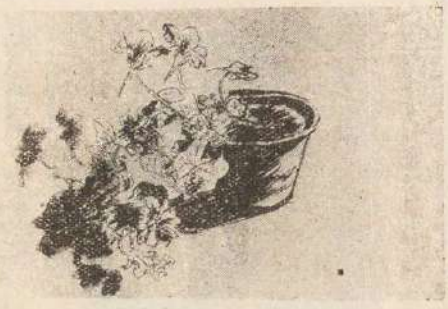
なつてから、どだいの下をさがすと、急  
にうぢ見たいな物が出ました。私はへん  
だと思つておとうさんに「おとうさんこ  
の中へはいつて見てごらん。」といふとお  
とうさんは「いやだはひるときびがわる  
い。」とおつしやいました。おひる頃にな  
つてふみ子さんの内のおとうさんが来  
たから「この中にはひつてゐるねこを出

してくれないか。」とおとうさんがおつし  
やいました。とうすけさんは「ウン」と言  
つてすぐにはひつていつてそのねこを出  
してくれました。もうおとうさんは大喜  
びですぐに茶の木の根に付けてしまひま  
した。私も一しよに行つて見ました。お  
とうさんは「とうすけさんどうもありが  
たう。これはおだちんだよ。」と言つてせ  
にをやりました。

つばめ

和歌山縣東牟婁郡 前田 俊一  
七川第一校尋六  
此の頃はだいい暖かになつたので、つ  
ばめが飛んで来るやうになつた。時々内  
の中へとまつてやかましく鳴いて居る。

つばめが飛んで来て、えん中(家の中)を二  
三度飛び廻つて居つてから薬ぶくろに  
とまつて、やかましく鳴いて居るので、  
「これはうまいぞ」と思つて、じきにな  
ぶちとくぎと板を持つて行て、つばめの  
すをこしらへにかゝつた。やつと出来上  
つて先のくすりぶくろの近くにすをこし  
らへて待つて居ると、又つばめが飛び込



(賞)生寫の木植  
東京府東老田 小石川 高木 國子



アラアラアラ  
アスコニモキタ  
イツバイキタ  
タチンボドウシ  
ハナシシテル

きのふ

茨城県結城郡 岩田 たいけ  
上山川校尋六  
しんるゐのをばさん  
ぐみもつてきた  
かみに一ぱいもつてきた

わたしと子馬

茨城県結城郡 雨甲 斐喜造  
上山川校尋六  
わたしが道を歩いてゐると  
むかふの小山にばか／＼と  
子馬の音がする  
わたしはそれをきいてゐた

ほたる取り

山梨縣西山梨郡 小島 基夫  
千代田校尋五  
ねむりながら  
ほたる取りに行つた  
ほたるが光つて

目がさめた

タバコ

茨城県北相馬郡 鈴木 徳三郎  
郡養生校高一  
學校ノタバコが花サイタ  
私ハマイパンユメニミル

向ひの國ちやん

仙臺市大町 木村 庸太郎  
五丁目一  
向ひの國ちやん  
なきだした  
やつとこ  
しつとこ  
だあまつた

山ねこ

茨城県真壁郡 小島 幸三郎  
大賣校尋五  
なかろくの  
をばさんじさ  
山ねこきたちけ  
いつて見たら  
えんの下に  
目を光らせて  
ほんにとゐた

早野先生(賞) 千葉縣山武郡 東金校高一 渡邊 誠



父

千葉縣山武郡 飯田 好周  
東金校尋六  
私の父のしやうはいは、農夫  
であります。毎日／＼くわをか  
ついで行く。朝はほうかむりを  
してすたく／＼と田をたがやしに  
行く。ひるに来る時は顔中どろ  
だらけになつて股引をくわの先  
にぶらさけて来る。色が黒くふ  
といひけをすい／＼出してゐて  
大變におつかない。ひけをそ  
るときれいになつてよい男になります。さ  
うして父は煙草が大すきで、煙草ばかり  
すつてゐる。田へ行つても休むとすぐぶ  
くりぶくりと煙を出してゐる。父はおこ  
ると一日ぶつ／＼とおこつてゐる。夜に  
なるとお湯から出て来て、はだかのまま  
眼鏡をかけて新聞を見てゐる。よそへ出  
るのも大すきで毎夜よそへ出かける。出  
かける時はこしにきせるをさけて行く。  
そうしてきせるをそこらにおくからちぎ  
になくす。

ひよこ

山梨縣北巨摩郡 小尾 ゆき子  
山西村校高一

一日からぬくとめ始めたうちの鳥は、  
ナンキンシヤモですから、卵を少くして  
八つ入れた。私は毎日／＼早くかはいら  
しいひよこがむけろばよいとばかり思  
つてゐた。にいさんも一心になつてきれ  
いな鳥小屋をこしらへた。二十日の朝も  
うみつけるかもしらんといつてづし  
（二階のやうなところ）へ上つて行つて見  
たら、卵に足と頭がついたぐらゐるのが二  
つむけてゐた。  
親のはらの下から、顔を出して「びよ  
ん／＼びよん／＼ないてゐた。  
私は思はず「むけたよむけた／＼」と大  
さわぎをした。うちの人もだちもうれしき  
うに「幾匹／＼」といつたから「二匹と  
いふと、それでは早すぎる。あしたの朝  
になると、まづ（もつと）むけるから、  
いびらないで（かまわずに）おりてろ」  
といつた。私はうれしくてはしごを下り  
た。



お母さん(賞) 岡山市岡山 女學校二年 三宅 敏子

其日學校に来て「もう  
ひよこが幾匹ばかりむけ  
つらか」とばかり思つて  
ゐた。  
いそいで學校から歸つ  
て、はしごを上りながら、  
「大へんむけたかや、ど  
う見しよう」といひなが  
ら箱のいち／＼（ま）下し  
た。  
見ると六匹むけて二つ  
むけなんだ。



□金の星講演部報告□

沖野先生の朝鮮講演巡り(第三報)

▼安州にて(六月二十一日)



奉天 北陵  
昨日平壤を引あげました。五月十日から昨夜まで四十日間に七十回の講演に三萬四千九百九十人の聴衆を得ました。昨夜は安州といふ日本人五百人位の處で話しましたが、それでも大人が百人程集りました。今日こゝで子供さん達に話して定州へ行きます。

▼奉天第一信(六月二十三日)



奉天停 本溪湖の小学校で話しました。この間は最初が満洲で、大へん自由な人には淋しい荒んだ處だと思ひますが子供達には内地よりすつとよいと云つて喜んでゐます。可愛いものです。

▼奉天第二信(六月二十四日)

奉天着後、高等女學校、小學校、矯風會、教會、公會堂で話しました。また廿五日に三回の講演があります。それから撫順に行きます。今日は小學校、中學校、女學校の先生達の會合がありました。

▼奉天第四信(六月二十六日)



正面にあるのが清國皇帝第一代愛親覺羅の玉座です。私共は昨可を得て入つ

▼本溪湖にて(六月二十二日)

朝鮮各地に於て七十六回の講演にて三萬五千二百人の聴衆を得、昨日定州といふ處の講演を了へ、滿洲の本溪湖といふ此地に來り今朝小學校にて講演致す筈でございます。昨日汽車の中は百十度の高温にて實にやりきれませんでした。本日の夕方奉天へ着きます。

▼大連第二信(七月八日)

私は大連へ來て十一回の講演を終つて明九日に新義州へ歸ります。非常に面白い印象を受けました。何れの講演も好感を以て迎へて呉れました。

▼新義州第一信(七月十一日)

一昨日新義州へ着きました。直ぐ教會で話し、昨十一日には小學校で一回公會堂で三回合せて四回話しました。明後日は義州へ行きます。

▼新義州統軍亭(七月十二日)

こゝは朝鮮と支那の界にある鴨綠江に臨んだ高臺です。今日はこゝへ行つて來ました。小學校で朝鮮人と日本人の子供五百人と、愛國婦人會と教員養成所とで三回話しました。新義州から自動車で行くのです。統軍亭から鴨綠江を見下した景は實に何とも云へませんでした。

▼義州第一信(七月十三日)

これは義州の南大門です。朝鮮と支那

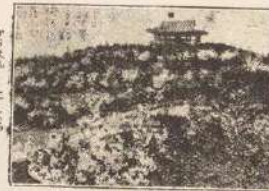
▼新義州第三信(七月十三日)



この場にあつた城廓の大門です。新義州からこゝまで四十分間、自動車で行つて來ます。道標のある所です。今日は午前九時に新義州を發して午前九時半に安東へ着きました。午前十時に發して午前十一時半に着くのは朝鮮と支那との界で時間を一時間だけ違へてあるやうです。朝鮮の十時は滿洲の九時なのです。安東で二回に千三百人に話しました。これが今度の最後の講演でせう。こゝでも常非に喜ばれました。今日まで總計百七回、聴衆四萬四千人を得ました。歸途暴風に遭ひ此の鐵橋の上から鴨綠江へ吹飛ばされさうでした。いのちからがら歸つて來ました。これから京城へ歸り一週間程休養して歸ります。六十六日

▼大連第一信(七月二日)

御無沙汰いたしました。奉天、撫順を経て大連へついたのは廿七日です。こゝでは會費一圓つづつで有料講演を三回しました。連続講演でしたが毎晩百七十人位集まりました。既に五回の講演をして、今日三回と八回の講演をしてこゝを引上けます。歸京は七月末です。九州時日の講演は小倉だけにいたしましたせう。はあとから申上げます。





間の長い旅行でしたがまだ十七八日程達んで歸ります。

### 義州第一信(七月十五日)

昨日暴風雨中の千五百人に對する講演を最後として今日は安樂にくらしてゐます。今夜京城へ行つて小さい同志の集會をします。それから金剛山を見て二十四五日に小倉へ行きます。

### 京城にて(七月十七日)

本日京城へ戻りました。そして朝鮮ホテルで切山齋護士の招待で畫食を共にして半日を過ごしました。こゝは朝鮮の皇帝が即位式を行つた所です。それをホテルの食堂にしてゐるのです。明日から金剛山に登ります。歸途九州小倉へ立ち寄り其處で四回の講演會をします。

## 野口雨情先生の講演巡り

大阪、山梨、群馬、茨城、東京等



住吉神社 井原野先生 講演會(東京) 東京府管内三十五ヶ所の報母さん方のために東京府社

▼保母童話講演會(東京) 東京府管内三十五ヶ所の報母さん方のために東京府社主催の童話講演會が六月廿四日午後五時より東鴨樓會で開かれました。野口先生の童話の一般概念に關する二時間に亘る講演がありました。當夜は特別に野口先生、主任小林囑託其他の先生方も列席されました。

▼育英校童話講演會(大阪) 南區教育會主催の童話講演會が六月二十八日午後三時より南區育英校講堂で開かれました。野口先生は童話と教育との實際について茨城縣若柳校の指導者栗野訓導の苦心談を話されました。その日は同區内の各小學校に教鞭をとられてゐる先生方四百五十名の來聴がありました。

なき批評や、平素の主張等を話し合つて陽意なき愉快な會でした。

### 實習女學校童話講演會(大阪) 西區教育會主催の童話講演會が同區高等實習女學校の講堂で六月廿九日の午後三時から開かれました。來聴者七百名、野口先生、野口先生の講演及び自作童話の朗吟がありました。

### 桃園第二校童話會(大阪) 南區桃園第二小學校唱歌室で大阪兒童俱樂部の童話會が六月廿九日午後五時半から開かれました。光りの會作の「沙がれ渡」が合唱されたり、本居先生名曲の「十五夜お月さん」が合唱されたり、野口先生が自作の童話をうたはれたり、随分愉快な會でした。

### 清水谷圖書館童話講演會(大阪) 東區清水谷圖書館樓上で一般閱覽者のために六月二十九日午後八時から野口先生の童話講演會が開かれました。童話集「星の子供」の著者小林園子、千賀子、章子さんの三人のお姉妹がお姉さまにつられて來ました。園子さんも、千賀子さんも、お姉さまも野口先生と愉快さうに童話のお話をして別れました。

### 大阪市民館童話講演會(大阪) 一般公衆のために六月三十日午後八時から北府大坂市民館で童話講演會が開かれました。野口先生は童話の起原及本質について話された後、大阪市の作曲家藤井清水先生が野口先生の民謡に作曲された「風」吹かれて、河原場との二曲を市岡高等女學校教諭堀江秀先生の獨唱に全く聴衆は酔われて了ひました。拍手は破のやうに響くやみませんでした。

### 前橋市童話講演會(群馬縣) 七月二日午後一時より群馬縣の補助のもとにめばえ社主催の童話講演會が同縣師範學校の大講堂で開かれました。西川先生の講演があり、野口先生の講演があつて、西條先生の講演がありました。當日は内務部長百濟先生を始め縣廳より各先生が列席されました。

### 童話教育講習會(東京) 神田明治會館に藝術教育講習會が開かれました。七月十三、十四の兩日野口先生の童話についての講話がありました。茨城若柳校童話指導者栗野柳太郎先生も特に上京

### 緒方氏邸子供會童話講演會(大阪) 大阪市外玉出町緒方氏邸(緒方病院長私邸)に六月廿七日午後八時より童話講演會が開かれました。この會は緒方院長の愛息惟矩さんが童話が大變好きのために御親類の子供さんや近所のお友達を會員にして作られてある會です。丁度藤森先生も來合せて童話を話されました。掲載の寫眞は、同邸庭園にて方令夫人が撮られたその時の記念撮影であります。

### 育英校童話講演會(大阪) 南區教育會主催の童話講演會が六月二十八日午後三時より南區育英校講堂で開かれました。野口先生は童話と教育との實際について茨城縣若柳校の指導者栗野訓導の苦心談を話されました。その日は同區内の各小學校に教鞭をとられてゐる先生方四百五十名の來聴がありました。

### 光りの會童話座談會(大阪) 光りの會西田董五郎氏山本政次郎氏其他會員諸氏の發金で道頓堀キャバレー、ツッ、バーン樓上で童話座談會が開かれました。忌憚

### 甲府市童話講演會(山梨縣) 七月十六日午前九時より午後五時迄ひなぎお伽會主催(望月芳郎、萩原孟夫、中村美穂の三先生組織)の童話、童話劇會が同市機山館で開かれました。野口先生の童話教育についての講演、望月先生の童話、童話劇ダリヤ、各小學校生徒さん達の童話の合唱があつて、非常な盛會でした。

### 大月童話講演會(山梨縣) 七月十七日午後一時より大月驛大月劇場で井上美成、仁科始、小林孝則三先生の主催で童話講演會が開かれました。野口先生の童話教育の意義、宮下、望月先生の童話があり、特に望月先生が大勢の少女さん方に「十五夜お月さん」をオルガンに合せて講習されました。



大月童話講演會に於ける児童





信 通

自由畫選評

山 本 鼎

△今月は、良い畫が乏しかった。いやにちよこまつた、しなびたやうな描寫か、無意味な、色を現さうとせずになやたらにクレオンを濃く塗りつけたやうな繪なんです。△物なり、場合なり、事柄なりを繪に描き現さうとするのだから、よく見たり考へたり、工夫したりして、骨を折らなければいけない。でために疑けり廻るやうに繪を描いてはいけない。△高木園子さんの寫生は、墨がうるさすぎる。殊に影があんな濃い墨のかたまりは、いやに汚く感じるばかりです。△三宅敏子さんの『針仕事をして居るお母さん』は、いいいに見え、おちついて描いて居るから、いやな氣がしない。たゞ全體として居る味(立體觀)がなくて、着物のくまなどばかり目子がつけてあるのが、印象が悪い。もつと金

體の丸味を現さうとするやり方か、單に平面的に線だけで描かうとするやり方かどつちかに統一してほしい。(此畫だけに就いては)△渡邊誠君の『早野先生』強く出て居る。しかしやたらに黒々と濃く描かなくともよい。墨は必要に對して用ひなければいけない。此繪、顔には面の印象があるが體はたゞ黒い平面だ。△川村宮さんの『花子ちゃん』女の子らしい靜かに注意深い畫だ。プロポーション(權衡)もよく、顔に個性(花子ちゃんの)がうかがはれる。△野老愛三君の『はたけ』守るぶん元氣な繪だが、氣をつけないと、と歩で『無意味』のはたけにはいりこみませ。いつも、君の眼の前にある、君の感覺の上にある色なり、形なり、トオンなり、風致なりをばつきりと感して居なければいけません。つまり、すべて、事、筆でも、色でも無意味であつてはならないですから。君は、おもしろい嘘べたい!と思つて物を喰べでせう。そのやうに、面白い描き度い!と思つて繪を描かなければ變なだけ描き度い!と「何が、何處が面白いの?」と、きかれた時返事が出來ないやうでは駄目ですから。△永井善太郎君の『正一君』良い畫です。活き、居ます。これからも少し大きな紙へ大きく描いて見ませんか。(七月四日)

幼年詩選後

若 山 歌 水

推薦にした川村宮子さんにはもう一つ歌があつた。正ちゃんころんだ  
あたりに  
わらんちのばきかたが  
さかまた  
これも誠によく出来てゐる。岡添喜久子さんのもなか、佳い。  
神戸の村岡又三君の歌に「アマノナ」といふのがあり、  
ヤアヤア、マイヘンダ  
ケガ、ノビタ  
タスケテケン、タスケテケン  
カセガフクト  
ユレル

といふのだが、これは髪をいっばいばやしした人の粉をかいてその上に書きつけてあつた歌ださうです。又三君は七歳ださうですが、うまいものではありませんか。それから紙はあまりに小さいのに書かすに下さい。いっしょに綴ぢられないので、往くも選に入れられませんか。も一つ注意。行なへるのは、意味の切れた所かへて下さい。例へば、  
丸い、月が出た  
月の影が水に  
うつつた水の  
うごくたがに月  
はかけたりなくなつたりする  
いつまで見ても

綴方の選後に

選 者

丸くうつらない  
などは、ほんとうは佳い歌だけれど書きかたが變なために選に入れません。とにかく一月ごとに皆さんが上手になるのうれしう。編輯所の庭には日がカン／＼照つてゐました。けやきの樹の新では蝉がサイ／＼ないてをります。丁度この時、金の星、愛讀者の一人がしばらくぶりにお出でになりました。愛讀者「先生! 今日は何を一生けんめいに見てゐらつしやるのですか。」  
選者「これで、これは皆さんが一生けんめいにお作りになつた綴方の原稿です。」  
愛讀者「エ、そんなによア深山!」  
選者「エ、全く深山でせう。いつもこんな山になる程来るのですから、一と通り讀むだけでも實に骨が折れます。それに中には、これ御覽なさい(とクチャ／＼に書いたキタナイ原稿を見せる)。この通り讀み悪いのがあつてもよく讀ませんから止むなく落選になります。それから句讀の切つてないのが深山あります。これも讀みにくくて困ります。愛讀者「成る程ごもつともですな。私達も投書をする時には大に注意をいたしませう。今月はいくつ作がありませうか。」  
選者「特別にすぐれてゐるといふ事は出來な

新しく出た本

◆一房の葡萄 (有馬武郎氏著) 『一房の葡萄』附けた兄弟、碁石を呑んだハツちゃん、僕の帽子のお話、など二粒選りの面白い四つのお話を集めたものです。皆さんの爲めにならない悪い空想や冒険ばかりを書き放つたありさまの面白くもないお話の多いのに書かれて、有馬氏が三人のお子さんの爲めに書かれた傑作作品です。(四六判装幀及書畫著者定価壹圓貳拾錢、東京牛久保神楽坂町二ノ一 葦文閣發行)  
◆鏡國めぐり (西條八十先生著) 昨年一年間本誌上で皆さんをやんやといはせた長篇童話『鏡國めぐり』と外に『珠のつぼ』魔法の假面『大男ものがたり』の面白い、お話を三つ集めたものです。先生の童話は先生の詩と同様に夢のやうな美しいものばかりです。殊に『鏡國めぐり』は原作が世界になりひびいてゐるものだけに一層讀んで面白く思はれます。幾帳房畫は岡本先生です。(四六判二九〇頁定價貳圓、東京早稻田大學前 霞門堂發行)  
◆傑作童話選集 (大畑匡山氏編著) 理窟を絞つた童話、意味の乏しい童話、無理な詞を使つた童話、意味の乏しい童話、無理な詞の本には流石にそんなものはいくつもありません。それはほんたうに童話と云ふものが解つた先生達の最もよいお作を集めたもので四十七篇を収めてあります。(菊半裁二七五頁定價八拾錢、東京早稻田大學前 霞門堂發行)

春野の王子

◆春野の王子 (葛原蘭氏著) 子供さん達のために常に努力してをられる著者の作になつた童話集を集めたものです。同僚會文藝會などに出される對話が大概の場合、餘興としての添へ物) になつてゐる状態なので、これをもつと深く眞面目に考へなければならぬといふ著者の意見が書かれた學校劇と童話劇集田區表神保町四〇六定價壹圓五拾錢、東京神田區表神保町四〇六定價壹圓五拾錢、東京神田區今小路二ノ一七 九段書房發行)  
◆桃色の王女 (江日子代子氏著) 青蟲のために咲き開んで居た一粒の薔薇の花を救つてやつた王女様は、國中の者から「私達の薔色の王女さま」と云はれて大へん可哀がられて居りました。隣國から來た新しいお殿様の王妃に何へんも殺されようとしたところを薔薇の花の御恩がへしの祈によつて王女の命は助かり、その上王女がうつつ變つて王女を愛するやうになつたといふ長篇童話と外に十一篇の童話を集めたものです。(四六判二一四頁定價壹圓貳拾錢、東京市麻布區新町一ノ二 竹内書店發行)



いかも知れませんが、入賞の作にはいいものがありました。第一に「飛行機」といふ作ですが、あれなどは極く短い文章ですが、それでいて実に飛行機が飛んで来た有様が描かれてゐるのです。殊に最後の「お孫出陣者ださうです」とぶつさらばうに言つたあたりは何ともいへない巧さがあります。これなどは特に工夫したつて出ない言葉です。これなどは「成程、おつしやる通りで」

「それから入賞の「妹の泣顔」といふ作ですが、これもなかなかいい作だと思ひました。得意の弟と、しくしく泣き出す妹とがばつさり書けてゐます。お父様は「お前が負けたのだな」といふはれて、泣き出すあたり、忘れる事の出来ない巧さがあります。



つきり出ていゝ事があります。しかし、たゞ一つ困るのは、無茶に使ふのでその國の人でない者には何のことやらチンプンカンプンでわからない事があるのです。これでは折角の文章がなんにもならなくて困つてしまひます。文章は自分一人で楽しむばかりでなく、人に傳へる事を目あてて書くのですから、わかりやすい事とわかりにくいものならカッコをしてその意味を書かなくてはならないと思ひます。それも制限して使つて無茶に使ふ事は非やめなくてはなりません。

### 募集童話所感

齋藤佐次郎

今度うかがひます。左様なら……(齋藤生)

今月は特に優れて面白いと思ふ童話が集りませんでした。今月の推薦は次號の分と難うございました。また先口野國人の文章を讀むやうで面白くないと思つてゐました。先生！今日はいろいろお話をうかがつて有難うございました。

合せて選をした上で決定する事にしました。それから前月號には頁の都合で選評を休みましたがその分の選評を後ればせながら掲げます。

### 金の星

### 誌友募集

「金の星」の誌友には、いろいろの特典が御座います。今や月々非常な勢で増加したて居ります。誌友規則は金の船社宛にお申込み下さい。すぐお送りいたします。奮つておはひり下さいませ。

「金の星」の誌友には、いろいろの特典が御座います。今や月々非常な勢で増加したて居ります。誌友規則は金の船社宛にお申込み下さい。すぐお送りいたします。奮つておはひり下さいませ。

### 童話の選後に

野口雨情

童話について申しましたが、皆さまが思ひ違

▼童話掲載外佳作 ▲大根屋敷のお話吉四郎(三郎) ▲栗鼠の夢(佐野二郎) ▲雲の樹の心配(北原柳吉) ▲めざして出世した話(都外川淳) ▲百合の花とチョコレイト(朝家逸) ▲狐兒(三谷公臣) ▲みどりのゆりかご(千葉新一郎) ▲蟻のお家(田中みよ子) ▲愚かな仔猫船木枳郎 ▲お月様が缺けた(丸山雄二郎) ▲旅をする子供(白木丘平) ▲王子と盤の話(安田敏政) ▲蠅の人征伐(伊藤一雄) ▲龍巻の天國(長谷川好延) ▲男猫の死(若菜鐵花) ▲砂のお城(大島重三) ▲太郎さんと金魚(川村吉美) ▲泥棒と春夫さん(大塚好之) ▲龜の清水(花世男政子) ▲三つの思返(海老澤香波) ▲江美子と草花(大村琴郎) ▲幸福の鏡(仲吉紫葉) ▲水色のお母さん(酒井猛) ▲馬鹿なお猿(山田晋一) ▲有難いお禮の話(大倉ハル子) ▲白い花(邦野房子) ▲正直靴屋(加藤登良雄) ▲八重子サント(折田純吉) ▲鮫から落ちた兄妹(作間博)

### 少年少女童話募集

前から少年少女諸君の自作童話を募集いたして来ましたが、八月號からいゝ作のある時には毎號出す事にきめて、新たにその欄をつくりました。奮つて御投稿下さい。記者

### 童話掲載外佳作

▲大島重三) ▲冬のお日傘(遠藤ひさし) ▲鳩(萬西順四郎) ▲日照堂(藤枝純男) ▲雨(中村誠一) ▲可愛い蝶々(折田純吉) ▲保ほう(丹野樹夏郎) ▲遠い灯(田中良泉) ▲桐の實(安田敏政) ▲ぞのき(長相聖人) ▲とんぼ(太田砂無浪) ▲妹のかたみ(泉信男) ▲針山(牧野眞砂子) ▲お通(渡邊一郎) ▲おまじ(拾ひ(中野忠明) ▲西瓜(佐藤榮次) ▲子うさぎ(塚城博) ▲月夜の池(武藤達夫) ▲案山子と雀(大塚好之) ▲螢との唄(横山生三) ▲かき中道光二郎) ▲月夜の海(福田ハツ子) ▲はり(遠藤好喜) ▲行水(柳重徳) ▲隣のはあさん(有賀博) ▲草包の子供(佐々木友治) ▲小猫(入江利雄) ▲蜜柑の實(西江清隆) ▲お酒盛り(林政夫) ▲胡瓜(大石良郎) ▲火事(川村吉美) ▲子) ▲酒かひ(末木よし子) ▲すゝめ(石川幾雄) ▲さよ(古澤か) ▲くも(阿部早子) ▲人物畫(鈴木雙代子) ▲夕立雲(古坂勇) ▲しま(下島今朝) ▲トナリ(依田金柱) ▲なはと(長尾村吉美) ▲教會堂の十字架(大塚博) ▲風(川村吉美) ▲はじつに(岡野良之助) ▲いちご(石山正治) ▲天の川(瀧田秀一) ▲私のうちのかき(伊原佐太郎) ▲おてんとさん(岡田うら) ▲おと(末木かみ) ▲ゴロキヤ(末木吉三) ▲夜(高橋たか) ▲犬のおにごつ(小川才子) ▲すゝめ(藤森守) ▲私の鳥高宮義郎) ▲きのう(片岡喜智司) ▲月夜の風(小林桂) ▲櫻んぼ(山口喜) ▲おちつたぐみ(廣江せい) ▲ネコ(島居勉) ▲かほのみづ(楠山静夫) ▲大根(岸本サダ) ▲マツチ(吉井とも)



ひのないやうに、一言申し添へておきませう。  
△私の云ふ郷土童話の郷土といふ意味は、単  
に田舎とか田園とかいふ都會に對する意味で  
はありません。故郷といふ意味です。例へば、  
大阪で生れて大阪で暮してゐる人は大阪が郷  
土です。私のやうに茨城県で生れて茨城県で  
暮だつたものは茨城県が郷土です。それと同  
じやうに東京のかたは東京が郷土、京都のか  
たは京都が郷土です。

### 講師野口雨情先生講演日程

▽兵庫縣灘住吉小學校(夏期童話講習會) □八月六日より  
▽茨城県女子師範學校(夏期童話講習會) □八月廿四日より

△誰だつて故郷はあります。故郷をはなれて  
他國に暮してゐる人でも、生れた土地だけは  
戀しくて忘れることは出来ないものです。又  
生れた土地で暮してゐる人は尙更のことその  
土地に深い親しさを持つてゐます。その親  
しさの土地の言葉で書かれてある子供の語が  
郷土童話なのです。一口に云へば、仙臺の言  
葉で書かれたのが仙臺の郷土童話(おてんと  
さん)の童話の如き)茨城縣の言葉で書かれ  
たのが茨城縣の郷土童話(若柳小學校兒童童話

### 野口先生の古い童話に「鈴蟲の鈴」といふの がありましたが、その中に「貸したら返さぬ、 あーかんべい」といふ言葉があります。處が、 「貸したら返さぬ」では教育上いけないこと 考へから或る學校では「貸すのはよければお 氣の毒」と變へて讀んでゐます。面白いでは ありませんか。

▽皆さん! 沖野先生のおたよりの中で奉天の  
第四信を特別に注意してごらん下さいまし。  
番兵が信をしまつたり、調査がお金をくれ  
少つて言つてゐる處がありますから。  
▽茨城縣では今年縣下の各小學校で童話を正  
科として、自由にやつてよいといふおふれが  
出しました。縣廳が進んで童話をしやうれい  
してゐる縣は外にはありません。さすが野  
口先生の郷里だけあります。

### 岡本歸一

○愛讀者の皆様から、御丁寧な書中の御見舞  
状や、御旅行の途中からお便りを下さいまし  
て有難う御座います。  
是非御返事を差上げなければなりませんので  
すが、途中から下さいます方には、御禮も差  
し上げ様がありませんので、誌上で厚く御禮  
申し上げます。  
何れ近い内にそれも、御返事差上げる心算で  
居りますが、齋藤主幹が申された仕事成金は、  
大變おまげがありますが、文字通りの全時間

鼻「蠅の唄の如き」山梨縣の言葉で書かれ  
たのが山梨の郷土童話(多摩小學校兒童創作  
童話の如き)と云ふやうに、その土地々々の  
言葉で書かれたのが私の云ふ郷土童話なので  
す。

△大きい意味で云へば、日本の言葉で書かれ  
たのが世界に對する郷土童話とも云へます。  
自分が生れた土地の言葉で書くことばどうし  
てゐるのでせう。日本人が日本の言葉をつ

かふことがわるいと云ふなら、郷土童話はわ  
るいかも知れません。それでない限り、標準國  
語といふ狭い範圍だけしかつかつてはいけな  
いと云ふことは、あまりに童話の自由を束縛  
した窮屈な議論です。  
△童話は自由です。様式も言葉も自由です。  
拘束も囚はれもない所に童話の眞の意義があ  
ります。以上はまた郷土童話の意味の理解に  
ならないお方の誤解のないやうにと、ここ  
に一言申し上げたわけです。

を仕事にとられてゐますので失禮を重ねてゐ  
ます。  
又いるにも、地方の御土産を御贈り下さいまし  
た方々にも、不敢取御禮申上げましたが、重ね  
て感謝をいたします。

△お伽話ばがきの事で御問合せを受けて居り  
ますが、第二集も随分前にとしたのですが未  
だ出来なりました。近々なんとか解決を  
つける心算で御座います。左様御よくみ下  
さい。皆様の健康を祈ります。



編輯室より

△暑中でお暮しですが、愛讀者の皆様にはお  
變りもなくお暮しのこと存じます。海や山  
の面白いお便りを下さいます。編輯室で毎日  
忙しく暮して居りますが、私どもには、皆様の  
便りが何より楽しみです。  
△金の星とありますから、愛讀者の皆様  
から激勵のお手紙を毎日のやうに頂戴いたし  
まして何ともお禮の申様もございません。お  
かけさまで「金の星」はますます「発展」いたし  
て参ります。金の星」時代に比べますと、遙か  
に発行部数も増しました。もう二三月の内  
には目ざましい発展をいたします。  
△講演部の沖野先生と野口先生は講演めぐり  
で此の界にも拘らず、非常にお忙しお暮し  
です。沖野先生は朝鮮滿洲地方の講演を終へ  
られて歸り途には九州小倉にお立ち寄りになり、  
其處で四回の講演をなさいます。また野口先  
生は、再び關西地方へ童話宣傳の旅にお出か  
けになります。

△級方掲載外佳作 △賢ちゃん(西塚文  
雄) △僕ばさびしい(三上好次) △土曜日(西川  
富己子) △とし子さん(葛西アイ子)  
△飄漚した足(宮川よし) △昨日の約束(糸川  
一郎) △福生(小林順藏) △夜の電車通(井上  
新平) △今朝(吉川シツ) △おそろしい夜(神田  
美恵子) △お父さんがなくなつた(加藤コウ)  
△おめやさん(三井しずみ) △二階の窓から見  
た景色(松本通保) △まぐれ牛(入江と) △小  
鳥のたまご(山本みゆき) △へいたい(つこ  
加藤徳喜) △山火事(武田寛) △私の兄弟(島  
野政子) △凍る朝(大塚一也) △機織(鹿島喜  
勝) △雀の集(濱谷誠) △この門のお(澤アサ  
子) △六月の一日(永井勇) △お母さん(神田  
武男) △おとなりのゆたかさ(花岡光子) △  
私の机(内田繁作) △きしや(雨野イサ子) △  
いつか(中橋保造) △私のうち(辻克己)

▲自由欄掲載外佳作 △木(石橋正三) △  
石屋さん(牧野忠之) △妹(林田三男) △母ト訓  
母ノ夕涼(廣谷殊枝) △サトイモ(松崎茂吉) △  
すいらん(アサ子) △高木しげ子 △早野先生  
(柴原草) △姉さん(伊谷政雄) △海岸通の西洋  
人(長川長治) △女の子(高木蘭子) △お姉さん

△(宅敏子) △人(岩崎孝) △弟(林田三男) △オ  
バント(トギシ村上清夫) △机の上(濱谷誠) △  
馬(山下賢太郎) △燗草盆(金田秋雄) △なかに  
し(今井キミ子) △バラの花(高木しげ子) △よ  
つちや(牧野忠之) △妹(戸田高木) △牧場後  
藤前(三) △鏡(深谷達也) △品川(久保存)  
△草花(藤田テツ子) △花(太刀川悦子) △花瓶  
とゆのみ(依田正義) △寫生(皆葉和郎) △夏  
帽子(加藤重夫) △飛燕(ほり) △淵上(キミ)  
△なわとび(田村隣子) △鳥(白土嘉雄) △お客様  
(菅原真) △團扇(長谷川) △電話(宮越  
光雄) △キエロ(宮澤定) △山野(本吉誠) △  
札幌のホヱラ街(高田順治)

▲金の星誌友 △東京 佐々木高明君 ○  
神奈川 村上清夫君 ○東京 永 卓介君 ○神  
岡 渡邊正規君 ○鳥取 伊谷きよ子君 ○栃木  
岡井健一君 ○東京 桑原長太郎君 ○長野 堀  
口友君 ○兵庫 池川長治君 ○東京 小田隣君  
○長野 飯島一市君 ○茨城 藤原俊男君 ○岩  
手 渡邊幸君 ○茨城 高橋五村君 ○群馬 左  
部 隆男君 ○宮城 荒川陽一君 ○長野 今村美  
知君 ○北海道 小鹿しづ子君 ○兵庫 中戸陽市  
君 ○朝鮮 高橋三郎君 ○福島 佐々木光子  
君 ○静岡 白柳武雄君 ○神奈川 船瀬健一君  
○東京 白木克良君 ○函館 柳澤静子君 ○東  
京 永野泰雄君 ○岡山 日比野澤子君 ○山梨  
三井七瀬君 ○山形 片桐ちよ子君 ○奈良 下司  
榮君 ○岩手 菅野都子君 ○長野 近藤政風君  
○山形 飛塚安吾君 ○長野 福澤末子君 ○山梨  
長坂正木君 ○東京 宮崎すみ子君 ○山口 木浦  
泰亮君 ○大阪 南都子君 ○神奈川 中西富  
二郎君 ○松山 加藤都子君 (以下次號)





りよだ者嬢

▼今朝ほどは入選の賞をお送り下さいました。有難う御座いました。学校の行きに本屋で金の星をなもとめましてお休み時間に何気なく本を開いて見ました時びっくり致しました。私のあの下手な童話が入選になつてゐるのを見て、もう嬉しくてたまりませんでした。心から感謝致します。末ながら「金の星」が暮の空に輝く美しい「金の星」となつた事をお喜び致します。(柳宗川 小澤登子)

▼金ノ星ハオモシロイ  
メニナツアオモシロイ  
買へ〜 何チ

(岐阜 大熊一)  
▼過日當地に講演會開催の節は、御祝電を戴きまして誠に有り難う存じました。講演の順序は次の通りで御座いました。

- 民話の意義 渡邊波光氏
- 民話の本質 藤森秀夫氏
- 民話と俗謡の差異 野口雨情先生
- 武蔵野と民話 野田史光氏
- 童話の普及 野口雨情先生

野口先生がお話し下さり殊に御自作の民話童話朗吟は誰しも豫期してゐなかつた事として、非常に喜んだやうでした。(埼玉 松本秋三)  
▼校長室の前を通ると、先生の乳の上に「金

「ひとう九之助」から山後日課「法螺くらべし」着屋と狐「家なき子」などが面白いものでした。中でも「雨粒」は今迄にない面白いものでした。「ひとう九之助」のやうなものもいつか読んで見て面白いです。それから山後日課「弟や妹は一番好んでゐるやうです。この後兄は狸に殺されるだらうか」とうるさく聞かれて弱りました。「法螺くらべし」志村さんのもので一番いと信じます。話には有名ですが、書き方がうまいのでうつつと讀ませます。「着屋と狐」投書家らしいやうですがしつかりしてゐます。大家の作品と比べても遜色はありません。家なき子」は殊に妹が目子さんと島田信一さんのものなどいいものでした。東京 寺川信一

▼編輯室のお庭の菊の木の柿の木もともに若葉に美しく輝いてゐる事で御座います。先生皆様方も御機嫌よくお過ごし遊ばしてあらつたやいませうと存じます。(中略)金の星」本當に何ていふ名を御座います。その優しくもまた美しい名を御座います。心が躍るやうで御座います。例ひどのやうに名が廻りまして。(中略)お志によつて教へられ導かれて幸ある道な歩んで参ります。金の星」の全國に於ける名譽をどんなに誇らしく朝な夕な小さな耳に聞く事で御座います。私の童話をおのせ下さいまして本當に有り難う存じます。夢やないかしら夢ならばいつまでも、榮めずに行いと思ひました事で御座いますけれど、それが現実である事を知りました時の喜びはとも言葉では申上げられ

の船」の七月號がのつてゐました。私はよくいやら、口惜しいやら、その本をなげ出した様な氣持が致しました。金の星」をどうして自分の物にしてしまったんだのでせう。残念でありません。(秋田 高桑 豊)

▼勉強に努れてどつか机の前に坐つた時、私の手はひとり「金の星」の所に走つて行きました。あゝ「金の星」よ！ お前は私を慰めてくれる唯一のものだ。五、六月號を通じて面白いと思つた童話は、犬塚、泣き、天使、見えなくなつた篇、居眠り玉様、大頭領様へ、小島の仙吉、篇、お話裏りです。終りに二瓶けい子、伊藤温子、志村照子三氏の活躍を望みます。志村照子さん、あなたに志村榮子さんの御姉妹ではないでせうか。(青森 葛西順四郎)

▼何となく、心清くなりけり  
空にかきやく金の星見て (大阪都外川淳)

▼記者先生、御一同お慶りは御座いますか。私は達者でビシ／＼してゐますから御安心下さいませ。それから土橋方さんは大の方です。それとも私達と同じ位な方でですか。お手数ながらお答へ下さい。(京都 森澤福子)

▼わぞ／＼お見舞下さいまして有難う存じます。記者一同至極元氣でゐますからご安心下さい。土橋方さんは今年十八になられるお方で御座います。(記者)

▼先日突然、「金の船」が「金の星」と改題されて本屋の店頭に見られた時、私はビックリ致しました。その後、各新聞紙上で訴訟になつてゐるとの記事が出てゐたのを讀んで二度と

ません様で御座いました。神戸 二瓶けい子)  
▼貴藤先生のお作を長く拜見してませんが、どうぞいつかの「海若史物語」のやうなものをお書き下さいませんでしやうか。(茨城少年)

▼私の大好きな美しい「金の星」がもう来てゐるだらうと思ひつゝ、學校から歸つて見ると改題した等の「金の船」が来てゐる。私を天國に運んでくれる歸一先生の繪もない。あまりの驚きに本屋にかけつけました。するとまあ童話雑誌のタイトルに「金の星」が輝いて居



(金の船社内編輯室)

るだらうと思ひつゝ、學校から歸つて見ると改題した等の「金の船」が来てゐる。私を天國に運んでくれる歸一先生の繪もない。あまりの驚きに本屋にかけつけました。するとまあ童話雑誌のタイトルに「金の星」が輝いて居

ツクリ致しました。あの「落した銀貨」の作者、優しい心の持主と信じてなりました横山先生の不徳義から「金の船」の尊い名譽を傷つけるやうになり遂に、發行権の差押へと云ふ悲しい事實が具體的になつて私達の目前に現れた事にまたビックリ致しました。七月號の野口先生の「童話選後」の悲痛なしかも博い愛を感じる様なお言葉の通り、大正八年十月以来の御奮闘而して「金の船」の面目は實にキンノソノ社にあるのではなくて「金の星」にあるのです。假へ名は變つても「金の船」であつた「金の星」に接する事の出来ぬの喜びを減す爲に、「金の船」の摸滅を望んで下ります。(中略)何卒「金の星」の爲に御奮闘下さい。野口先生本居先生岡本先生神野先生及記者様方の御健在を祈ります。六月十五日の新聞に、野口先生が貧民窟の子供たちの爲に童話の朗吟やお話をなさる事が出てなりました。私は涙ぐましくなる程嬉しく思ひました。(東京 吉川芳野)

- ▼キンノソノ
  - キンノソノ
  - ドクシテモコラシテモ
  - キンノソノ
  - メカフニヒカル
  - アナイ キンノソノ
- 寒い空の北星が、寮のエルムの梢に高く輝ける時、私は言ひ知れぬ懐しさを知ります。(札幌 S.生)

りました。記者様！ 本當に有り難う。でも「金の船」がいつの間にか来たんでせう。にこにこしいわね。私は大きな體になつて、目立って美しくなり行く。「金の星」をどうして離す事が出来ませんの。妹といつても愛讀してゐます。(神戸 金子茂登子)

▼「金の星」が益々よい本になりますので皆大喜びで御座います。弟はいつ月なかなばになりまして、本屋へお百度をふんだり、電話を五通も六通もかけますので、母はいつもあの子は「金の星」で苦勞すると思つてゐる位です。何を言つてもすぐ賣切れで御座いますから。(大阪 大島虎之助)

▼六月號に見ました田中氏の「籬の瓜がなくなる話」は、いつか東京日々マガジンに出てゐた支那の「欲ばり商人と梨の話」と同じ材料なのでせうか。それとも外の材料から取られたのでせうか、お伺ひ致します。(姫路 畑野榮三)

▼あの童話の出所は「今昔物語」ださうです。日々マガジンに出たのは「聊齋志異」といふ本の中にあるものでせう。(記者)

▼私は心から「金の星」の發展をお祈りする者で御座います。何卒諸先生には益々御奮闘遊ばして私達愛讀者を導いて下さいませ。私は拙い童話や童話を投稿いたす考へで御座います。さうして愛讀者が一人でも多くなる様にと思つてゐます。私は先生にお禮申さなければなりません。九月號ほどんに充實して下さう。私達愛讀者に喜びを與へる事でせう。一日も早く發行せられん事をお待ちいたして居ります。(山梨 木村達)



# 懸賞創作募集

自由少年詩 山本 鼎先生選  
 幼年詩 若山 牧水先生選  
 綴方 編輯部選

〔意注〕 課題は何でもかまひません。諸君の日々見たり、感じたりすることから、諸君の好きなものを諸君の好きなやうに畫なり、詩なり、文なりにして書いてください。一人で何題出してもかまひませんが、姓名は、學校や學年(または住所と年齢)ことにおとさないやうにしてください。用紙は自由紙(なるたけ費用紙に、幼年詩や綴方はなるたけ原稿用紙(または半紙)に書いてください。よく出来た方には「金の卵」特製の賞品を差上げます。次號締切は八月廿八日(その以後は次號へ廻る)發表は十月號、宛名は東京市外田端三百五十一番地金の船社

童話 齋藤 佐次郎先生選  
 話 野口 雨情先生選

〔意注〕 童話は二十字詰二百行以内、童話は十五行以内、優秀な作品は「推薦」または「特選」として發表いたします。推薦の場合は童話には五圓、童話には二圓づつ、特選の場合は童話には拾圓、童話には五圓づつ賞金として呈します。但し少年少女の創作童話にして「入選」の場合は「金の星」賞を呈します。締切、發表、宛名は少年少女の創作と同じです。原稿には必ず住所姓名を記して下さい。原稿はお返しいたしません。

## ◆一船讀者の創作◆



## 朝鮮から

伊吹子と明次とに別れた熊田先生は、四日目の夜の十時頃に、朝鮮の釜山といふ港へ上陸しました。始めて朝鮮の土を踏んだ熊田先生の眼には、總てのものが珍らしく見えました。眞白い着物を着た朝鮮人の間に黒つばい日本服を着た男を見付ける度にそれが商造ではないか知ら? と思つて眼を見張るのでした。

釜山の宿で一夜を明した熊田先生は、翌

定價 壹册 參拾錢 送料 壹錢  
 三ヶ月分三册(送料共)九拾錢  
 半年分六册(送料共)壹圓八拾錢  
 壹ヶ年分十二册(送料共)參圓六十錢  
 但し四月號九月號は特別號で廿五錢新  
 年號は四十錢です。御注文の節は  
 この分だけ必ず加へてお拂込み下さい  
 振替口座東京五九五六六番

〔意注〕 御注文は必ず前金で御拂込み下さい  
 金 送金は振替が一番便利で御座います  
 の切手代用は(零錢切手)一割増しです  
 注 第何巻第何號よりと書いてください  
 住所姓名はつきり書いてください  
 廣告料は御照會次第お答へ致します

大正十一年八月六日印刷納本(毎月一回)  
 大正十一年九月一日發行

編輯兼發行人 齋藤 佐次郎  
 印刷所 東京市小石川久野町百八番地  
 印刷人 大橋 光吉  
 發行所 金の船社  
 振替口座東京五九五六六番  
 電話小石川五三三八七番

(本誌に於ては) 三十五圓



る日海岸に出て行つて、小船を一々注意して見ましたが、赤く塗つた牛若丸の舟らしいものは何所にも見當りませんでした。

三日目の朝、釜山から汽車に乗つて馬山といふ港へ行つて、その教會で話をする事になりました。其の途中、三浪津で汽車を乗替へた時、一人の海軍士官と並んで坐つたので、ひよつとすると、此の士官が赤い舟を見たかも知れないと思つて、訊いて見ましたが、士官は笑ひながら、

「知りませんネ、どうも敵の艦隊以外のものは、吾々の目に入りませんから。」と云ひました。

熊田先生も、餘り突飛な質問だつたと思つたので、思はず笑ひました。けれどもそれが縁になつて、二人は心を打明けていろ／＼の事を語り合ひました。

昔、加藤清正が虎を退治たといふ昌原の山を眺めながら、海軍士官はこんな

事を言ひました。

「其の牛若丸の舟に乗つて、行方不明になつたといふ人は、或は鎮海灣に来てゐるかも知れませんよ。彼所では此間スタンダード石油會社で二三十人の船頭を備つたといふ話ですから。」

それを聞いた熊田先生は、其晩馬山でのお話を終つて、翌朝早く小蒸汽船に乗つて鎮海灣へ行つてみました。小蒸汽船が港へ着いた時直ぐ港に繋いである小舟を注意して見ましたが、商造の舟らしいものは見えませんでした。けれども勇氣を落さないで、あちら此方と調べてみますと、不圖此町の面長さんに會つた時、微かな手がかりを得ました。面長さんといふのは、村長さんの事です。

「あア、其人は確かに來ました。スタンダード石油會社に水夫を募集した時、琉球の方から十人ばかり參りました。其中に商造さんといふお方も居ました。」



面長さんが然う言つたので、熊田先生は飛び立つ程喜んで、早速石油會社の方へ行つて尋ねてみますと、事務長が帳面を調べて、

「えエ、來てゐます。しかし其のお方は、今元山の方に行つて居ります。」と申しました。

「元山のどちらに居らつしやいますか。」

熊田先生は胸を躍らせながら訊きました。

「元山の港に此所の支店がありますから、其所でお尋ね下さい。」

事務長はさう言つて忙しさうにまた書きものをし初めました。

「有難うございました。」と言つて、お禮を申して歸つた熊田先生は、宿へ行つて旅行案内を調べて見ますと、鎮海から海を渡つて馬山へ出て、そこから元山までは六十六ヶ所の停車場がある程遠い所でした。で、元山のスタンダード石

油會社支店宛に手紙を出して置かうかと思ひましたが、折角此所まで來て、手紙だけで、要領を得なかつた時は、熊野に居て、毎日々々商造の便りを待ち焦れてゐる明次や伊吹子が可哀さうだと思つたので、たうとう決心して其日直ぐ馬山の港へ渡つて、其所から元山行き汽車に乗りました。汽車に乗る時、停車場で繪葉書を一枚買つて、

お父様は元山港に居るといふ事を、今日知りました。私はこれから六十六の停車場を通過して、其の元山まで參ります。そしてお父様にお會ひして、詳しいお話を聞いて御知らせ致します。今日から一週間後には屹度楽しい手紙が、あなた方の御手に届きませう。お待ち下さい。おツ母さんによろしく。

左様なら、明ちゃん、伊吹ちゃん。

と書いて郵便函へ投げ入れて置きました。



熊田先生は汽車の窓から、變つた朝鮮内地の風俗や、美しい山や緩やかに流れる川を眺めながら、幾つもの驛を過ぎて、成歡の驛まで來ました時、窓から外を眺めると、松林の中に高い石碑が立つてゐました。

「あれは何ですか。」と隣りの老人に訊きますと、

「あれは日清戦争の時討死した松崎大尉の碑ですよ。」と答へました。

熊田先生は子供の時、小學校で松崎大尉の唱歌を教はつたことを思ひ出ししました。

汽車は段々と京城へ近づきました。有名な漢江の鐵橋を渡る時は、もうほのぼのと人の顔の見分け難い頃でしたが、水のほとりて白い着物を着た子供が五六人流れに石を投げて遊んでゐるのが見えました。

京城へ着いて、そこで一晩宿つて、町を一通り見物しましたが、先づ第一に

宿の近くにあつた南大門を見て驚きました。屋根の上に龍鬼子といふ小さいお猿のやうな人形が並んでゐるのを見た時、熊田先生は電燈の下で寫生しました。

「何といふ立派な門だらう？　こんな門は、京都にも奈良にもありはしない。」

熊田先生はこんな事を呟きながら、宿へ歸つて、直ぐ南大門の繪葉書を伊吹子と明次宛に送りました。

其の翌日の朝風く汽車に乗つて、いよ／＼元山に向ひました。午後の三時過ぎに三防といふ驛へ着きましたが、其邊の景色は何とも言へない美しいものでした。廣々とした山の中には白い羊が草を食んでゐました。こんもりとした森の中には赤い上衣を着た男の子や女の子が、木の枝に吊したブランコに乗つて活潑に遊んでゐました。

たうとう其夜の十時前に元山へ着きましたが、餘り疲れてゐるので、宿に泊



つて町の事情を女申さんに尋ねたり、スタンダード石油會社の支店のある所を訊いたりして、寝みました。そして翌朝夙く起きて會社の支店へ行つて商造が居るか何うかと尋ねますと、事務員は帳簿を調べてみて、

「そんな人は來てゐませんよ。」と無愛想に申しました。

「否エ、鎮海灣で、確かにこちらに居らつしやると伺ひましたのですが……」

熊田先生は失望する自分を勵ましながら問ひ返しました。事務員は水夫の合宿所へ電話をかけましたが、

「鎮海灣からさういふお名前の水夫が來る事は來ましたが、それは今、長徳島の方へ行つて居るさうですから、そちらへ御出て下さい。」

事務員はさう言つて、其のまゝ出て行きました。で、小舟を雇つて長徳島へ行つてみると、其所には會社らしい家も何も見えませんでした。どうした事だ

らうと思つて、詳しく調べて見ますと、今朝此の支店から浦鹽うらしほの方へ出帆する船に乗つて、水夫が十五人程旅立つたといふ事でした。それにしても長徳島に居ると云つたのは、何の間違ひか知らと思つて、いろいろ訊きりましたが、さつぱり理由が解りませんでした。で、急いで汽船會社へ行つて取調べてみますと、スタンダード會社の備員の一人として、商造も浦鹽の方へ渡つた事が知れました。

「長徳島に居るなんて、そんな事を聞かなかつたなら、商造さんに會ふ事が出來たかも知れないのに。」と思つたので三度目に支店に行つて訊いてみると、今朝出會つた事務員が居て、

「失禮致しました。本當に失禮致しました。あなたがお尋ねになつたお方は、今朝浦鹽へ行きました。私の所へ電話をかけた男が、確かに長徳島に居ると云



つたので、然う申上げましたが、實は電話の間間違ひで、浦鹽へ行く船の長徳丸に乗つたといふ事でした。」と申しました。

「まア、さうでしたか、その船は何時頃に出帆したのですか。」

「あなたがお出でになつた頃は、まだ出帆前でした。」

「さうですか、では私が小舟に乗つて、長徳島へ渡る時、汽笛を鳴らして出た、あの船が長徳丸でしたか。」

「えエ、さうですよ。あの船に乗つてゐたのです。」

それを聞いた熊田先生は足摺をして後悔しました。けれども致し方が無いので、商造が何時頃浦鹽へ着くか、又は何日頃に此の元山へ歸つて來るかといふ事を詳しく聞いて宿へ歸りました。

折角此所まで來たのに、會へないで此まゝ引返すといふ事は、如何にも残念

で堪らないと思つたので、明次と伊吹子宛に手紙を書きました。

伊吹ちゃん、明ちゃん。私はこゝまで參りました。私は鎮海灣で、あなた方のお父様が居るといふ事を聞いた時、本當に嬉しうございました。けれども商造さんは元山へ行つたとの事で、たうとうこゝまで來ました。

此所は朝鮮の北の方で随分冬は寒いさうで港は氷が張りつめるといふ事です。商造さんはこゝの石油會社の支店に居られると聞きましたので、今朝御面會に參りましたが、一寸の時間の都合で、御目にかゝる事が出来なかつたのです。それは本當に残念で堪りませんでした。

私が會社へ行つて尋ねますと、商造さんは長徳島に居られると言ふので、直ぐ小舟に乗つて長徳島に行つて見ましたが、其所には人ツ子一人見えませんでした。どうした事かと思つて引返して聞いて見ますと、長徳丸といふ船に



乗込んでゐられたのです。

長徳丸と長徳島との電話の間違ひから、會社の人は私に、そんな違つた事を教へたのでした。私がもし長徳丸へ訪ねて行つたなら、商造さんの旅行を無理に引留めてゞも、詳しい御話を聞くのでしたが、悲しい事には、私が長徳島から歸つて來た頃は、もう船は遙か沖合の方を走つてゐました。

伊吹ちゃん、明ちゃん、本當に残念で堪りませんでしたよ。私は男泣きに泣きながら、後の高い山に登つて海の方を見てゐました。そして小さい聲で何度も何度も「商造さん……商造さん……」と呼んで見ました。

山の上は公園のやうになつて、それは／＼景色のよい所でした。其所に居た朝鮮の若い人に訊くと、日露戦争の時、コサツク騎兵が此所まで攻めて來たといふ事でした。

「あの向ふの松原の所まで、ロシア兵は攻めて來たのです。」

朝鮮人の青年は、さう云ひながら松原の所を指さしました。見れば私共の立つてゐる足許には、浅い溝のやうなものがありました。それは日本兵が作つた塹壕さかださうです。

「あの向ふの高い山を御承知ですか。」と青年は私に尋ねました。

「いゝえ、知りません。」と私は申しました。

「あれは望徳山と云つて、昔、お國の加藤清正が、私共の先祖と戦争をした時、登つて富士山を見たといふ山ですよ。」

朝鮮の青年は、何だか昔の事を想ひ出して怨めしいやうな眼色をして私を見ました。眼の下には虎島半島と、葛麻半島が左右にあつて、長い突堤の向うには、スタンダード石油會社の倉庫の屋根が白く光つてゐました。



青年は私にこんな事を申しました。

『あの陸地から海の中に、ずつと細い地面の續いて居る處を鮮天橋と申します。あれは土地です。橋ではありません。けれども其の理由はかうです。昔、昔、其の昔、神様が紀州の熊野の串本浦と大島とへ大きな橋を架けようと思ひ立ちまして、先づ其所へ橋の杭を造りました。』

青年が此所まで申しました時、私は、

『僕は其の橋杭村の近くに住んでゐたものです。』と言ひますと、青年は吃驚して私の顔をじろく見てゐました。

『それから、其の杭を何うしたのです?』と私は尋ねました。

『神様は橋杭を造つて置いて、其の橋を此の元山で造りましたが、餘り遠過ぎるので、あのみ、に残して置いて、丹後の國で又た一つ造つたのです。所が、

夫れを紀州へ持つて行かうとした時、神様は急にお腹痛を起して、橋の工事を中止してしまつたのだといふ事です。』

青年はさう言つて、につこり笑ひました。私も笑ひました。それから私共二人は三十分間程一緒に山の上を散歩しましたが、其の青年は、一週間程前まで、スタンダード石油會社の方で働いてゐた人ださうで、商造さんの事を話しますと、よく知つてゐました。

それで、私は商造さんの事とあなたの方の事を詳しく話して頼んで置きました。

青年の名は申金陵ウキノカミと申します。朝鮮元山港百三十一番地で手紙は届きます。

あなた方からお頼みの手紙を出して置いて下さい。商造さんが浦鹽から歸つたなら、直ぐ其の申といふお方が尋ねて行つて下さるさうですから。

伊吹ちゃん、明ちゃん、私は残念ながらこれから歸ります。私の居る所は釜





### お嬢様の心配

「私心配でならないわ」と仰しやるお嬢様に何で御座いませうと訊ねる。「今チヨコレットを買ひに這つたのに蘇水の……といふことを言ひ忘れたの」と仰しやる。

森永製菓株式会社

山と定りました。私は釜山に長く居るやうになりましたから、釜山の教會へ歸つたら、其所から手紙を差上げます。

おツ母さんに御手紙を下さるやうに申して下さい。高造さんの御歸りになった都合で、私は今一度元山へ行つても宜しいと思ひます。

浦鹽から御歸りになるのは二三ヶ月後だと申しますから、其中には私の用事も、すつかり片付きます。左様なら。

明ちやん、毎日曜には必ず日曜學校へ行らつしやい。

伊吹ちやん、おツ母さんの御用を御助けなさい。そして日曜學校の歌の組をもつとく盛んにして下さい。あなたの百合の歌を今一度聞たいと思ひます。

熊田先生は此の手紙を書いて、直ぐポストに入れました。そして、其の晩の汽車で釜山へ歸る事にしました。





大正十一年六月十三日  
 (第三種郵便物認可)  
 大正十一年六月六日印刷  
 大正十一年九月一日發行(毎月一回一日發行) 本

東京金の船社發行

◆三越の社會奉仕事業◆  
 ◆三越マーケットの新設◆

八月五日より三越呉服店の五階にて開設

三越マーケット特色

- 一、値段が安い事
- 二、品質が良い事
- 三、商に於ける人々には賣らぬ事
- 四、賣用品の外一切賣らぬこと

◇ 目 品 販 販 ◇

◆木綿類……新銘仙、双子、紡織織、遠州藩  
 織、縮緬、七折、縮、木綿、真地、縮緬  
 布圍、地、白、紺、白、紺、白、紺、白、紺  
 ◆雜貨類……元布、餅子、傘、シヤツ、襪又  
 靴下、傘、紙、履物、小兒服、石鹼、手袋、  
 ハンカチーフ其他  
 ◆食器、食料品、養所用具……罐詰、砂糖、  
 菓子、罐頭、茶、乾物、より、産物、まで、一切  
 ◆洋服類……準備中に付、近々、差加へます

刻下の大問題たる物價調節に即かたりと、貢獻するには賣用品の徹  
 底的廉價提供を致します外に策がないと存じます、社會奉仕として  
 三越マーケットの内容が如何に充實せるかは非御一覽を御願申す  
 但し電話の御注文は午時手御断り申します

東京  
  
 三越呉服店